

まち の まえ い せき
町ノ前遺跡

土地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2024

宮崎市教育委員会

まち の まえ い せき
町ノ前遺跡

土地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2024

宮崎市教育委員会

宮崎市文化財調査報告書第144集『町ノ前遺跡』正誤表

頁	場所	誤	正
目次	第I章第5節	5	7
	第22図	23	24
	第29図	31	30
20	61		
28	14行目	173・74・76	173、174、176
72	図・表	図1	第14表
		表	第15表



町ノ前遺跡上空写真（南側）



町ノ前遺跡上空写真（北側）



SA3 検出状況



SA3 カマド部遺物出土状況



SB4 完掘状況

序

宮崎市は九州の南東部に位置します。宮崎県の県庁所在地として、時代と共に変化する社会情勢と向き合いながら、新たな可能性を求め、改革を推進しています。そうした中、市内では様々な開発事業が行われていますが、その開発予定地の中には遺跡（埋蔵文化財）と呼ばれる、われわれの先祖が残した生活の痕跡が地中に眠る場所があります。

本書で報告する町ノ前遺跡は、宮崎市南部の清武町にありました。丘陵の造成計画に伴って発掘調査を行った結果、今から約8千年前の縄文時代から人々が住みはじめ、平安時代には長大な掘立柱建物や大型の竪穴建物が検出されました。布目や黒色に磨いた土師器や中国の輸入陶磁器も出土しました。中世には祭祀に使われた施設も見つかっています。

遺跡に隣接する官道は、宮崎平野と都城盆地を繋ぐものです。町ノ前遺跡が立地した丘陵は、行き交う物資の集積地だったのかも知れません。大きな竪穴建物にはどんな人物が住んだのでしょうか。調査で分かったことを通して、更に研究が深まるきっかけになれば幸いです。

町ノ前遺跡の発掘調査は、台風や強風、猛暑が現場を襲い、特に台風に伴う豪雨は丘陵下が被災し、復旧まで中断期間を余儀なくされました。こうして報告書の刊行に至ることができたのも、厳しい環境の中発掘作業に携わった方々のご協力によるものです。末尾ではございますが、この場を借りまして心よりお礼申し上げます。

令和6年3月

宮崎市教育委員会
教育長 西田 幸一郎

例 言

1. 本書は、宅地造成に伴って実施された、宮崎県宮崎市清武町加納に所在する町ノ前遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本業務は、株式会社マエムラに委託され、現地の発掘調査を令和元年6月10日から令和2年3月25日に実施、その後整理作業を令和2年度と令和3年度にかけて実施したのち、令和5年度に報告書作成作業をおこなった。

3. 調査組織は以下のとおりである。

調査主体 宮崎市教育委員会

令和元年度（発掘調査）

文化財課 課長 富永 英典
調査総括 主任技師 井田 篤
調整事務主査 稲岡 洋道
庶務事務主事 高田 真帆
調査員主査 金丸 武司
嘱託員 佛山 由香
古田 矩美子

令和2年度（整理作業）

文化財課 課長 白坂 敦
整理総括 主任技師 井田 篤
調整担当主査 秋成 雅博
庶務事務主事 高田 真帆
整理担当主査 金丸 武司
会計年度任用職員 沼口 常子
雀ヶ野 亮

令和3年度（整理作業）

文化財課 課長 白坂 敦
調査総括 主任技師 秋成 雅博
調整担当主任技師 石村 友規
調査員 副主幹 金丸 武司
会計年度任用職員 沼口 常子

令和5年度（整理作業）

文化財課 課長 町田 英則
整理総括 主任技師 秋成 雅博
調整担当主任技師 西嶋 剛広
庶務事務 会計年度任用職員 野津原広枝
整理担当 副主幹 金丸 武司
会計年度任用職員 沼口 常子

4. 現地の発掘調査を実施するにあたり、遺構に対する放射性炭素年代測定を株式会社古環境研究センターに、現場の空中写真撮影を株式会社理蔵文化財サポートシステムに業務委託した。
5. 発掘調査後の整理作業に併行して、一部の出土遺物の図化、並びに出土鉄製品の保存処理作業を株式会社イピソク九州支店に委託した。

6. 現地における測量、及び遺構の図化作業は、金丸、佛山、古田、鬼束芽依（西南学院大学）、末海菜月（別府大学）が行った。
7. 遺物の実測・トレース作業は、委託した遺物以外は宮崎市埋蔵文化財センターにて金丸、沼口、古田、朝川千聖及び会計年度任用職員（スポット整理作業員）が行った。
8. 現地における写真撮影は金丸と佛山が、出土遺物の写真撮影は金丸が行った。
9. 本書の執筆や編集は金丸が行った。なお、第4章は株式会社 古環境研究センターが執筆し、章立て等細部を金丸が修正した。
10. 本書の執筆にあたっては、以下の方々よりご指導を賜った。
柴田博子（宮崎産業経営大学） 今塩屋毅行 堀田 孝博（宮崎県埋蔵文化財センター）
11. 本書で使用する北は真北である。
12. 土色の表記は『新版 標準土色帳』に依拠した。
13. 出土遺物及び掲載図面及び写真、記録等は宮崎市教育委員会で保管している。資料の閲覧・利用に関しては、事前に宮崎市教育委員会までお問い合わせいただきたい。
14. 本発掘調査にかかる文書手続きは以下のとおりである。

（平成30年度）

工事通知（文化財保護法第94条）	平成30年11月9日	宮教文第729号1（進達）
	平成30年11月20日	宮教文第729号3（伝達）

（令和元年度）

着手報告（文化財保護法第99条）	令和元年5月14日	宮教文第169号1
終了報告	令和2年3月31日	宮教文第169号7

目次

本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	地理的環境	1
第2節	歴史的環境	1
第3節	調査に至る経緯	2
第4節	調査の概要	5
第5節	土層堆積	5
第2章	調査の成果	8
第1節	縄文時代の調査成果	8
第1項	概要	8
第2項	検出遺構	8
1.	陥し穴状遺構	8
2.	石錘集中遺構	8
第3項	出土遺物	8
第2節	弥生古墳時代の調査成果	8
第1項	概要	8
第2項	出土遺物	11
第3節	古代の調査成果	13
第1項	概要	13
第2項	検出遺構	13
1.	竪穴建物	13～19
2.	掘立柱建物	19～26
3.	柱穴群	26～27
4.	土坑	27
5.	その他	27
第3節	出土遺物	27～34
第4節	中世の調査成果	35
第1項	概要	35
第2項	検出遺構	35

1.	掘立柱建物	35
2.	土坑	35
3.	道路状遺構	36
4.	ピット群	36
第3項	出土遺物	36～39
第5節	近世の調査成果	43
第1項	概要	43
第2項	検出遺構	43
1.	造成	43
2.	掘立柱建物	45
3.	溝状遺構	45
4.	ピット群	46
5.	経石	47
6.	土坑	51
第3項	出土遺物	51～56
第6節	確認調査	56
第1項	概要	56
第2項	出土遺物	56～57
第3章	自然科学分析	70
第1節	はじめに	70
第2節	試料と方法	70
第3節	測定結果	70
(1)	$\delta^{13}\text{C}$ 測定値	70
(2)	放射性炭素 (^{14}C) 年代測定値	70
(3)	暦年代 (Calendar Years)	70
第4節	所見	71
第4章	総括	73

挿図目次

第1図	周辺遺跡分布図	2
第2図	調査区位置図	3
第3図	検出遺構分布図	4
第4図	検出面層位図	5

第5図	陥没谷地滑り部土層断面図	6
第6図	縄文時代遺構分布図	8
第7図	陥し穴状遺構実測図①	9
第8図	陥し穴状遺構実測図②	10

第9図	石鍾集中遺構実測図……………11	第34図	中世遺構分布図……………35
第10図	出土石鍾実測図……………11	第35図	SB5実測図……………36
第11図	縄文～古墳時代出土遺物実測図…12	第36図	SC11実測図……………37
第12図	古代遺構実測図……………13	第37図	SC12実測図……………37
第13図	SA1実測図……………14	第38図	SC11・SC12出土遺物実測図…38
第14図	SA1出土遺物実測図……………15	第39図	SG1実測図……………39
第15図	SA2実測図……………16	第40図	SG1出土土器実測図①……………40
第16図	SA3・SA4実測図……………17～18	第41図	SG1出土土器実測図②……………41
第17図	SA3出土土器実測図……………20	第42図	中世出土遺物実測図(地滑り部)…42
第18図	SA3出土遺物実測図……………21	第43図	近世遺構分布図……………43
第19図	SA4土坑実測図……………22	第44図	SB6実測図……………44
第20図	SA4土坑内出土遺物実測図…………22	第45図	SB7実測図……………45
第21図	SB1・SB2実測図……………23	第46図	柱穴内出土遺物実測図……………46
第22図	SB3実測図……………23	第47図	SE1実測図……………47
第23図	SB4実測図……………25	第48図	表土出土遺物実測図①……………48
第24図	SB出土土器実測図……………26	第49図	表土出土遺物実測図②……………49
第25図	柱穴群出土遺物実測図……………27	第50図	確認T・地滑り部出土遺物実測図…50
第26図	SC10実測図……………28	第51図	地滑り部出土遺物実測図……………51
第27図	SC10出土遺物実測図……………28	第52図	遺構内出土土器実測図……………52
第28図	古代出土土器実測図(陥没谷)①…29	第53図	表土出土遺物実測図③……………53
第29図	古代出土土器実測図(陥没谷)②…31	第54図	表土出土土器実測図④……………54
第30図	古代出土土器実測図(地滑り部)①…31	第55図	確認トレンチ出土遺物実測図①…55
第31図	古代出土土器実測図(地滑り部)②…32	第56図	確認トレンチ出土遺物実測図②…56
第32図	古代出土土器実測図(地滑り部)③…33	第57図	出土土器実測図……………57
第33図	古代出土土器実測図(地滑り部)④…34		

表 図 版

第1表	出土土器視察表(1)……………58	第9表	出土土器視察表(9)……………66
第2表	出土土器視察表(2)……………59	第10表	出土土器視察表……………67
第3表	出土土器視察表(3)……………60	第11表	出土鉄製品視察表……………67
第4表	出土土器視察表(4)……………61	第12表	出土陶磁器視察表(1)……………68
第5表	出土土器視察表(5)……………62	第13表	出土陶磁器視察表(2)……………69
第6表	出土土器視察表(6)……………63	第14表	町ノ前遺跡の放射性炭素年代測定結果…71
第7表	出土土器視察表(7)……………64	第15表	町ノ前遺跡の暦年孝正マルチプロット図…72
第8表	出土土器視察表(8)……………65		

写真図版

巻頭図版1 上空写真(南側・北側)

巻頭図版2 SA3検出状況、SB4完掘状況

図版1 町ノ前遺跡陥し穴状遺構写真……76

図版2 陥し穴状遺構、
石錘集中遺構、SA1 ……………77

図版3 SA2、3 ……………78

図版4 SA4、SB1～4、SC12 ……………79

図版5 SC11、道路状遺構、
SB5、近世遺構 ……………80

図版6 縄文・弥生・古墳、SA1、3遺物 ……81

図版7 古代出土遺物 ……………82

図版8 古代、中世、近世、
確認調査遺物 ……………83

第 I 章 はじめに

第 1 節 地理的環境

町ノ前遺跡は、宮崎市南部の清武町加納地区に分布する、独立した丘陵上にある。丘陵はシラスを基盤層としており、それ故に丘陵の際には切り立った断崖が形成されている。周囲にも同様の丘陵が広がっており、それら丘陵の平坦地には岡ノ屋敷遺跡、家次遺跡、清武町古墳など埋蔵文化財包蔵地が分布していた。なかでも家次遺跡は「加納遺跡」として、戦前に京都大学による発掘調査が行われたが、戦後に大規模な土地開発が行われ、前述の埋蔵文化財包蔵地の大部分は、発掘調査による記録保存がなされることなく消滅してしまっており、現在では緩やかな起伏を持った住宅地が広がっている。その中で町ノ前遺跡は、これまで開発が行われることなく、従来の地形が残されていた。

第 2 節 歴史的環境

町ノ前遺跡周辺の埋蔵文化財包蔵地分布は（第 1 図）のとおりである。

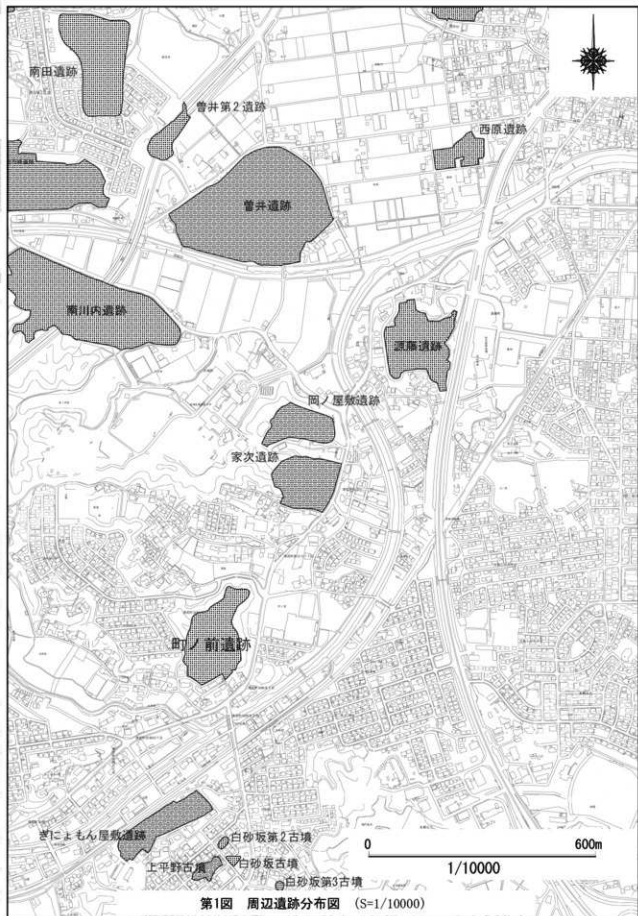
遺跡周辺で最も古い遺跡は旧石器時代から縄文時代早期にかけて営まれた源藤遺跡が挙げられる。旧石器時代は中原型のナイフ形石器と角錐状石器が出土し、縄文時代早期は複数の炉穴が検出され、早期前葉にあたる別府原式土器が出土している。この時期、清武町域では船引地区をはじめ台地上に多数の遺跡が分布しており、その辺縁に位置する加納地区も集落が営まれたと考えられる。

縄文時代後期は曾井遺跡が挙げられる。遺構は確認されていないが、造成層や攪乱層より後期前葉から中葉の土器が多く出土した。この時期清武町域では船引上ノ原遺跡では中期後半から後期前葉にかけて、竹ノ内遺跡では後期中葉から晩期にかけて大規模な集落の存在が確認されており、曾井遺跡もそれらの集落と交流のあった集落の存在が窺える。

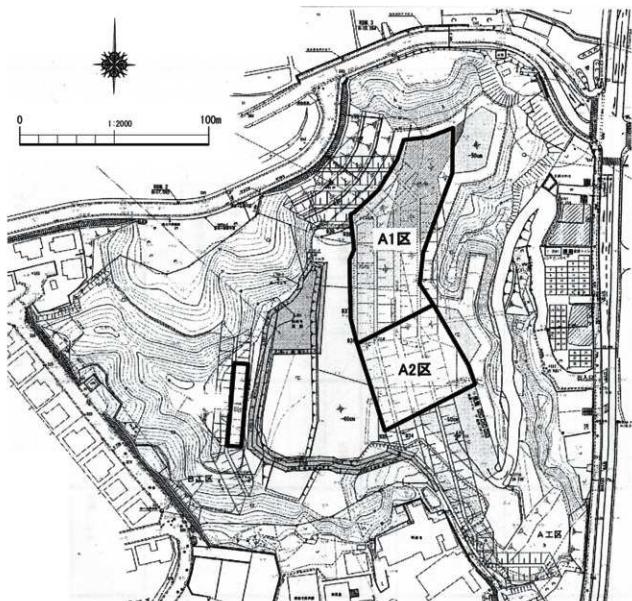
弥生時代は、源藤遺跡、家次遺跡、曾井遺跡が挙げられる。源藤遺跡からは弥生時代後期の集落跡が確認されている。家次遺跡、曾井遺跡は遺構は確認されなかったが、中期以降の土器が多量に確認されたことから集落の存在が窺える。丘陵の間には八重川が流れているため、その水利を利用して丘陵下で水稲耕作を行う集落が、当時林立していたと推測される。

古墳時代は、曾井遺跡、源藤遺跡が挙げられる。現在加納地区に高塚古墳は存在しないが、曾井遺跡の台地上には前方後円墳が存在し、大正の削平時に方格規矩四神鏡、鉄剣、玉類、貨幣が出土した、との伝承がある。他に八重川の南岸にも上平野古墳、白砂坂古墳、白砂坂第 2 古墳、白砂坂第 3 古墳等の高塚古墳が分布する。横穴墓は曾井遺跡より 2 基検出した。平成 29 年の発掘調査では鉄鏡が出土しており、その形態から 6 世紀後半と考えられる。このほか源藤遺跡からは 6 世紀代の集落が確認されている。

古代は官道が整備され、加納地区にも国道 269 号線に沿って設置されたと推定する説もあるが、木花地区熊野（救麻駅）経由で杵掛に至ったとする説もある。平安時代末期から鎌倉初期における日向国内の荘園やその領主について書かれた「日向国凶田帳」を見ると、町ノ前遺跡周辺は鳥羽上皇の皇女八条院の領有する国富荘の「加納」に含まれている。この八条院領国富



第1図 周辺遺跡分布図 (S=1/10000)



第2図 調査区位置図 (S=1/2000)

荘はこれ以降皇室領となる。

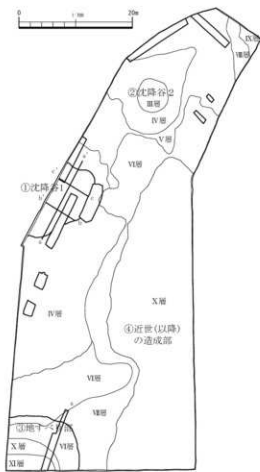
古代の遺跡としては曾井第2遺跡が挙げられる。検出された周溝状遺構について、発掘調査報告書では弥生時代の可能性を示唆しながらも古代としている。発掘調査では土師器、布痕土器が主体となる中で緑軸陶器も出土しており、官道など古代の物流の拠点であった可能性が窺える。周辺の弥生時代・古墳時代の遺跡が多く分布しながら古代の遺跡は少ない。なお船引地区においては清武上猪ノ原遺跡より掘立柱建物を主体とした集落が確認されている。

中世に入る直前、国富荘は平頼盛に安堵された後、南北朝期に大覚寺統が領有となった後、鎌倉幕府滅亡後に足利氏に配分された。足利尊氏が派遣した畠山直顕は穆佐城に本拠を置き支配を広げるが親応の擾乱で直冬方に付き逃亡した。それ以後、宮崎平野南部は伊東氏と島津氏の抗争が繰り返されることになる。

中世の遺跡としてはぎにょもん屋敷遺跡、源藤遺跡、清武城跡、曾井遺跡、曾井第2遺跡が挙げられる。ぎにょもん屋敷遺跡は畠山直顕と同時期に日向入りし、国富荘を拝領した細川小四郎



第3図 検出遺構分布図 (S=1/400)



第4図 検出面層位図 (S=1/700)

義門の居住地と伝えられるほか、南北朝期における南加納政所の推定地でもあり、確認調査では大量の土師器が出土した。源藤遺跡は、現地の石造物の碑文から『日向国史』にある初瀬寺が置かれたと考えられる。清武城跡と曾井城跡は南北朝期に築城され、戦国期には伊東四十八盟に数えられた山城跡である。清武城は清武一帯の支配と共に飢肥攻めの後詰めとなった城であり、城内には戦国期に日向支配の基盤を築いた伊東祐堯の墓も置かれる。曾井遺跡に築かれた曾井城は宮崎平野南部の交通の要衝を防御する役目を担っていただけでなく、九州征伐後は駐留した黒田如水によって大規模な改修が行われたとされる。平成29年の発掘調査では、北側斜面より大規模な断面V字状の空堀が検出されたが、報告書ではその改修の結果と推測されている。曾井第2遺跡は曾井城麓に存在したとされる瑞雲寺の推定地であり、寺院と思われる建物跡や溝が検出された。

近世、加納地区は飢肥藩に含まれることとなった。近世の遺跡としては、曾井第2遺跡において中世から続く寺に多くの石塔が建立されたほか、源藤遺跡にある初瀬寺は名を最勝寺と変えて近代まで存続した。両遺跡からは経石も確認されている。

近代は丘陵下に加納小学校（その後清武町と統合。現在の加納小学校は1985年に再び創設）が創設された。また町ノ前遺跡に隣接する明榮寺は、大正十三年に創建されている。

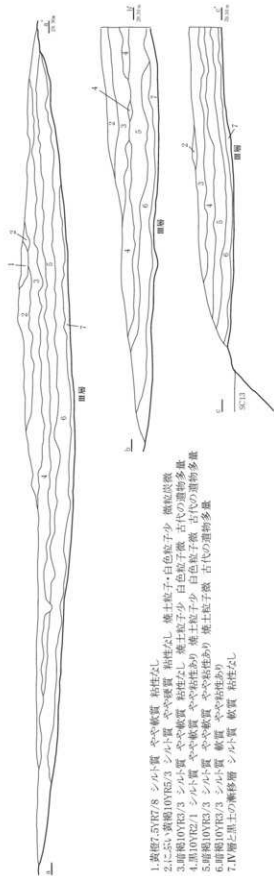
第3節 調査に至る経緯

町ノ前遺跡は、開発計画に伴って平成12年度、14年度に清武町教育委員会、平成22年度に宮崎市教育委員会が確認調査を実施した。どの調査でも試掘坑から多量の遺物・遺構が確認され、調査後に原因者と埋蔵文化財の取扱いについて協議を行なったが、諸般の事情により開発は実施されず、丘陵は旧来の姿のままであった。

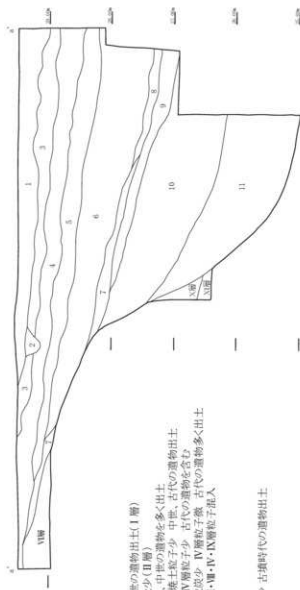
平成27年度、株式会社マエムラより丘陵を大規模に削平する計画が照会された。市文化財課は、これまで実施した確認調査の結果から埋蔵文化財の保護について協議を行ったが、丘陵を道路とほぼ同じ高さまで削平する計画であったため、埋蔵文化財は消滅を免れないと判断されたことから、原因者負担による記録保存として、発掘調査を実施することとなった。

第4節 調査の概要

町ノ前遺跡が分布する丘陵はシラスを基盤層とすることから、発掘調査を実施するにあたっては崩落防止のために掘削予定区域のうち丘陵の崖際から5～7m離し、その内側を調査対象地とした。また発掘調査を進めるうえで、調査区を南北に二分し、調査の前半と後半で調査区



1. 粘層7.5VR7/8 シルト質 やや硬質 粘性なし
2. 1.55 黄褐色10YR5/3 シルト質 やや硬質 粘性なし 焼土粒子・白色粘土少 微粒出露
3. 暗褐色10YR3/3 シルト質 やや軟質 粘性なし 焼土粒子少 白色粘土微 古代の遺物多量
4. 10YR2/1 シルト質 やや軟質 やや粘性あり 焼土粒子少 白色粘土微 古代の遺物多量
5. 暗褐色10YR3/3 シルト質 やや軟質 やや粘性あり 焼土粒子微 古代の遺物多量
6. 暗褐色10YR3/3 シルト質 軟質 やや粘性あり
7. IV層と黒土の移行層 シルト質 軟質 粘性なし



1. 暗褐色2.5Y5/2 シルト質 やや硬質 粘性なし 中世、近世の遺物出土(1層)
2. 1.55 黄褐色10YR5/4 シルト質 やや硬質 粘性なし 焼土少(1層)
3. 灰黄褐色10YR4/2 シルト質 やや硬質 粘性少しあり 古代、中世の遺物を多く出土
4. 褐色10YR4/1 シルト質 やや硬質 粘性にとむ 微粒出露、焼土粒子少 中世、古代の遺物出土
5. 1.55 黄褐色10YR5/3 シルト質 やや硬質 粘性にとむ IV層粒子少 古代の遺物を含む
6. 1.55 黄褐色10YR4/3 シルト質 やや硬質 粘性なし 微粒出露 IV層粒子微 古代の遺物多量
7. 1.55 黄褐色10YR6/3 シルト質 やや軟質 粘性にとむ VI・VII・IV・IX層粒子混入
8. 暗褐色10YR3/3 シルト質 やや硬質 粘性にとむ
9. 黒褐色5YR3/1 シルト質 やや硬質 粘性にとむ
10. 暗褐色10YR4/1 シルト質 やや硬質 粘性にとむ
11. 1.55 黄褐色10YR7/4 シルト質 IV層主体 黒色土粒子少 古墳時代の遺物出土

第5図 陥没谷・地溝り部土層断面図 (S=1/60)

域と廃土置き場を入れ替えて実施した。調査はバックホウで西側をIV層（アカホヤ火山灰層）またはIV・V層（牛乃脛ローム層または縄文時代早期遺物包含層）、東側の段下をX層（シラス層）上面付近まで掘削した後、人力によって遺構検出を行ったが、後述するように調査区の土層堆積は凹凸が多かったために沈降谷や地滑り部は人力で底面まで掘削することとなった。そのため、安全性を考慮して地滑り部は検出面から約2mの時点で幅1.5mの段を設けた。なお、遺構掘削についても安全が確保できなかった井戸は掘削を行わなかった。

第5節 土層堆積

町ノ前遺跡の土層堆積は宮崎平野に分布する丘陵の堆積とは異なる部分があるため、ここで説明を行いたい。

基本土層は、I層：表土層、II層：暗褐色シルト質層（攪乱層）、III層：黒色～暗褐色シルト質層（中世、古代、縄文時代後期の遺物包含層）、IV層：明黄褐色細粒砂層（アカホヤ火山灰層）、V層：黒褐色シルト質層（牛乃脛ローム層）、VI層：暗褐色シルト質層（ローム層、縄文時代早期の遺物包含層）、VII層：黒褐色シルト質層（霧島小林軽石）、VIII層：茶褐色粘質層（ローム層）、IX層：暗黄灰色砂質層（VIII層とX層の漸移層）、X層：黄灰色細粒砂層（シラス層）、XI層：暗褐色粘質層である。

調査区の層序は宮崎平野の丘陵部では普遍的な土層堆積である。ただ、X層は少なくとも3m以上も堆積しており、削平工事の露頭からXI層の下位は宮崎層群を確認した。つまり、調査区は宮崎平野の丘陵部に堆積する黄褐色粘土層、礫層、アワオコシ、イワオコシ等の堆積が欠落しているのである。

これに加え、調査区内は水性作用と思われる浸食の痕跡を各所で確認した。第4図は調査区内における縄文時代早期以外の遺構検出面を表した図である。図中の①は直径約25mに及ぶ沈降であり、III層上面は深さ約2m落ち込んでおり、窪みは古代に遺物廃棄場として利用された。この沈降はIV層・V層では更に2m近く落ち込んでおり、落ち込みの中央は水穴と繋がっていた。②も沈降であり、II層が直径約10m、III層がやや歪な、長軸約20mを呈する楕円形の落ち込みが形成されていた。沈降の中心にはSA1が確認されたが、この部分ではIV層・V層も約0.4m落ち込んでいた。このような沈降による水穴は、先に紹介した土層の欠落やシラスの分厚い堆積と相関するものと推測される。

調査区南西隅で検出された③は、調査区外にまで及ぶ、直径約20mを超す地滑りの痕跡である。地滑り部分ではIV層からX層が消失しており、その地滑り面の上に、古墳時代の遺物を含む黒色土を主体とする攪乱層が確認された。故に地滑りは古墳時代～古代初期までの間に発生し、そのせいでできた斜面に付近を掘削した造成土を埋めたと考えられる。この斜面は古代から中世にかけて遺物廃棄場となって高密度に遺物を含む層が形成され、近世に平坦地となっている。また④は近世、もしくはそれ以降に行われた造成によって形成された「段」である。造成部分はX層まで掘削されており、それ以前に存在した遺構は消失した可能性が高い。

このように、宮崎平野の丘陵地でもっとも海側に面する町ノ前遺跡は、丘陵部の一般的な土層堆積に類似する一方で堆積土層の欠落があり、沈降や地滑りの痕跡も残される。こうして、町ノ前遺跡の立地する丘陵は独自の堆積状況となっている。

第2章 調査の成果

第1節 縄文時代

第1項 概要

縄文時代は、早期と後期の遺物・遺構を確認した。早期は8基の陥し穴状遺構が調査区全面に分布する。遺物包含層はSA3付近の平坦面を調査したが、遺物は少量であり多くは造成土中の出土である。後期は陥没谷の南側斜面に石錘の集中を認め、遺物もその周囲で出土した。

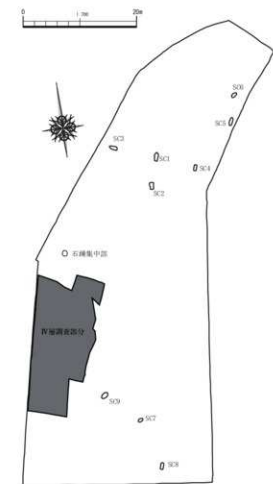
第2項 検出遺構

1. 陥し穴状遺構

9基検出した。上段から6基検出されたが、そのうち5基は調査区中央より北に分布していた。下段から3基検出されたが、近世の削平を大きく受けていた。底面にはいずれも2ヶ所の逆茂木痕を確認したが、上段南部で検出されたSC9は12ヶ所確認した。ただ観察すると、長軸沿いに3基並び、その周囲に9ヶ所の小穴が取り囲むように配されている。

2. 石錘集中遺構

沈没谷の南側斜面、IV層上面から検出した。振り込みを伴わないが、直径約50cmの範囲



第6図 縄文時代遺構分布図 (S=1/700)

に6点の石錘が集中していた。石錘は扁平な円礫を用い、長軸の両端部に加撃し挟りを設けた打欠石錘である。周囲から市来式土器が出土したため、縄文時代後期の遺構と考えられる。

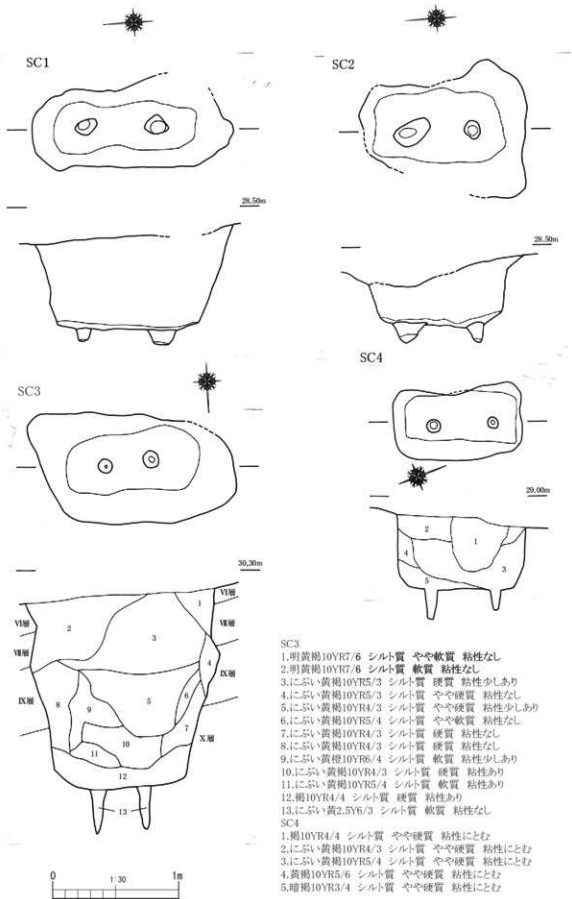
第3項 出土遺物

7～9は早期である。7は楕円押型文土器である。8、9は山形押型文であり器形から手向山式に比定される。10～16は後期である。10の口縁直下の連点は宮之迫1・2式、11～16は市来式にあたる。石鐮は掲載されたものも含めて7点が確認されているが、後世の遺構からの出土が多いため時期は定かではなく、弥生時代である可能性も含めて検討が必要である。

第2節 弥生・古墳時代

第1項 概要

弥生・古墳時代の遺構は確認されていないが、遺物が陥没谷と地すべり部分から少量出土している。



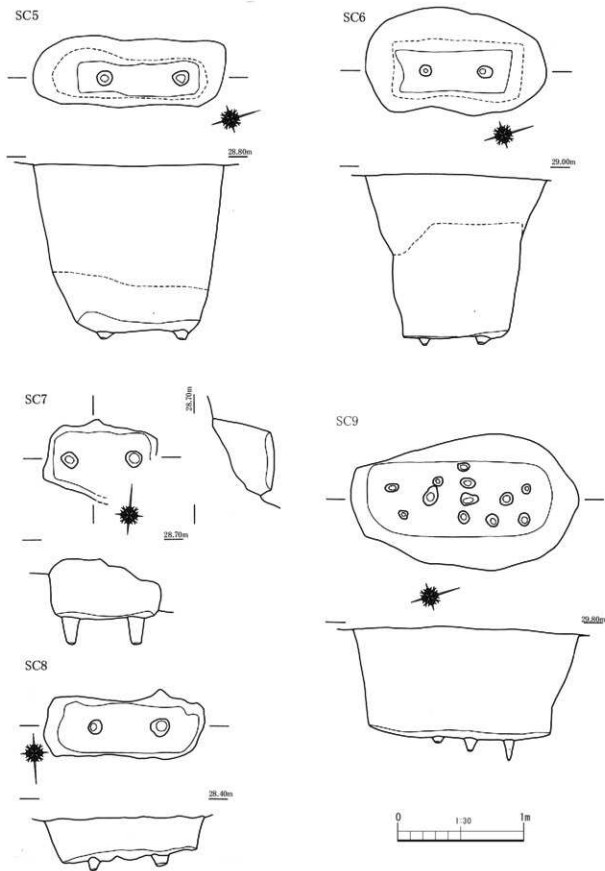
SC3

- 1.明黄褐10YR7/6 シルト質 やや軟質 粘性なし
- 2.明黄褐10YR7/6 シルト質 軟質 粘性なし
- 3.にぶい黄褐10YR5/3 シルト質 硬質 粘性少しあり
- 4.にぶい黄褐10YR5/3 シルト質 やや硬質 粘性なし
- 5.にぶい黄褐10YR4/3 シルト質 やや硬質 粘性少しあり
- 6.にぶい黄褐10YR5/4 シルト質 やや軟質 粘性なし
- 7.にぶい黄褐10YR4/3 シルト質 硬質 粘性なし
- 8.にぶい黄褐10YR4/3 シルト質 硬質 粘性なし
- 9.にぶい黄褐10YR6/4 シルト質 軟質 粘性少しあり
- 10.にぶい黄褐10YR4/3 シルト質 硬質 粘性あり
- 11.にぶい黄褐10YR5/4 シルト質 軟質 粘性あり
- 12.褐10YR4/4 シルト質 硬質 粘性あり
- 13.にぶい黄2.5Y6/3 シルト質 軟質 粘性なし

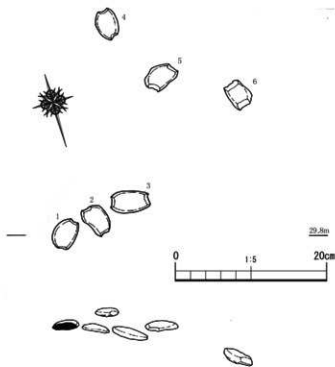
SC4

- 1.褐10YR4/4 シルト質 やや硬質 粘性にとむ
- 2.にぶい黄褐10YR4/3 シルト質 やや硬質 粘性にとむ
- 3.にぶい黄褐10YR5/4 シルト質 やや硬質 粘性にとむ
- 4.黄褐10YR5/6 シルト質 やや硬質 粘性にとむ
- 5.暗褐10YR3/4 シルト質 やや硬質 粘性にとむ

第7図 陥し穴状遺構実測図① (S=1/30)



第8図 陥し穴状遺構実測図② (S=1/30)

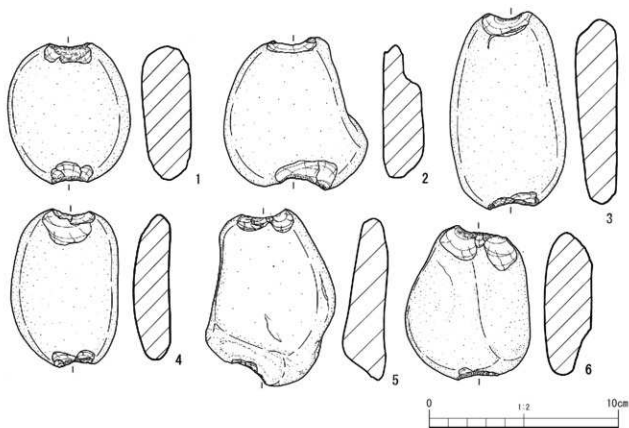


第9図 石鏢集中遺構実測図 (S=1/5)

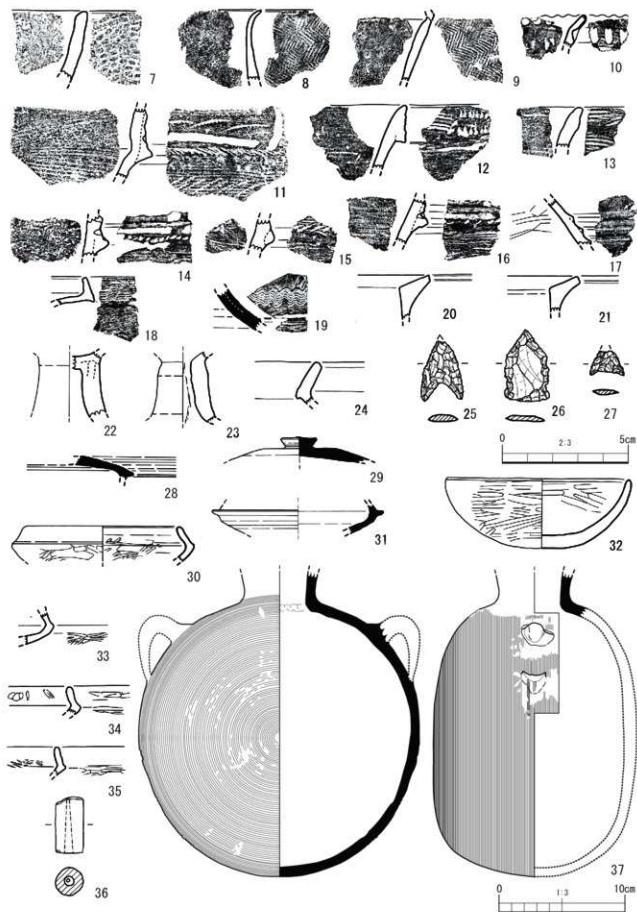
第2項 出土遺物

17、18、20～23は弥生時代である。17、18は壺、20、21は甕、22、23は高坏である。いずれも中期後半～後期に該当する。19、24、29～37は古墳時代である。33～35は坏、29～36は模倣坏である。なお36は碧玉製の管玉である。37は提瓶である。2単位の把手は欠損しているが、本来はアーチ状の把手が存在したと考えられる。

弥生時代・古墳時代の遺物は、陥没谷と地滑り部から出土した。特に37は地滑り部の底面付近から出土した。



第10図 出土石鏢実測図 (S=1/2)



第11図 縄文～古墳時代出土物実測図 (S=1/3, 石織は2/3)

第3節 古代の調査成果

第1項 概要

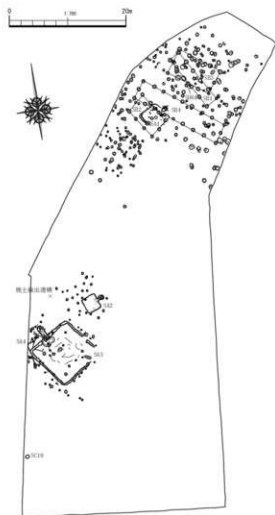
古代の遺構・遺物は調査区北部と南部に分かれて分布する。遺構は、北部には掘立柱建物4棟、竪穴建物1軒、柱穴群が、南部には竪穴建物3軒ほか、土坑、焼土を伴う不明遺構が分布する。このうち北部から確認された掘立柱建物は9間×2間と大規模なものであるほか、南部から確認されたSA3は8.6m×9mとこれも大規模なものである。また検出された4軒の竪穴建物はいずれも煙道が平面プランより突出している点も特徴といえる。

遺物は、沈降谷1や南西に位置する地滑り部から多く確認された。これらの窪地は廃棄場と考えられる。土器廃棄場を中心に出土した遺物は土師器の坏や甕が多く確認されたが、布痕土器もかなりの割合を示すこと、宮崎平野では希少な白磁や灰軸陶器、緑軸陶器が一定量認められること、ヘラ削りの丸底を呈する坏が認められること、黒色土器の中に内湾器形の鉢形や皿形など、独特な器形を呈するものが認められることなど、特徴的な様相を見ることが出来る。

第2項 検出遺構

1. 竪穴建物

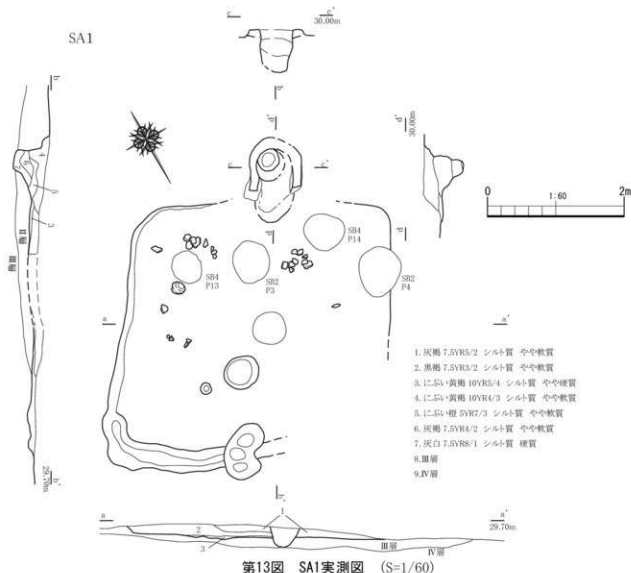
4軒検出した。SA1は北部に、残り3軒は南部に分布していた。



第12図 古代遺構分布図 (S=1/700)

SA1

調査区北西部、沈降谷2の中央で検出した。沈降谷の周囲は後世の削平を受けていることから、SA1が存在した頃は明確な窪地の上に建っていたと考えられ、敢えてそのような地形を選地したものと推測される。遺構は長軸4.2m、短軸3.7mの方形を呈すると思われるが、遺構は全体的に浅く、南壁で確認した壁帯溝が南東部では消失しており、遺構東部も壁の立ち上がりを確認できなかった。これはⅢ層上面を遺構検出面と見て表土剥ぎを行ったことが原因である。遺構に貼り床はなかった。柱穴は入り口と考えられる部分と中央やや南寄り1基ずつ確認したが、それ以外は確認できなかった。カマド周囲も同様に平面プランが明確ではない。遺構の隅北壁中央で認められたカマドの体部に用いられた白色粘土を手掛かりに確認した状況であった。このカマドは北壁中央にあり、燃焼部には一段下がる焚口が認められた。煙道は床面プランから約1m突出しており、煙道で認め

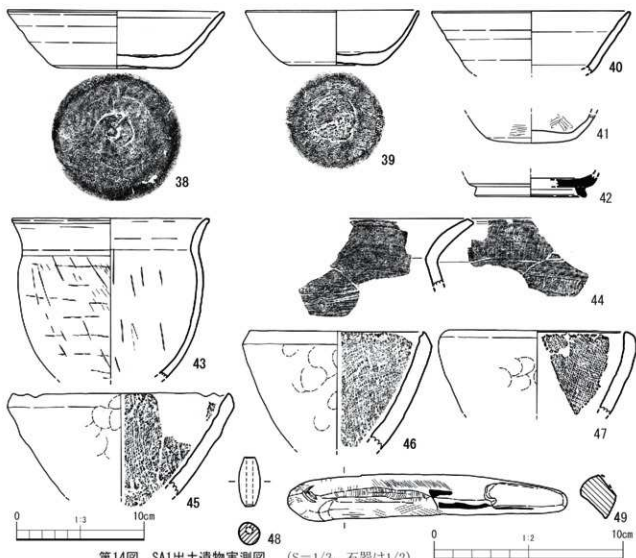


られた白色の粘土は煙道の外枠にもU字状に巡っていたことから、白色の粘土は煙道をドーム状に覆っていたと推測される。燃焼部の奥には直径・深さ共に約0.3mの土坑を伴っており、土坑の埋土にはカマドに用いられた白色の粘土が主体的に混入していた。

38～49はSA1の出土遺物である。検出時に既に浅かったため、これらの遺物は全て床面付近に位置づけられる。38～42は坏である。38は底部からの立ち上がりの角度が緩やかである。41は底部付近であり、器面は内外面にミガキが行われている。42は須恵器であり、高台を伴う。45～47は布痕土器である。48は有孔土錘、49は表面に擦痕の残された棒状の礫である。擦痕は長軸に対し平行するものが多く、成形を意図したものではない。尖端部が剝離している。頁岩製。

SA2

調査区やや西より、沈降谷1内の南部にあたり、沈降谷に向かい北へ緩やかに傾斜する面で検出した。一辺約2mの正方形を呈する。深さ約0.3mの遺構は床面に貼り床は認められなかった。床面はIII層である。柱穴は南西部の壁際に直径約0.25m、深さ0.15mの小穴が一基確認されたのみであった。北壁の中央には、壁面から0.8m突出した煙道が認められた。この煙道は

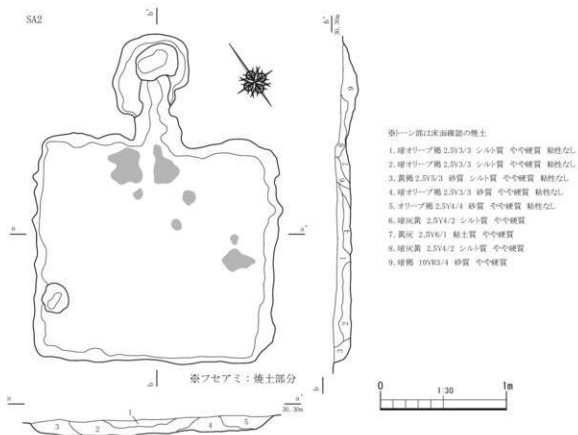


第14図 SAI出土遺物実測図 (S=1/3, 石器は1/2)

竪穴建物と隣接する部分では幅 0.4m であるが、尖端部では約 0.6m に幅を広げ、スプーン状を呈する。この煙道の存在から、カマドは北壁の中央に存在したと思われるが、カマド体部に用いられる白色粘土は全く確認されず、焚口も認められなかった。ただ煙道の両脇には焼土面が認められた。遺構から出土した遺物に図化可能なものはなかった。

SA3

調査区南西部、沈降谷 1 と地滑り部の間で検出した。なおこの位置は、調査区で最も標高が高い部分にあたり、東側に向かって緩やかに傾斜する。遺構上部は既に削平されており、検出面から掘込み面までの深さは約 0.15m 未満、遺構埋土は北部のみ残存し、その部分でも確認された深さは 5cm 以下である。それ以外の部分は床には黒色土と黄褐色土による貼床のみ残存していた。確認された遺構の規模は長軸 9m、短軸 8.6m の方形を呈しており、他の竪穴建物より一際大きい。柱穴は検出面から確認されたが、中世の小穴も混在しているものと考えられ、竪穴建物の主柱穴と捉えられる規模の柱穴はなかったうえに、配置に規則性が認められなかった。貼床を除去した段階で検出された柱穴は比較的規模が大きかったために柱穴として記録した。なお貼り床面の下には他に焼土を多く含む土坑や、遺構中央を取り囲む硬化面も確認した。



第15図 SA2実測図 (S=1/30)

遺構の縁には幅0.2～0.3m、床面からの深さ約0.15mの壁帯溝を伴っており、カマド付近の壁帯溝内より遺物がまとまって出土した。北東部では壁帯溝の空きは削平による消失である。カマドは北西壁中央にあり、体部には白色粘土が用いられていた。燃烧部は被熱による赤化が顕著であり、焚口からは土師器が多く確認された。カマドの煙道部分には長さ約2m、幅約1.2mの範囲で白色粘土の分厚い堆積が確認され、これを除去したところ煙道と見られる掘り込みを確認した。煙道は白色粘土がドーム状に覆うものと推測される。煙道は遺構の主軸から北に10°傾いており、煙道の先端部には直径0.6mと0.5mの楕円形を呈する土坑を伴っていた。壁帯溝から約0.5m離れたところには直径0.2m前後の小穴が並んでいた。これらの小穴は北壁を除く遺構の3辺より、SA3を取り囲むように巡っている。しかし小穴は間隔が統一性に欠けており、対応する柱穴が遺構内にないことから「庇」を想定するには至らないが、SA3の平面プランに並行した柱穴列であることから、内容は不明であるもののSA3に関連すると推測される。

50～109はSA3の出土遺物である。遺構埋土が削平されていたこともあり、遺物は床面直上や貼床内からの出土である。50～67は坏である。50～52、54の器面はナデである。58は内面にミガキ調整が残される。53～57、59～67は外面の下半部にヘラによるものと思われるケズリが行われ、底部が丸底状を呈している。これらは65、66で顕著だが、底径が小さい個体が多い。68～71は浅い皿状の器形を呈する。69の外面や70の内外面にはケズリ調整が残され、胴部下半にヘラ削り調整を行う丸底の坏との関連が推測される。72～84は甕である。いずれも長胴形を呈すると推測される。この中で注目すべきは77、78であり、頸部と胴部の

境に明確な突帯を認めることができる。これは突帯の上下を調整することで結果的に突帯を作出するものである。78、79は小型の甕である。83は器面に櫛目状の条痕が残されることから、全球型甕と考えられる。85～89は布痕土器である。85、86、89が長胴の砲弾型を呈するのに対し、88は浅い円錐状の器形を呈する。87は器形が著しく歪んでおり、上面観が楕円形を呈する。93は薄手のミガキが顕著な黒色土器の口縁部である。90～92、94～100は須恵器であり、90～92は蓋であるがいずれも器高が高い。94～96は坏の口縁部と推測される。97～100は大型の壺の胴部と考えられ、97、98の外面には格子目の敲き目が認められる。101は陶器であり小型の壺である。103は有孔土錘である。104～107は石器である。104は石英であり、加工痕は全く認められない。底面付近からの出土であるが、遺構内からは縄文時代早期の剥片も出土しており、どちらかの時代に属すると考えられる。105は砂岩の礮であり、下端部の敲打痕から敲石の用途が考えられる。106は全面に研磨を行い薄手に仕上げた石製品である。残存は一部であるが、元は中央に穴の空いた円盤形を呈すると推測される。107は軽石製品であり、円礮を研磨により加工し、片面に平坦面を、対面に二か所の窪みを設けた形状に仕上げている。108、109は鉄製品である。108は紐帯の一部と考えられる、109は先端部を欠損した刀子である。

SA4

調査区南西部で、SA3の北西部や確認調査のトレンチと切合って検出した。残存する西側の壁面の長さは5.3mであり、方形と推測される。SA3同様埋土の残存が良好でなかったためにSA3との切り合いは不明である。なお床面は、SA4の方がSA3より僅かに浅かった。カマド部分は確認調査のトレンチによって消滅しているが、堅穴建物の北壁から、約1m離れたところに2基、約1.4m離れたところに1基の土坑が検出された。1.4m離れた土坑には甕が複数個体出土した。これを煙道とし、本遺跡から検出された他の堅穴建物と同様に壁面中央にあったと仮定すると、堅穴建物の北壁は約4.2mであり、SA4の平面プランは長方形と推測される。残存状況の悪さから、煙道先端の土坑以外の出土遺物は図示できるものはなかった。

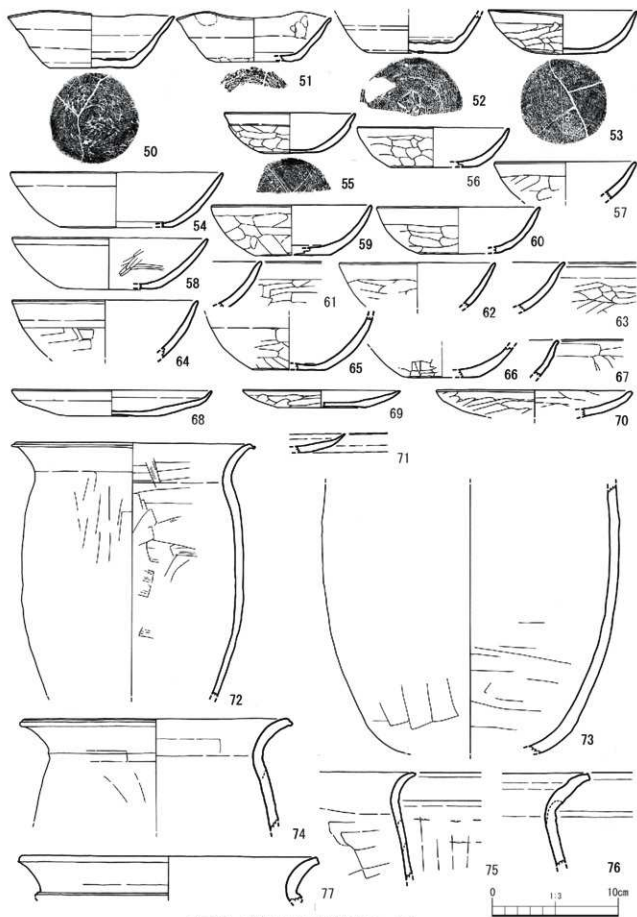
110、111はSA4の煙道先端の土坑から出土した遺物である。土坑は0.6m×0.7mの楕円形を呈しており、深さは0.55mであり底面は平坦である。埋土は黒もしくは褐色であり白色粘土の混入は確認されなかった。土層図にあるように遺物は遺構上部で確認した。器種はいずれも甕である。110は豊後に多い全球型甕であり、胴部下半を失っている。111も底面の中央を失っている。これらの欠損は、煙道として用いるために人為的に欠いたと推定される。

2. 掘立柱建物

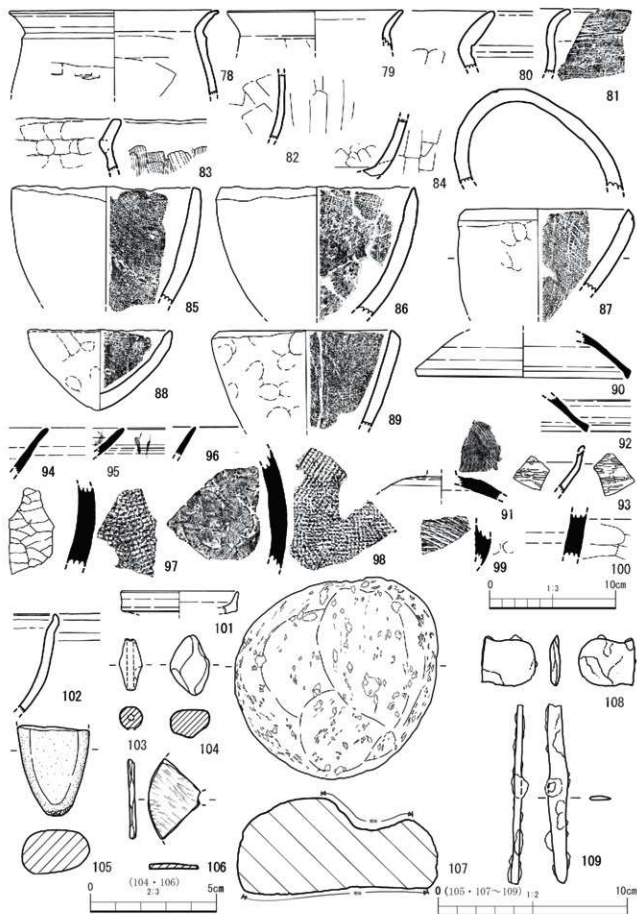
4棟確認した。遺構は全て調査区北部に分布する。なお、SB1、2とSB3、4はそれぞれ長軸方向が同じであることから、同時にしくは近接した時期の遺構と想定される。

SB1

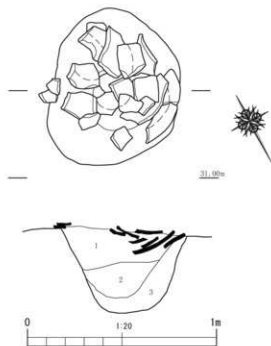
調査区北西部で検出した。5間×1間であり、長軸は北西-南東方向を向いている。柱穴の配置は規則的であった。柱穴の底面は、特に南側の列は斜めになるものが多い。柱穴は近世以降に上方を削平されたと考えられ、深さ50cmを超える柱穴はない。柱痕らしき痕跡は確認できなかった。



第17图 SA3出土土器实测图 (S=1/3)

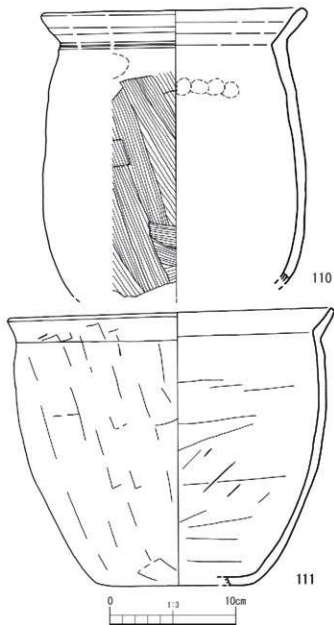


第18图 SA3出土遺物実測図 (S=1/3・2/3・1/2)



1. 黒 10YR2/1 シルト質 やや硬質 粘性あり
 2. 黒褐色 10YR3/2 シルト質 軟質 粘性あり
 3. 黒 10YR4.6 シルト質 やや硬質 粘性なし

第19図 SA4土坑実測図 (S=1/10)



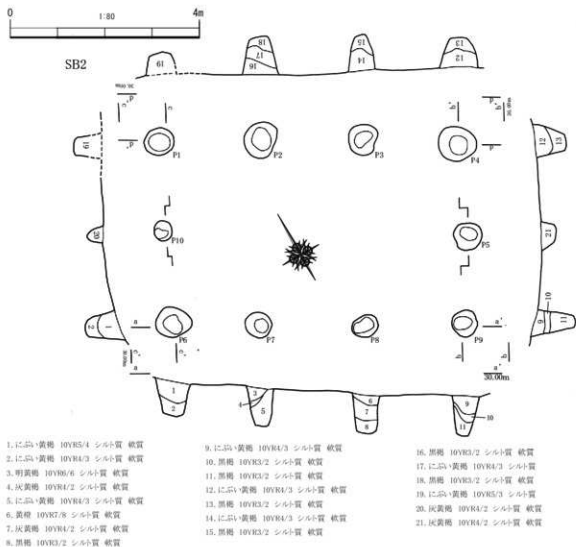
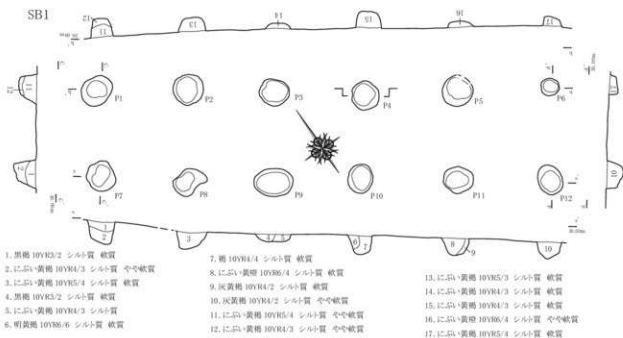
第20図 SA4土坑内出土遺物実測図 (S=1/3)

SB2

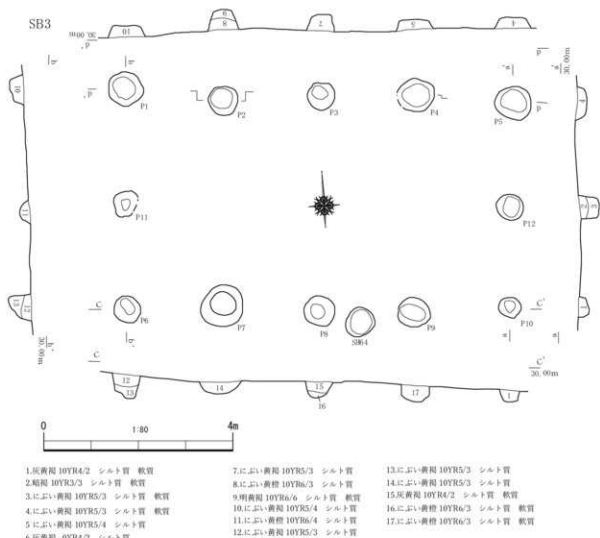
調査区北西寄りで検出した。3間×2間であり、長軸は北西-南東方向を向いている。沈降谷2にかかっている部分の柱穴は、残存状況が良いため他より深くなっている。短軸の中間に設けられたP5、P10は他より一回り小さく、位置も短軸よりわずかに外側に構築されている。SB2の柱穴は底面が平坦である中で、この2基は断面がU字状を呈する。SB2は沈降谷2に一部重なっており、P3、P4はSA1と切合って検出されたが、SA1の検出面で確認したことから、SA1より後出と考えられる。柱痕らしき痕跡は確認できなかった。

SB3

調査区北西部で検出した。4間×2間であり、長軸は東北東-西南西方向を向いている。柱穴は近世以降に上方を削平されたと考えられ、その結果50cmを超える柱穴はない。なお、柱



第21図 SB1・SB2実測図 (S=1/80)



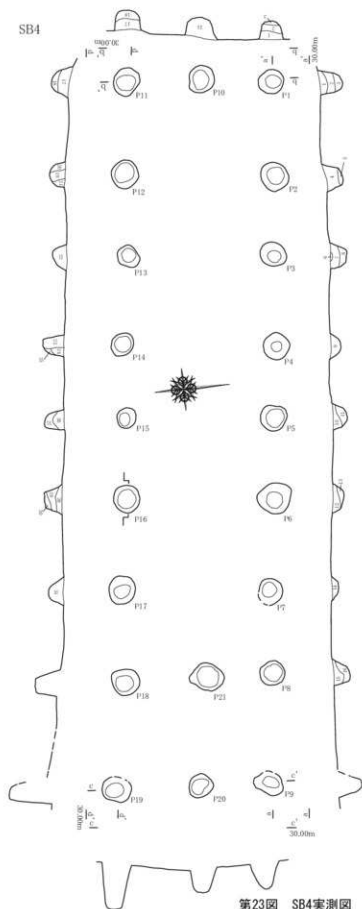
第22図 SB3実測図 (S=1/80)

穴の配置はP2が南に、P4が北にずれるなど、北側の列は南側の列に比べ規則性に欠けている。また、東側の列の幅は4.3mであるのに対し、西側の列の幅は4.7mであり、東西でも統一性に欠けている。底面も平坦面を伴うものとU字状を呈するもの、斜めになるものや段を伴うものが見られた。柱痕らしき痕跡を確認した柱穴はなかった。

SB4

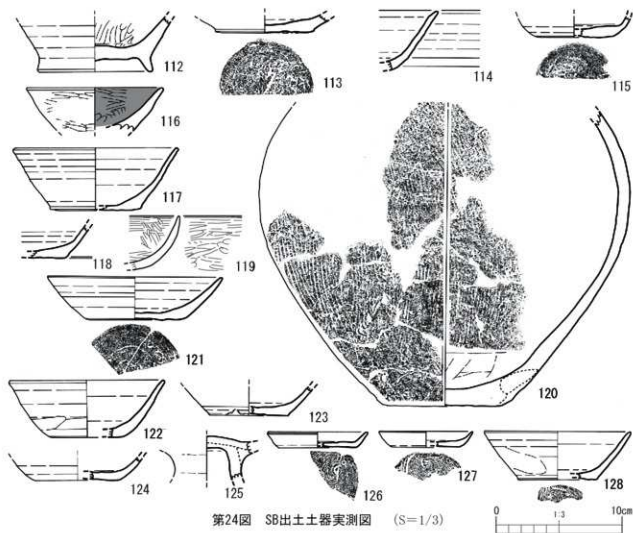
調査区北寄りで検出した。長軸は東北東-西南西方向を向いている。柱穴の配置は確認できたもので8間×2間であるが、東側は調査区の境界に接していることから、柱穴が調査区外にまで更に伸びる可能性もある。柱穴は他の掘立柱建物と同様に近世以降に上方を削平された結果全体的に浅く、深さ50cmを超えるものは稀であるが、南東隅にあたる柱穴(P19)は深くになっている。なお東から2列目には中間の柱穴が確認された(P21)。これは長舎で認められる「仕切り」の可能性があると共に、SB4は実は7間×2間、最も東の列はSB4と軸を同じくする別の掘立柱建物が存在した可能性も窺わせるものである。他の遺構との前後関係についてであるが、SP13、14はSA1と重複しているが、SA1の床面で確認したことから、SA1より古い時期の遺構と考えられる。なお遺構の東側は江戸時代の小穴が密集していたため、完掘後に存在を

SB4



- 1.に5い・黄樹10YR3/3 シルト質 軟質 粘性なし。
- 2.に5い・黄樹10YR5/3 シルト質 軟質 粘性なし。
- 3.に5い・黄樹10YR5/4 シルト質 軟質 粘性あり。
- 4.に5い・黄樹10YR5/4 シルト質 軟質 粘性なし。
- 5.明黄樹10YR6/6 軟質 シルト質 粘性なし。
- 6.に5い・黄樹10YR3/3 シルト質 軟質 粘性なし。
- 7.に5い・黄樹10YR3/3 シルト質 軟質 粘性少しあり。
- 8.暗樹10YR3/4 軟質 シルト質 粘性に上り。
- 9.に5い・黄樹10YR3/3 シルト質 軟質 粘性少しあり。
- 10.暗樹10YR3/3 シルト質 軟質 粘性少しあり。
- 11.暗樹10YR3/3 シルト質 軟質 粘性に上り。
- 12.暗10YR4/4 シルト質 軟質 粘性少しあり。
- 13.に5い・黄樹10YR5/4 シルト質 軟質 粘性なし。
- 14.明黄樹10YR6/6 シルト質 軟質 粘性なし。
- 15.に5い・黄樹10YR5/4 シルト質 やや軟質 粘性なし。
- 16.に5い・黄樹10YR5/3 シルト質 軟質 粘性なし。
- 17.に5い・黄樹10YR5/3 シルト質 やや軟質 粘性なし。
- 18.に5い・黄樹10YR6/4 シルト質 軟質 粘性なし。
- 19.灰黄樹10YR4/2 シルト質 軟質 粘性なし。
- 20.灰黄樹10YR4/2 シルト質 粘性なし。
- 21.に5い・黄樹10YR5/4 シルト質 軟質 粘性なし。
- 22.に5い・黄樹10YR4/3 シルト質 軟質 粘性なし。
- 23.暗灰10YR4/1 シルト質 硬質 粘性なし。
- 24.灰黄樹10YR4/2 シルト質 やや硬質 粘性あり。
- 25.に5い・黄樹10YR5/4 シルト質 粘性少しあり。
- 26.に5い・黄樹10YR4/3 シルト質 軟質 粘性少しあり。
- 27.灰黄樹10YR4/2 シルト質 軟質 粘性に上り。
- 28.暗樹10YR3/1 シルト質 軟質 粘性に上り。
- 29.暗樹10YR3/1 シルト質 軟質 粘性に上り。
- 30.に5い・黄樹10YR4/3 シルト質 軟質 粘性に上り。
- 31.灰黄樹10YR4/2 シルト質 軟質 粘性なし。

第23図 SB4実測図 (S=1/80)



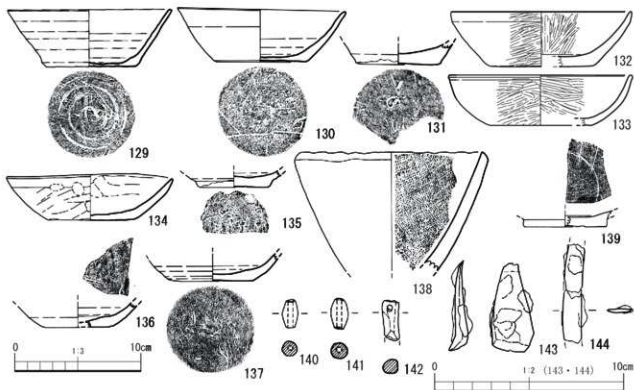
確認した。P9、P18～P21の土層断面図が欠落しているのはそのためである。なお、遺構内に柱痕らしき痕跡が確認された柱穴はなかった。

112～123はSB1～SB4の出土遺物である。遺構上部を削平されているため、これらは本来遺構下部、または底面近くにあった遺物である。112はSB1、113～115はSB2、116、117はSB3、118～124はSB4からの出土である。112は高台があり、内面にミガキを行っている。113～115は坏である。116は内黒土器の坏である。器壁は肉厚であり内外面にミガキが行われる。117、118も坏でありナデ調整を基調とする。119は口縁部が内湾気味に立ち上がる器形を呈しており、内外面に顕著なミガキが認められる。120は甕、もしくは壺であり、胴部上半で窄まる器形を呈する。121～123はナデ調整を基調とする坏である。なお第50図479はSB2からの出土遺物である。坏の口縁部と考えられ、外面には墨書が認められる。墨書は二文字あり、上方は「吉」と推測されるが下方は判別不可能である。

3. 柱穴群

SB1やSB3の周辺には土坑が多数検出された。いずれも浅く、底面に平坦面を伴うものも多かった。このような特徴から、これらは掘立柱建物の柱穴と考えられる。規則的配置を認めることはできなかったが、近世以降の削平で消滅した柱穴も存在すると考えられる。

129～144は、柱穴群からの出土遺物である。129～137は坏である。129～131はナデ調



第25図 柱穴群出土遺物実測図 (S=1/3, S=1/2)

整を基調とするが、底部からの立ち上がりの角度が急であり、新しい時期の製作と考えられる。132は厚手で内外面に顕著なミガキが認められる。133も内外面に顕著なミガキを行い、浅い器形を呈し、底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がる。134は、外面の口縁部以外に全面ケズリ調整が行われている。138は布痕土器、139は須恵質であり、内面に蛇の目状の段が見られる。140～142は有孔土錘だが、140・141は長軸に穴が空けられる通常の形態を示すのに対し142は短軸方向に穴が空けられている。143、144は鉄製品である。また第50図480もこの柱穴群からの出土である。墨書の見られる坏であり、文字は不明である。

4. 土坑

調査区南西部の地滑り部で検出した。遺構の真上には中世の土坑 (SC11) が検出されている。0.8 m × 0.6 m の楕円形を呈し、深さは0.45 m である。遺構上部から遺物を数点確認した。

145～147は、SC10出土土器である。145、146は坏、147は甕である。146には高い高台が貼り付けられていた。147は胴部下半を失っている。

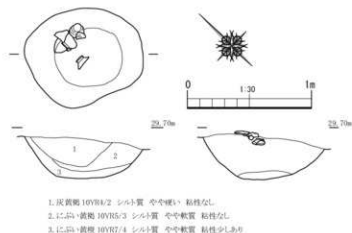
5. その他

古代の遺構の中には、図化の困難な遺構も確認されたのでここで説明したい。

SA3のカマドの北側では、Ⅲ層上面より直径約1 mにわたる焼土の広がりを確認した。何らかの遺構と推測したが、確認トレンチにより大半を失っており、Ⅲ層上面における焼土とそれに伴う炭化物を認めたのみである。堀込みは伴っておらず、壁の立ち上がりも、出土遺物も認められなかった。以上の点を踏まえて断続的に燃焼を行った痕跡と判断した。この遺構は炭化物を採取し年代測定を行った。その結果は第3章で紹介する。

第3項 出土遺物

古代の遺物は沈降谷や地滑り部からも多量に出土した。

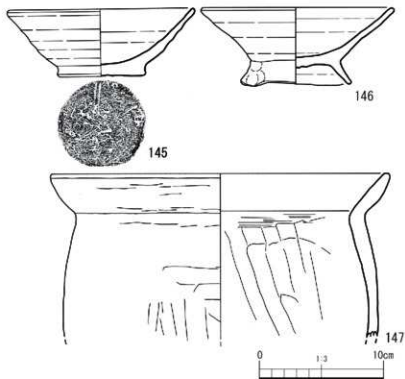


第26図 SC10実測図 (S=1/20)

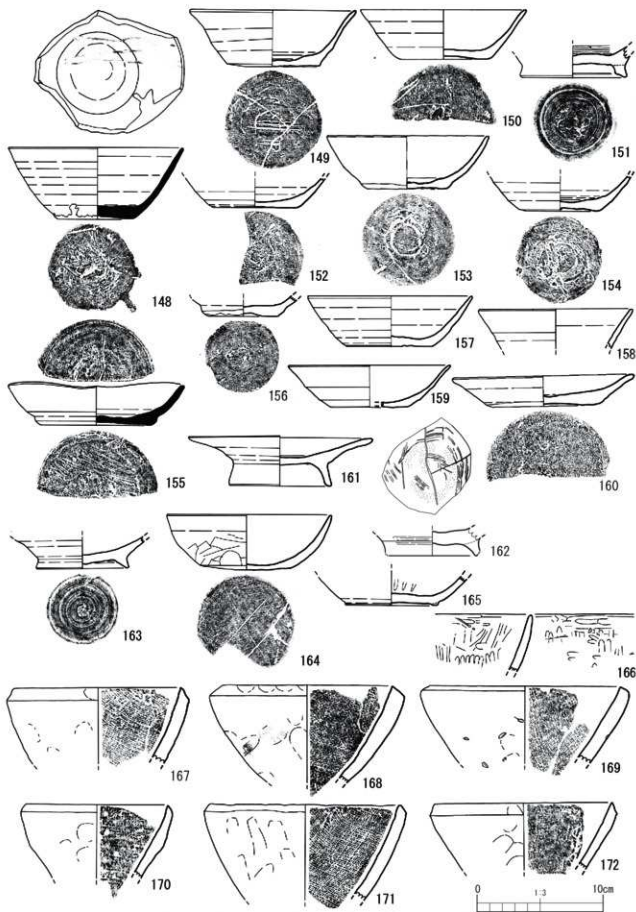
148～183は沈降谷2から出土した古代の遺物である。148～166・175は坏である。148は須恵器であり、内面に黒色の筋が複数認められるが、これは灯明に用いられた際の痕跡と考えられる。153のように底部からの立ち上がりが内湾気味になるものがあれば、149のように外反するものも認められる。相対的に提携が小さく、底部からの立ち上がりの角度が急なものが多い。151や162、163には高台を伴う。161は浅い坏に高い高台がつけられる。

160は皿状の浅い器形を呈する。165には内面に、166には両面にミガキが行われ、164は外面下半にケズリが行われる。167～172は布痕土器である。173・174・76は甕である。177は底面の糸切痕から中世の可能性がある。180は須恵器の小型壺である。181～183は有孔土鍾である。第50図481、485も沈降谷からの出土遺物である。481は水注とよばれる陶器の把手部分の破片と思われる。485は内外面に赤色顔料の痕跡が確認できる。

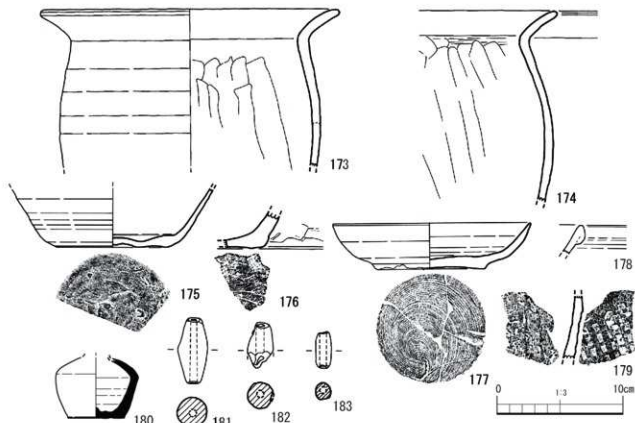
184～307は地滑り部から出土した古代の遺物である。184～252は坏である。184～186は底部からの立ち上がりが緩やかであり、口径が広い。187～222は立ち上がりが急であり、ナデ調整を基調とするが、190、191、200、204のように歪みのあるものや201のように器壁が不安定なものも認められる。210～221は底径が著しく小さい一群である。223、224、228は底部に円盤状の高台を伴い、230～233は蛇の目高台を伴う。234は宮崎平野の古代土師器の特徴である、底部の放射状の調整痕が認められる。239～241、243は高台が一際大きな坏である。245は浅い器形を呈し器壁は厚く、内外面にミガキが行われ、246は蛇の目高台を伴い、内面に縦方向のミガキが残される。247、248、252は底部から内湾気味に立ち上がり、特に248は丸底状の器形を呈する。この3点は外面下半部にケズリが行われる。250、253、254は浅い皿状の器形を呈し、内外面に顕著なミガキが行われてい



第27図 SC10出土土器実測図 (S=1/3)



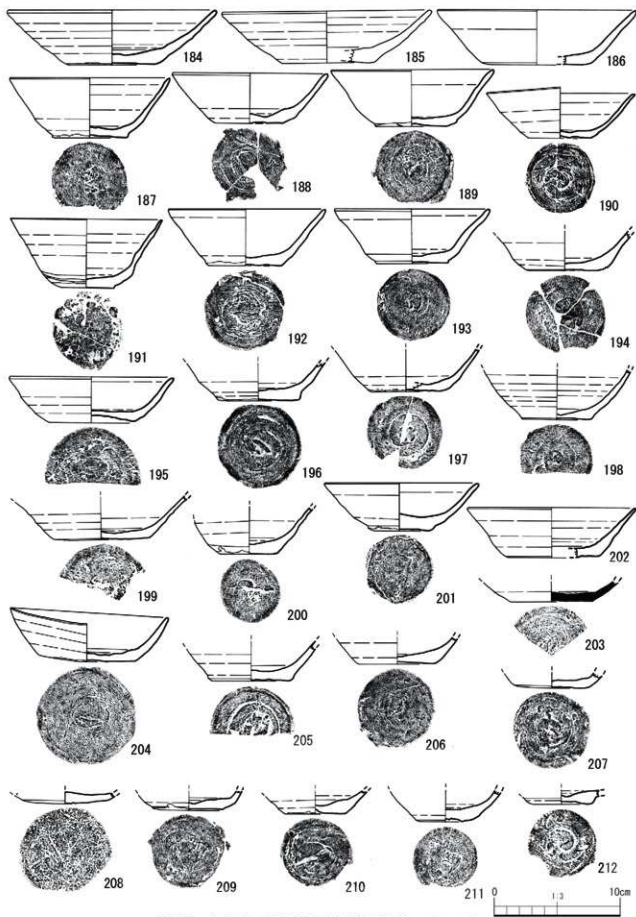
第28图 古代出土土器实测图(陥没谷)① (S=1/3)



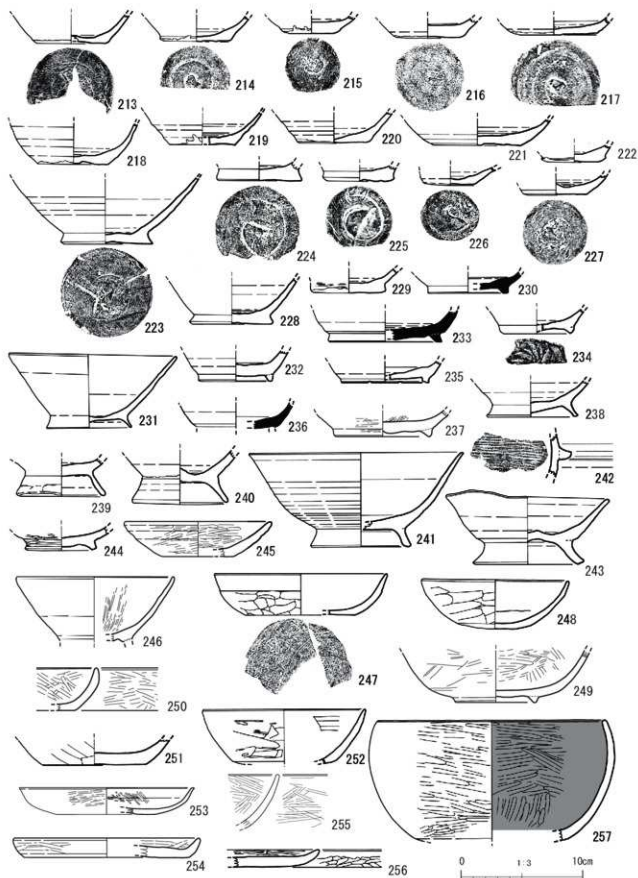
第29図 古代出土土器実測図(陥没谷)② (S=1/3)

る。256は更に皿状の器形が強く、内面にミガキが、外面下半にはケズリが行われており、外面下半にケズリを行う坏との関連性を窺わせる。249は底部から緩やかに立ち上がり、内外面にミガキを行っており、底部には小さな高台を伴う。257は口縁が内湾する内黒土器である。258～265は甕である。262は頸部と胴部の境に突帯が認められる。265は同じ位置に稜が認められる。268、269は壺である。268の外面には、通常須恵器に用いられる格子目の叩き痕が認められる。270～272は布痕土器である。275、276は小皿である。277～279は表面の調整が粗雑で器壁が厚い。移動式カマドと推測される。280～289は須恵器であり、280、281は蓋、282～285は壺であり、うち282、283は小型である。291～298は有孔土鍾である。299～302は鉄製品である。299、302は刀子であり、300、301は釘である。303～306は全面が丁寧に研磨された石であり、大島島田遺跡で平石とされた遺物に類似する。307は端部に鉄滓が付着することから、鍛冶に伴う羽口と考えられる。

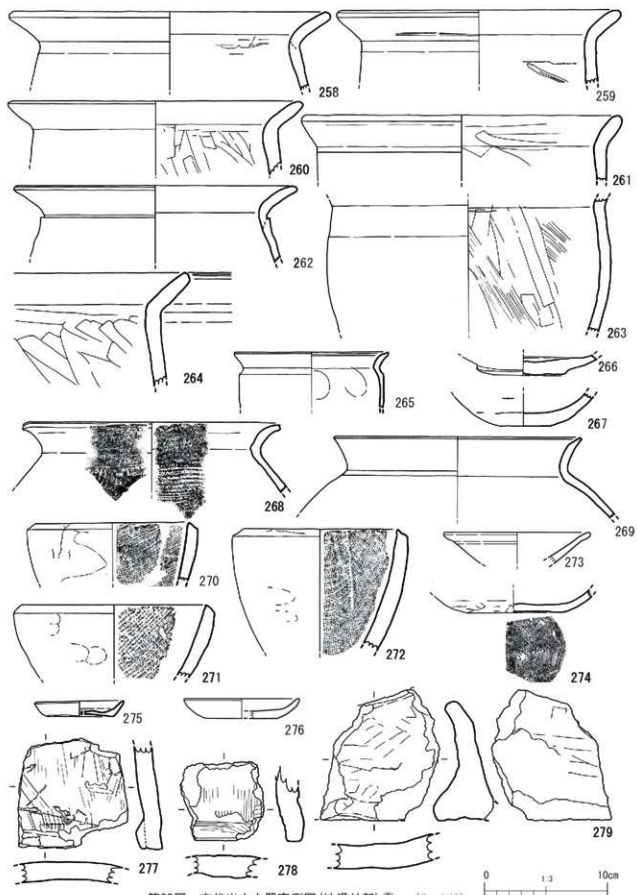
第50・51図484・486～499、501～526も地滑り部からの出土遺物である。484は宮崎平野では出土例の少ない灰土器である。486の外面には櫛描状の痕跡が残される。487は緑釉陶器であり、古代と考えられ底面には糸切底の痕跡が残される。488も緑釉陶器だが487より焼成が悪く色調が明るい。489は青磁であり、口径が小さいうえに底部で更に窄まることから小皿に似た器形と考えられる。490・491・493・494は白磁である。492は越州窯の2類に属する甕の底部である。493、503は口縁の断面が玉縁状に肥厚する。490、491、498は、口縁部外面に段が設けられ、491、494、502は外反する。512は須恵器であり、蛇の目高台が貼り付けられる。516は須恵器であり、大型の甕、もしくは壺の胴部と考えられる。517は土師器の坏



第30圖 古代出土土器実測図(地滑り部)① (S=1/3)

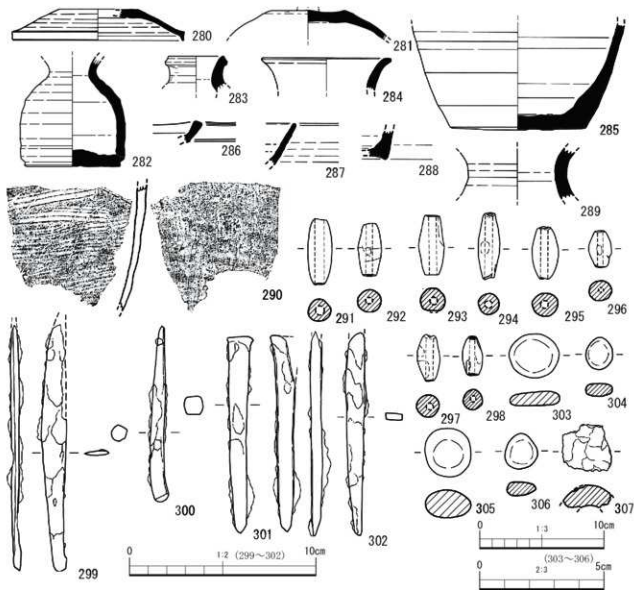


第31図 古代出土土器実測図(地滑り部)② (S=1/3)



第32図 古代出土土器実測図(地滑り部)③ (S=1/3)

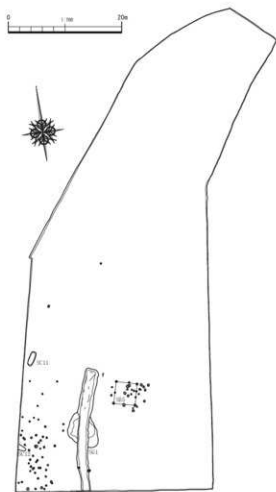




第33図 古代出土土器実測図(地滑り部)④ (S=1/3, 2/3, 1/2)

であり、底面に「百」の墨書が認められる。518、519は器面に赤色顔料が認められる。520は灰軸陶器、521～523は緑軸陶器である。

434～440、442、447～453、458、473、561～565、567～575、578・579は表土から出土した古代の遺物である。440は灰軸陶器、444が白磁、451は土師質である。434は両面に残る墨の痕跡から転用硯と考えられる。436は外面に縦位の突起を有しており、甔の突起と考えられる。451は外面の調整が粗く、分厚い器壁から移動式カマドと推測される。古代の陶磁器の主体は白磁(561～564、568、570、574、571)であり、青磁(565、572、573)、緑軸陶器(569、579)、青白磁(567)が続く。なかでも579は越州窯で製作された越州1類の甔、もしくは壺と考えられる。他の器種は碗が主体でありながら壺(574)、蓋(578)、坏または合子の身(567)がある。なお、表土出土の石器のうち476、477は地滑り部で出土した平石に似ていることから古代の遺物に含めた。473は須恵質の坏の底部であるが、周縁を打ち欠いて円盤状の製品として利用したと推測される。



第34図 中世遺構分布図 (S=1/700)

第4節 中世

第1項 概要

中世の遺構は調査区南西部を中心に分布していた。遺構は掘立柱建物1棟、道路状遺構1条、墓塚、祭祀遺構、柱穴群である。祭祀遺構と道路状遺構からは土師器の皿や坏が多量に出土した。

第2項 検出遺構

1. 掘立柱建物

SB5

調査区南西部、上段の突出部中央より検出した。2間×2間であるが、東側は中間の柱穴が2基並んでいる。平面形は3.8m×3.6mであり正方形に近い。柱穴は直径0.2m前後と小規模であったが深さは0.5m前後である。

第24図124～128はSB5の出土遺物である。124、128は坏である。126、127は糸切底の認められる小皿である。

2. 土坑

SC11

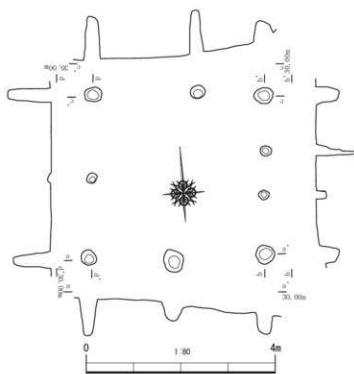
調査区南西部、地すべり部が遺物を含みながら埋没し、平坦地ではないまでも傾斜がかなり緩やかになった面から出土した。遺構は西壁にかかっていることから、本来は更に西に続いていた。この遺構は浅い掘り込みを伴い、その上に焼土と炭化物が集中した上にカマドの体部に

用いる白色の粘土で覆っており、掘り込みの上部からは土師器の坏が5点、小皿が21点出土した。こうした出土状況から、これは「地鎮め」等、祭祀に伴う遺構と考えられる。

SC11からは多量の土師器が出土した。坏(308～312)と小皿(313～333)である。坏は底部から口縁部まで直線的に立ち上がるものが多い。小皿は口縁の厚さが不安定なものが多い。SC12

調査区西部、SA3の南隣接地であり、調査区を含む町ノ前の丘陵の中でもっとも標高が高い地点で検出した。長軸2.3m、短軸1.2mのやや歪な楕円形を呈する。深さは0.5mである。検出位置や土坑の大きさ、遺物の種類から埋葬墓とした。

334～341はSC12の出土遺物である。334～338は長胴の高台を有するもので同じ器種と考えられるが、全て下半部から底面にかけて失っている。SC11は墓塚と考えられることから、



第35図 SB5実測図 (S=1/80)

小穴が認められる。

342～391はSG1の出土遺物である。342～361は坏、362～372、375、376は小皿である。SC11と比較すると、坏はSC11より深く、口縁が外反するものが多い。なお374は底部が窄まり糸切底があり内面が黒色である。故にこの遺物は古代の可能性も考えられる。小皿は口縁の厚さが安定し比較的丁寧な作りのものが多い。なお376は底部がへら切りである。これら坏と小皿はSG1の北側末端部において集中して出土した。384～391は北側末端部以外の埋土より疎らな状態で出土した。384は青磁である。底面には高台がある。385は内黒土器である。この385は古代からの流れ込みの可能性がある。386は陶器の甕である。器面から常滑焼と考えられる。388は東播系須恵器の鉢である。390、391は滑石製石鍋の口縁部である。

4. ビット群

調査区南西部の地滑り部分より多数の小穴が検出された。直径20 cm程度であり、配列に規則性はない。小穴からの中世の土師器小皿が出土すること、付近にSC11があることから中世の遺構と判断した。これらは恒久的な施設ではなく、一時的に簡易な建物が繰り返し建てられた痕跡と推測される。

第3項 出土遺物

392～416は地滑り部から出土した中世の遺物である。392～401は坏である。392の口縁は外反するが、それ以外は直線的である。402～405は小皿である。口縁の厚さは不安定である。坏、小皿共に、SG1より付近にあるSC10に近い。406～409は東播系須恵器の鉢である。410～413は滑石製石鍋である。416はその補修具である。

第50図500、501、506～508、510、515も地滑り部から出土した中世の遺物である。500、501、506～508、514、515は青磁の碗である。506の外面には蓮弁が描かれる。510は磁器であり、合子の蓋と考えらえる。

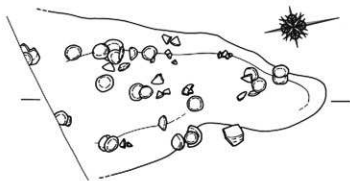
意図的に欠いたうえで副葬したと推測される。340、341は鉄製品である。340は方頭式の鉄鏝、341は刀子である。

3. 道路状遺構

SG1

調査区南壁から伸び、北北東に8m伸びたのち、北に曲がって14m伸びる。最も北では方形の、深さ約0.5m、幅2.5mの落ち込みを形成し寸止まりに行き止まる。この末端部付近は底面に硬化が認められるだけでなく、多くの土師器の坏が、直径0.1～0.15mの扁平な円礫数点と共に集中した。遺構は途中直径7mの土坑と重なるが、土層堆積を見るとSG1と併行関係にあり、SG1の一部であったと考えられる。なお南部には遺構の両脇に

SC11

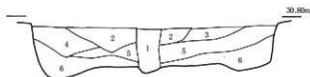


1. 土・灰・骨 7.5VRS/3 シルト質 やや硬質 粘性少しあり
2. 灰白 7.5VRS/2 シルト質 硬質 粘性少しあり
3. 赤褐色VRL/6 シルト質 硬質 粘性あり
4. 土・灰・黄褐色 10VRS/3 シルト質 やや硬質 粘性少しあり
5. 土・灰・黄褐色 10VRL/3 シルト質 やや硬質 粘性なし
6. 黄褐色 10VRS/6 シルト質 粘性なし 白色粘土類着
7. 黒褐色 7.5VRS/2 シルト質 やや硬質 粘性なし



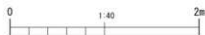
第36図 SC11実測図 (S=1/40)

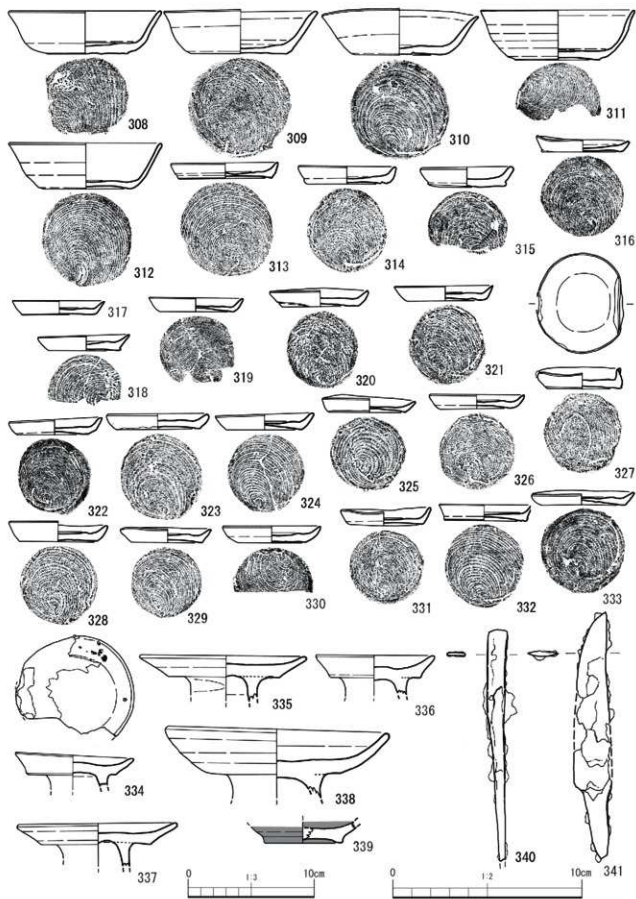
SC12



1. 土・灰・黄褐色10VRL/3 シルト質 やや硬質
2. 土・灰・黄褐色10VRS/3 シルト質 やや硬質
3. 土・灰・黄褐色10VRL/3 シルト質 やや硬質
4. 土・灰・黄褐色10VRS/4 砂質 硬質
5. 土・灰・黄褐色10VRL/4 砂質・シルト質
6. 土・灰・黄褐色10VRS/3 シルト質 やや硬質

第37図 SC12実測図 (S=1/40)



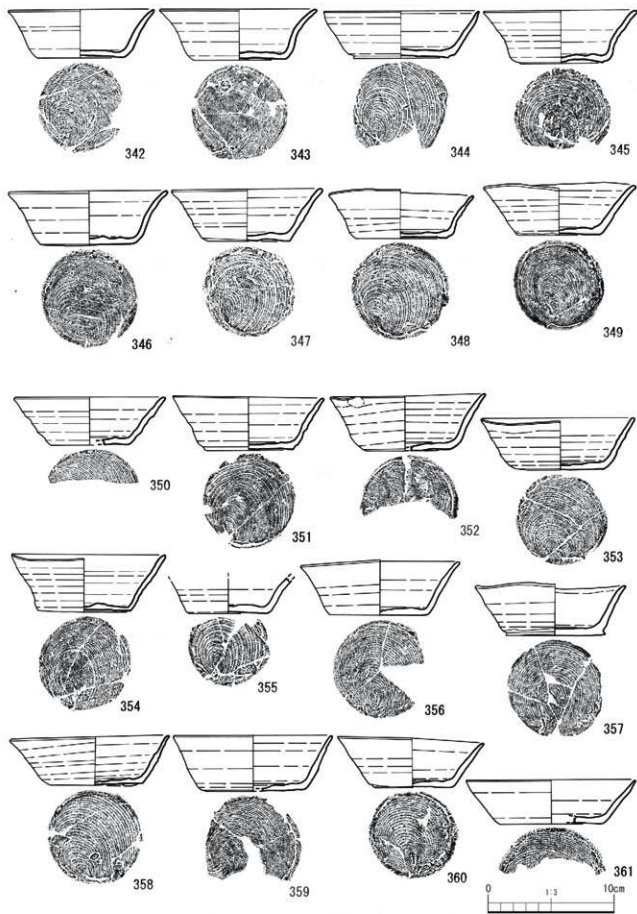


第38図 SC11・SC12出土遺物実測図 (S=1/3・鉄製品S=1/2)

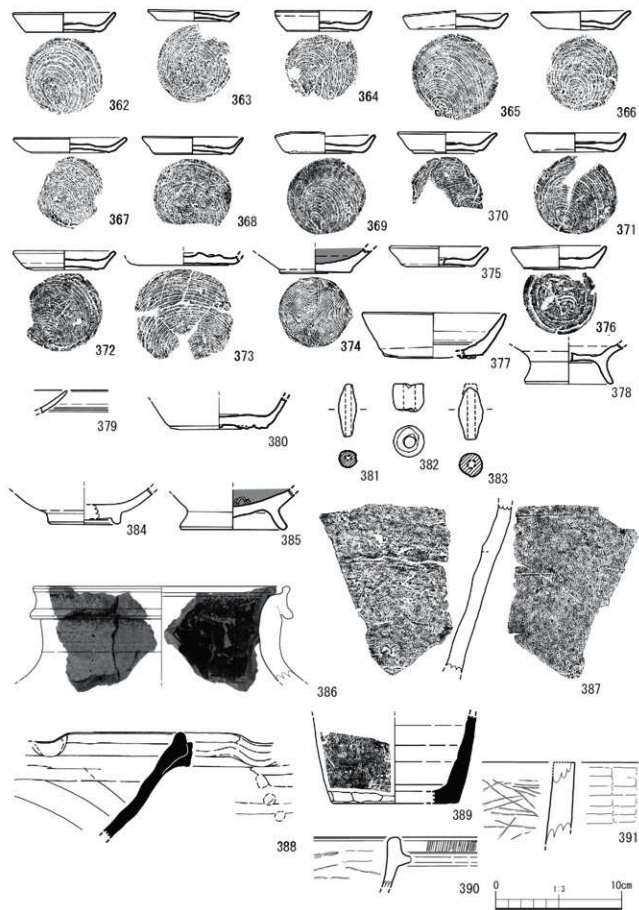
441、455、456、457、463、
 547、548、576、577、580～584
 は表土中から出土した中世の遺物
 である。441、463は瓦器である。
 内面を中心に平行線状暗文が見
 られる。455は滑石製石鍋の底部
 である。456、457は東播系須恵
 器の鉢の口縁部である。547は青
 花の碗の底部である。548は青磁
 である。576、577も青磁である。
 581は陶器の播鉢、582は陶器の
 鉢であり、口縁は内湾する。



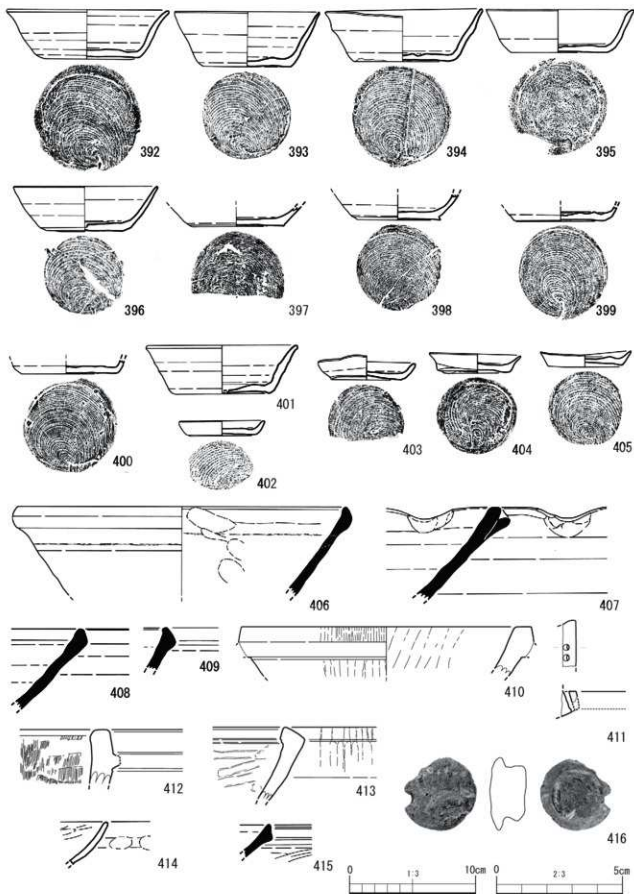
第39図 S61実測図 (S=1/100)



第40图 SG1出土土器实测图① (S=1/3)



第41图 S61出土土器实测图② (S=1/3)



第 42 図 中世出土遺物実測図(地滑り部) (S=1/3, 416 は S=2/3)

第5節 近世の調査成果

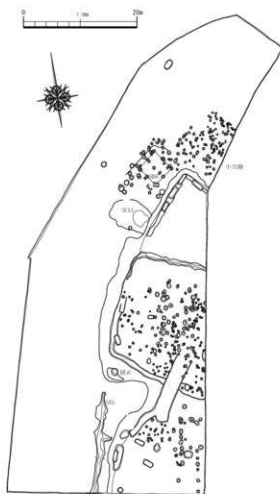
第1項 概要

近世の遺構は調査区東部から中央部にかけて検出した。東部と西部の境界には約1mの段があり、段下には近世の遺構と近代以降の掘り込みが多く分布することから、近世に大規模な削平が行われ、段が設けられたと考えられる。この造成は北部では上段にも行われており、作出された平坦面上にSB6やピット群が分布する。また南部では上段に溝が作られるほか、経石や井戸も確認された。下段の境界線は凹凸があり、造成は一度ではなかったことが窺える。下段の中央にはSB7を確認した。

第2項 検出遺構

1. 造成

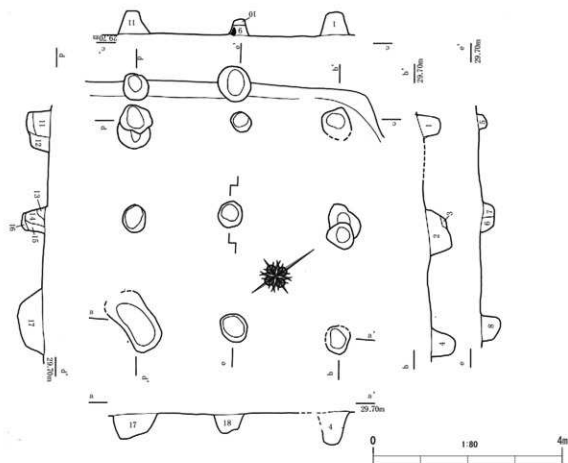
遺構を説明するにあたって、まず遺構配置に大きな影響を与えた造成から行いたい。この造成は調査区の東西を分かつものであり、北部から中部にかけては約2m、南部では約0.4mの段を形成し、下段は平坦になるよう整地されている。南部では、SB5を避けるように半島状の突



第43図 近世検出遺構分布図 (S=1/700)

出部が認められる。北部から中部にかけて、下段の縁辺部には幅広の溝が設けられる。この溝は、中部で方形の区画を形成するものと、北部でL字状を呈するものに分けられる。方形の区画溝は、北部では幅狭で断面はU字状を呈するが、南部は幅広で底面に平坦部を伴う。出土遺物は南部から近代の陶磁器が出土した。北部のL字状の溝は幅広で方形の段を持つ。この溝からは近代の陶磁器が出土した。

上段の上端がクランク状を呈することと区画溝の角が連動することから、造成は一度ではなく中部→北部という順に行われたと考えられる。また方形区画溝内で確認される遺構の出土遺物が近世を主体とする一方で、区画溝の南側で確認される遺構の出土遺物は近代以降の遺物が主体的であることから、南部の造成は中部より後に行われたと考えられ、この時にSB5付近が



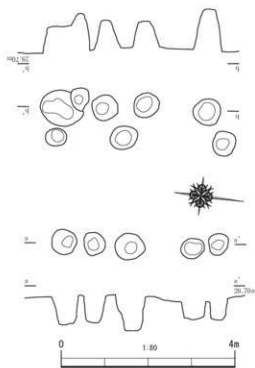
- | | |
|------------------------------|-------------------------------|
| 1.に55・黄楊10YR5/3 シルト質 軟質 | 10.堀穴10YR4/1 シルト質 軟質 粘性なし |
| 2.灰黄礫10YR6/2 シルト質 軟質 | 11.灰黄礫10YR5/2 シルト質 軟質 粘性なし |
| 3.に55・黄礫10YR6/3 シルト質 軟質 | 12.に55・黄礫10YR6/3 シルト質 軟質 粘性なし |
| 4.に55・黄礫10YR5/3 シルト質 軟質 | 13.堀穴10YR6/1 シルト質 軟質 粘性なし |
| 5.に55・黄礫10YR7/3 シルト質 軟質 粘性なし | 14.に55・黄礫10YR5/3 シルト質 軟質 粘性なし |
| 6.に55・黄礫10YR7/3 シルト質 軟質 粘性なし | 15.に55・黄礫10YR7/4 シルト質 軟質 粘性なし |
| 7.に55・黄礫10YR6/3 シルト質 軟質 粘性なし | 16.灰黄礫10YR4/2 シルト質 軟質 粘性なし |
| 8.に55・黄礫10YR7/3 シルト質 軟質 粘性なし | 17.に55・黄礫10YR6/3 シルト質 軟質 粘性なし |
| 9.灰黄礫10YR6/2 シルト質 軟質 粘性なし | |

第44図 SB6実測図 (S=1/80)

半島状に残されたと推測される。

なお造成は上段にも行われている。調査区北部には造成により平坦部が作出されており、その上にSB6が構築されている。このような造成は上段の北側でも行われ、平坦部の上に掘立柱建物と思われる小穴群が構築されている。造成の西側はそれ以降に削平されたと考えられるが、造成の西側に分布する古代の柱穴群が底面付近しか残されていないことを考慮すると、近世に行われた造成は約0.5mと推測される。つまり近世に行われた造成は、調査区内に二つの段を設たと考えられる。

以上から近世以降の造成と遺構の変遷は、①中部を方形に掘削→②掘削地内に方形区画溝やSB7をはじめとした遺構を構築→③北部に造成を拡大→④北部に隣接して上段を造成し平坦面を作出→⑤上段の平坦面にSB6や小穴群を構築→⑥方形区画溝を掘り直す、L字溝を構築掘削



第45図 SB7実測図 (S=1/80)

SB7

調査区東部、下段の中央部に検出した。遺構は建て替えによるものか、2間×1間の掘立柱建物が繰り返し改築を繰り返した結果と考えられる。本来なら複数の掘立柱建物を充てるべきところだが、対応する柱穴が正確でないため1棟にまとめた。シラスを検出面としており、遺構底面に効果面は確認されなかった。また柱穴内からの出土遺物に図示可能なものはなかった。

遺構は底面の平坦な溝がコの字状に巡る中の中心に位置する。そのような配置から、この掘立柱建物は社寺等の可能性が推測される。

3. 溝状遺構

下段で確認された溝は出土遺物から近代に相当するものだったため、上段で検出された1条のみ説明する。

SE1

上段の南壁から北に19m伸びる。深さ、幅ともに不安定であり、常時流れた溝ではなく、下段への雨水の流下を防ぐための目的と考えられる。

532～536、542はSE1内の出土遺物である。533は播鉢、535、536は青磁碗でありどちらも中世に相当する。しかし532は急須、534は広東碗と近世の遺物である。542は輪花皿の口縁部である。

部の下段に区画溝を設ける→⑦南部に造成を拡大、の順に行われたと考えられる。なお、中部の区画溝の出土遺物から、⑥以降は近代に行われたと考えられる。

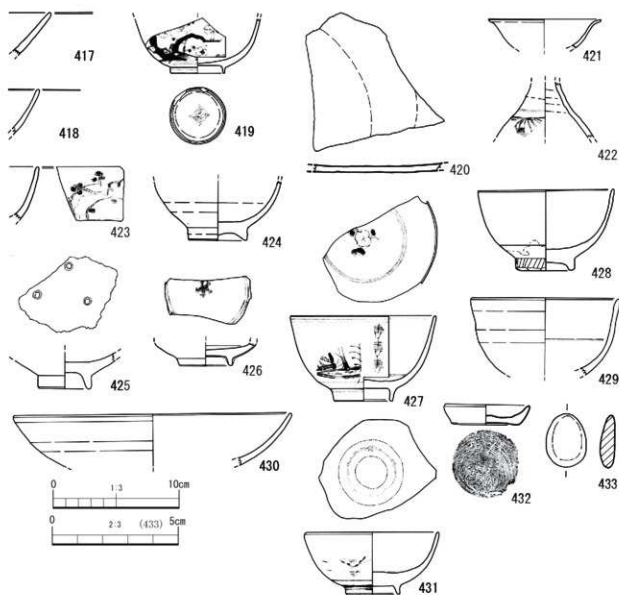
2. 掘立柱建物

2棟検出された。

SB6

調査区北部、下段に近接した検出した。検出部付近は造成により平坦に整地されており、特に西側には段が設けられている。長軸方向が北西-南東方向を向き、柱穴は2間×2間であるが、西側には中柱と南の柱に隣接して柱穴がもう一つずつ検出された。これは底など補助的な柱穴と考えられる。それ以外も柱穴の重複が認められ、建て替えを経ていることを窺わせる。

417～419は遺構内出土の遺物である。いずれも磁器であり、419は染付である。

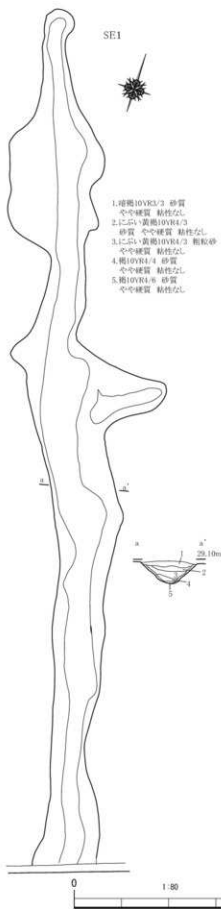


第46図 柱穴内出土遺物実測図 (S=1/3, 2/3)

4. ビット群

SB6の北側において多数の小穴が検出された。周辺はSB6同様に造成されており、整地したうえで掘立柱建物を繰り返し建築したと考えられるが、規則性を持つ柱穴の並びは確認できなかった。

420～431、527～531は近世のビット群から出土した遺物である。420は焙烙の底部である。内外面に摩耗による痕跡は認められず、元より薄手に剥離した石を持ち込んだと思われる。421は口縁部が著しく外反する白磁碗、422は染付であり瓶、もしくは袋物の頸部である。顕著な423は染付碗、424は胴部以下の白磁碗である。425は青磁碗である。426は染付の底部であり、茶筒碗と考えられる。430は大型を呈する陶器の鉢432は中世の小皿であるが、近世のビットに混入したと推測される。433は黒色の石であり、磨いて成形していることから基石として利用されたと考えられる。527は焼成時に2点の甕の底部が融着した陶器である。528



第47図 SE1実測図 (S=1/80)

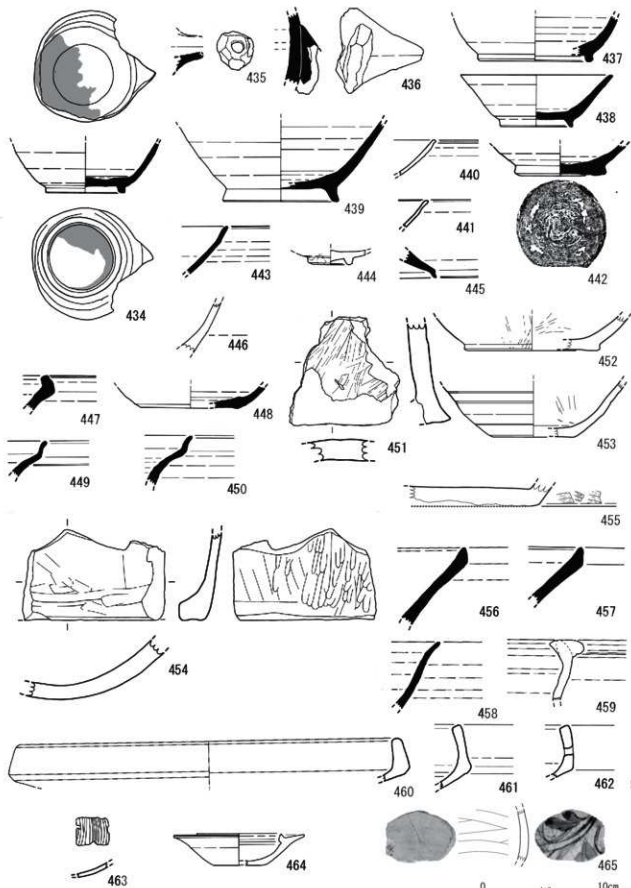
は珪質の石材を研磨し、二枚貝に模した形状に仕上げた石製品である。側縁上部に穿孔しており、紐を通して飾り具として使用したと推測される。531は天目である。

5. 経石

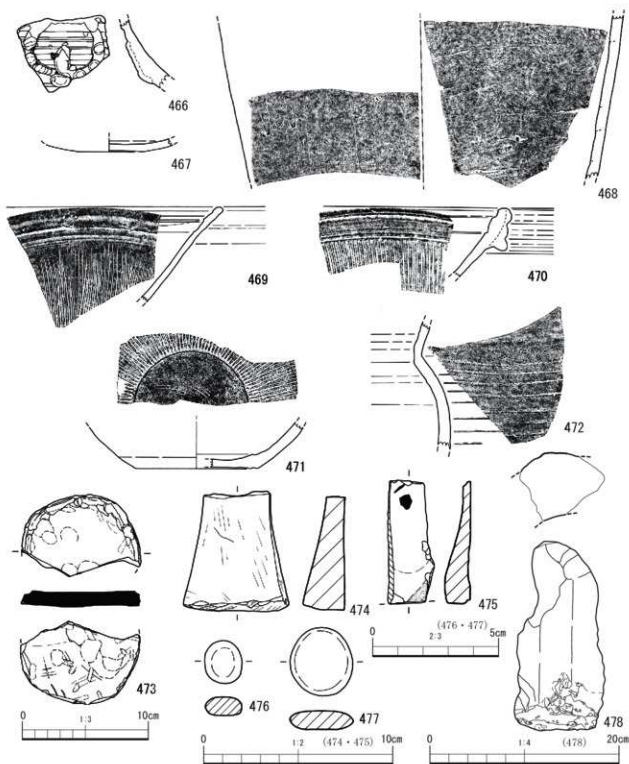
調査開始直後、調査区南部で上段が東に突出する部分の付け根をバックホウで表土剥ぎしていたところ、表土中より扁平な小ぶりの円礫が集中して出土した。この時表土中から出土した礫の数は約200点に上る。礫の表面は全体が摩滅したように滑らかであり、人為的な何らかの使用を思わせるものが多かった。これらの礫のうち、墨で字を書いた痕跡の認められる石は5点である。他の礫には認められなかった。実際は字の書かれた礫がもう少しあるかもしれないが、表面を観察する限り字の書かれた歴はごく一部であったと推測される。なお礫を除去すると、その下部は掘り込みを伴っていなかった。地面に礫を置いただけの状態であった。なお、経石は市内ではいくつか確認例があるが、それらは千点以上の礫を伴っており、それらと比べ本例は礫の数が非常に少ない。これは、経石の上部が既に削平を受けていた可能性が考えられる。また、近代に造成された斜面地で検出されていることや遺構を伴わないことから、近隣に設けられた経石をこの地に移設した可能性もある。

537～541は梵字の確認された経石である。

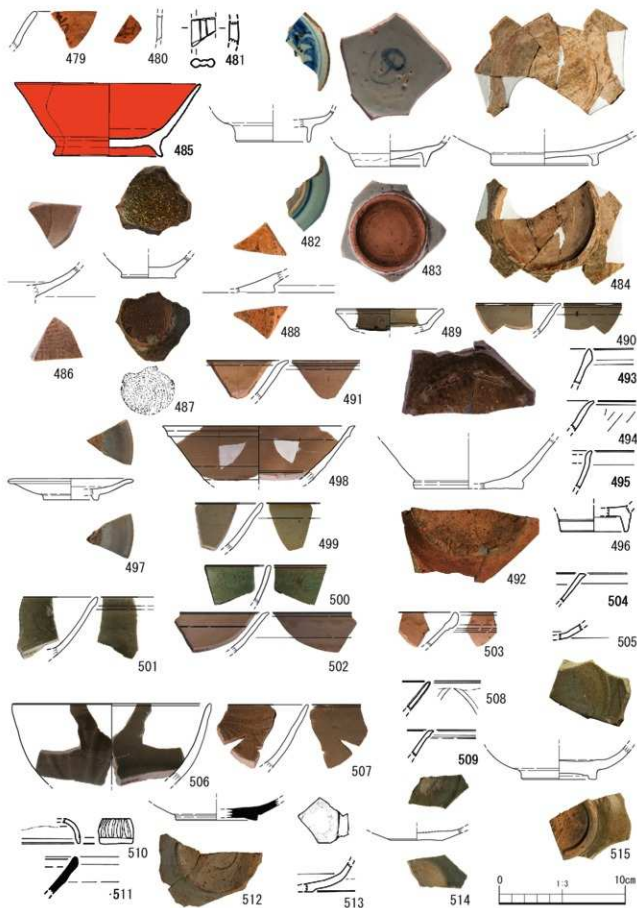
なお経石は井戸に隣接していた。この井戸は、直径約80cmの素掘りである。この井戸は埋土が著しく軟質である上に遺構壁面も軟質のX層であったため、安全上の理由から深さ1mで掘削を中止した。恐らくこの井戸も近世以来使用されたものと推測される。この井戸に隣接して経石をここに置いたと推測される。



第48图 表土出土遺物実測図① (S=1/3)



第49图 表土出土遺物実測図② (S=1/3, 1/2, 2/3, 1/4)



第50図 確認トレンチ・地滑り部出土遺物実測図 (S=1/3)



6. 土坑

ここでは1基紹介する。

SC13

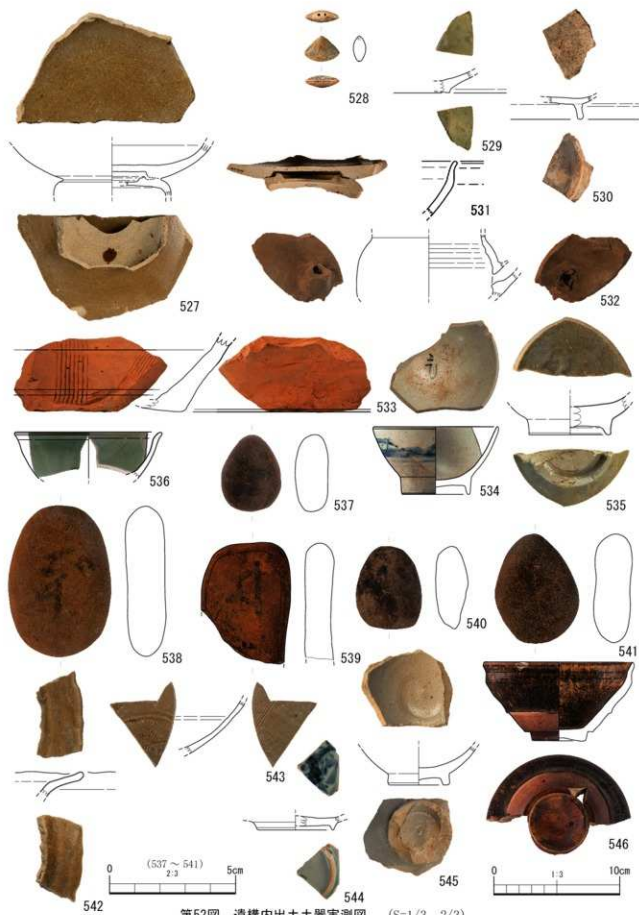
上段のやや北よりで検出した。長軸9m、短軸6mと大型の楕円形を呈する。西から東へ向かう斜面上に構築された遺構であり、X層に達した底面は平坦である。図示可能な遺物に乏しかったが、近世の陶磁器が出土した。

遺構は沈降谷1の底面に近接しており、遺構の西壁は透水性の高いⅢ層から遮水性のあるⅣ層・Ⅴ層が露出している。降雨時に沈降谷に集まった雨水が遺構壁面を伝って土坑に溜まることを意図して構築されたと推測される。なお底面はX層であることから、雨水は遺構内に滞留することなく透水したと考えられる。遺構の北にはSB6があることから、この住人の生活用水を供給するための遺構と思われる。しかし遺構底面には黒色土が堆積しており、このままでは雨水は下段に流下したと推測される。近代に入り、造成北部にL字状の溝が、この土坑に隣接するように設けられたのはそのような事情が想定される。

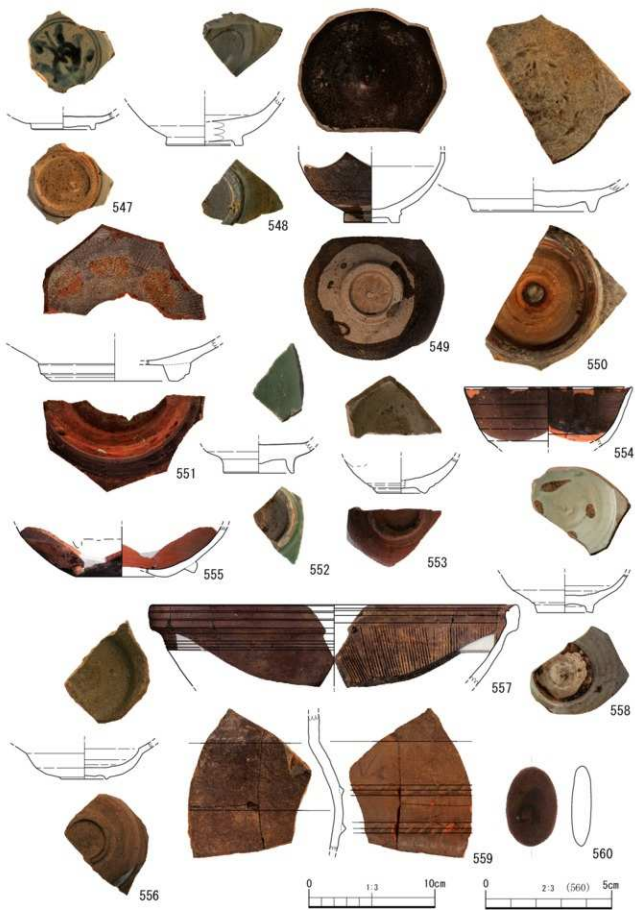
第3項 出土遺物

482、483は沈降谷から出土した近世の陶磁器である。

454、459～462、464～472、547～560は表土中から出土した近世の遺物である。454は移動式カマドと考えられるが、古代の遺構から出土したそれに比べ焼成が良好で器面調整も丁寧



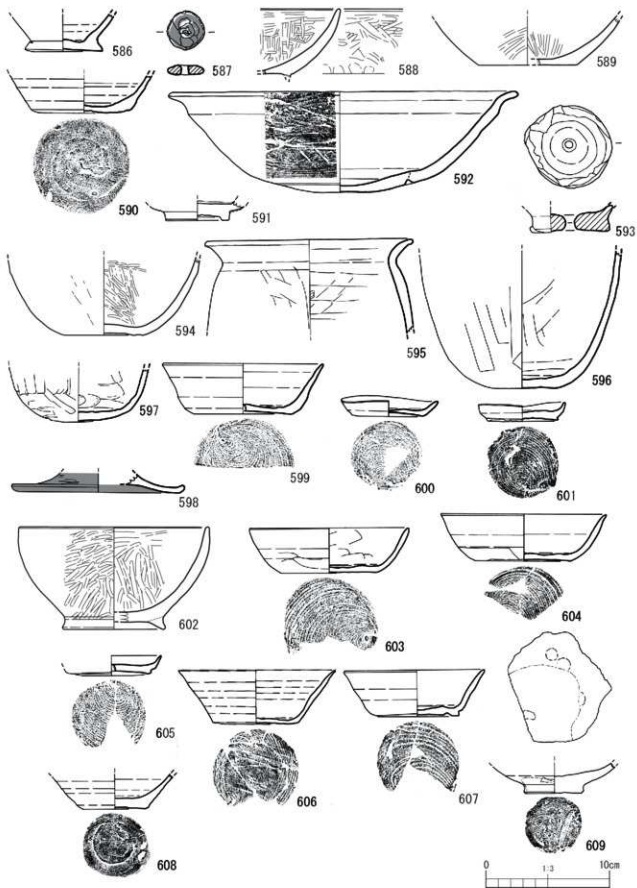
第52図 遺構内出土土器実測図 (S=1/3, 2/3)



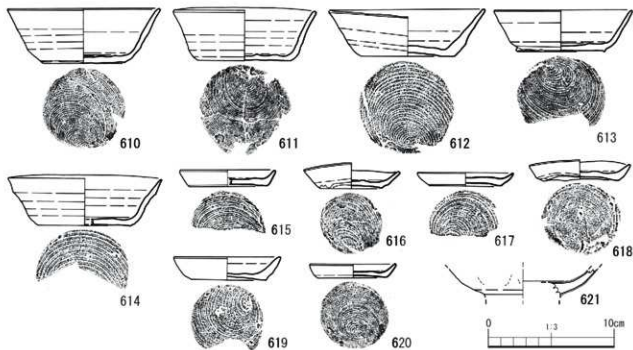
第53图 表土出土文物实测图③ (S=1/3, 2/3)



第54图 表土出土遺物実測図④ (S=1/3)



第55図 確認トレンチ出土遺物実測図① (S=1/3)



第56図 確認トレンチ出土遺物実測図② (S=1/3)

である。460～462は焙烙の口縁部である。464は近世の硯である。469～471は播鉢である。472は大型の甕であり、常滑焼の甕と推測される。473は須恵器の破片であり、周縁を打ち欠いて円形に成形されている。加工された時期は不明であるがここで紹介する。547は省州窯産であることから、中世に遡る可能性が高い。548～558は陶器の碗、550、551は陶器の甕である。557は播鉢、559は大型の甕である。

474～478・560は表土から出土した石器であり、時期の詳細は不明である。474は砂岩製の砥石であり、使用によるためか撥状の形状となっている。475は紅廉片岩製の砥石である。476、477は入念な研磨により仕上げられた硯であり、古代もしくは中世まで遡る可能性がある。478は凝灰岩製の硯に人為的な溝が掘られたものであり、溝に沿って硯が破砕したと考えられ、元は穴の空けられた硯と考えられる。硯の片側、溝の末端部には側には鉄滓の融着が認められる。以上の点から大型の羽口と思われる。560は硯であり、表面には字が書かれる。元は経石と考えられる。

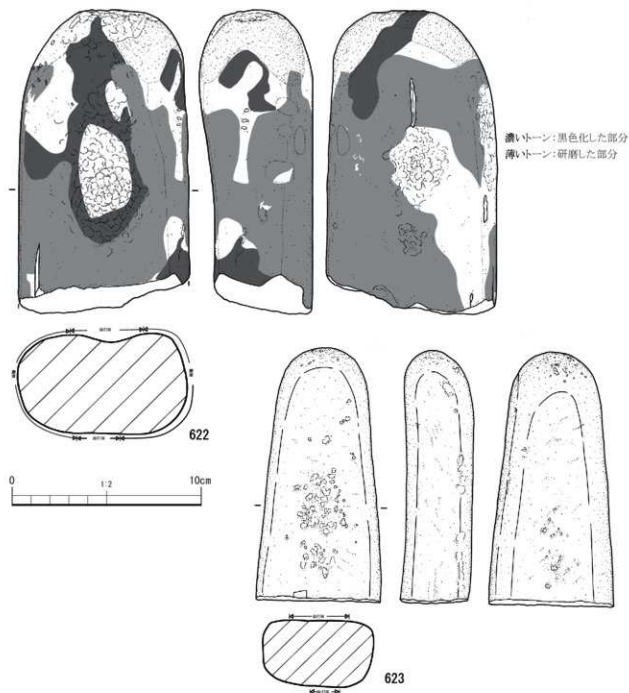
第6節 確認調査の出土遺物

第1項 概要

第1章第3節で述べたように、町ノ前遺跡では平成12年度、14年度、22年度と3回の確認調査が実施されている。この時も多くの遺物が出土していることから、ここで紹介する。

第2項 出土遺物

543～620は543は古代に属する青磁の碗である。内外面に櫛状の工具を使って点描状の施文が行われており、このような特徴から同安窯で製作されたと考えられる。545は白磁の胴部以下である。546は色調や器形から天目茶碗と考えられる。586は土師器の坏、587は円盤形



第57図 出土石器実測図 (S=1/2)

を呈し中心に穿孔が見られ、表面は赤色顔料が付着している。本来は器面に貼り付けられた状態で使用されたと推測される。588、589は内外面にミガキの認められる黒色土器である。591は青磁の碗である。592は鉢形を呈する土師器である。594も黒色土器で鉢形を呈すると推測されるが、口縁部を失っており、更に深い器形になると推測される。594、595～597は甕である。599～601は糸切底の認められる坏と小皿である。602は内外面にミガキを行う碗である。603、604は外面にヘラケズリを行う坏である。603～607は底面に糸切痕が認められることから中世と推測される。610～620も同様に糸切痕の残る底部を持つ坏、もしくは小皿である。出土した坏の断面形はSG1よりSC10に近い形状を呈している。

第1表 出土土器観察表

北陸道 調査番号	年度	発掘 番号	遺構 種別	埋藏 深さ	土層 区分	土質		形状	用途	備考	
						表土	底土				
B-12 第170号	7	297	埋溝	遺文	-	-	2.5YR5/2	2.5YR2/2	良好	横円押型文 ナゲ	瓶土 陶, 灰1mm/多
	8	110	SAS	遺文	-	-	2.5YR5/2	2.5YR5/3	良好	山形押型文 ナゲ	平向山式 瓶土 陶, 灰1mm/少
	9	109	SAS 床面	遺文	-	-	2.5YR5/2	2.5YR5/2	良好	山形押型文 指ナゲ	平向山式 瓶土 陶, 灰3mm/多
	10	464	陥没谷	遺文	-	-	2.5YR5/3	2.5YR5/3	良好	ナゲの後段点 沈	口唇部 キズ付
	11	295	陥没谷	遺文	-	-	2.5YR5/2	2.5YR5/2	良	横条文文 沈溝 具	市販式 波状口縁
	12	296	陥没谷	遺文	-	-	2.5YR5/2	2.5YR5/4	良好	胎子付着 目録未前	瓶土 陶, 灰2mm/多
	13	465	陥没谷	遺文	-	-	2.5YR5/2	2.5YR5/2	良好	目録未前の後ナゲ	瓶土 陶, 灰1mm/多
	14	496	埋溝	遺文	-	-	2.5YR5/6	2.5YR5/6	良好	目録未前の後ナゲ	瓶土 陶, 灰1mm/多
	15	108	SAS	遺文	-	-	2.5YR5/3	2.5YR5/3	良好	条文文の後ナゲ	瓶土 陶, 灰1mm/多
	16	107	SAS	遺文	-	-	2.5YR5/4	2.5YR5/4	良好	条文文 瓶土 陶	市販式 瓶土 陶2mm/値
B-12 第171号	17	467	埋溝	遺文	-	-	2.5YR5/2	2.5YR5/2	良好	胎子付着 ナゲ	工具ナゲ
	18	468	陥没谷	遺文	-	-	2.5YR5/4	2.5YR5/4	良好	横溝遺文 ナゲ	瓶土 陶, 灰1.5mm/少
	19	34	表土下	遺文	-	-	2.5YR5/1	2.5YR5/1	良好	同ナゲ 同ナゲ	瓶土 陶, 灰2mm/少
	20	469	埋溝	遺文	-	-	2.5YR5/2	2.5YR5/2	良好	ナゲ	山口口 瓶土 灰白, 陶1mm/値
	21	470	埋溝	遺文	-	-	2.5YR5/4	2.5YR5/4	良好	ナゲ	瓶土 灰白, 陶1mm/少
	22	351	埋溝	遺文	-	-	2.5YR5/4	2.5YR5/2	良好	ナゲ	瓶土 陶, 灰1mm/多
	23	237	埋溝	遺文	-	-	2.5YR5/4	2.5YR5/3	良好	ナゲ	瓶土 陶, 灰1mm/多
	24	298	埋溝	遺文	-	-	2.5YR5/2	2.5YR5/2	良好	ナゲ	中丸形蓋 瓶前部
	28	19	埋溝	遺文	-	-	2.5YR5/1	2.5YR5/1	良好	同ナゲ	瓶土 陶, 灰2mm/値
	29	18	埋溝	遺文	-	-	2.5YR5/1	2.5YR5/1	良好	同ナゲ	瓶土 白1mm/値
B-15 第172号	30	299	埋溝	遺文	-	-	2.5YR5/3	2.5YR5/3	良好	同ナゲ	つまみ径1.6cm
	31	40	埋溝	遺文	-	-	2.5YR5/1	2.5YR5/1	良好	同ナゲ	瓶土 陶, 灰1mm/少
	32	341	埋溝	遺文	-	-	2.5YR5/1	2.5YR5/1	良好	同ナゲ	瓶土 陶, 灰1mm/少
	33	58	埋溝	遺文	-	-	2.5YR5/4	2.5YR5/4	良好	同ナゲ	瓶土 陶, 灰1mm/少
	34	472	埋溝	遺文	-	-	2.5YR5/4	2.5YR5/4	良好	同ナゲ	瓶土 陶, 灰1mm/少
	35	471	埋溝	遺文	-	-	2.5YR5/4	2.5YR5/4	良好	同ナゲ	瓶土 陶, 灰1mm/少
	36	601	埋溝	遺文	-	-	2.5YR5/4	2.5YR5/4	良好	同ナゲ	瓶土 陶, 灰1mm/少
	38	103	SAS	遺文	-	-	2.5YR5/4	2.5YR5/4	良好	同ナゲ	瓶土 陶, 灰1mm/少
	39	104	SAS	遺文	-	-	2.5YR5/4	2.5YR5/4	良好	同ナゲ	瓶土 陶, 灰1mm/少
	40	105	SAS	遺文	-	-	2.5YR5/4	2.5YR5/4	良好	同ナゲ	瓶土 陶, 灰1mm/少
B-20 第173号	41	605	SAS	遺文	-	-	2.5YR5/6	2.5YR5/2	良好	同ナゲ	瓶土 陶, 灰1mm/少
	42	98	SAS	遺文	-	-	2.5YR5/2	2.5YR5/3	良好	同ナゲ	瓶土 陶, 灰1mm/少
	43	179	SAS	遺文	-	-	2.5YR5/4	2.5YR5/4	良好	同ナゲ	瓶土 陶, 灰1mm/少
	44	99	SAS	遺文	-	-	2.5YR5/2	2.5YR5/2	良好	同ナゲ	瓶土 陶, 灰1mm/少
	45	102	SAS	遺文	-	-	2.5YR5/4	2.5YR5/2	良好	同ナゲ	瓶土 陶, 灰1mm/少
	46	101	SAS	遺文	-	-	2.5YR5/2	2.5YR5/2	良好	同ナゲ	瓶土 陶, 灰1mm/少
	47	100	SAS	遺文	-	-	2.5YR5/4	2.5YR5/4	良好	同ナゲ	瓶土 陶, 灰1mm/少
	48	177	SAS	遺文	-	-	2.5YR5/1	2.5YR5/1	良好	同ナゲ	瓶土 陶, 灰1mm/少
	49	146	SAS	遺文	-	-	2.5YR5/4	2.5YR5/4	良好	同ナゲ	瓶土 陶, 灰1mm/少
	50	148	SAS	遺文	-	-	2.5YR5/4	2.5YR5/4	良好	同ナゲ	瓶土 陶, 灰1mm/少
B-20 第174号	51	145	SAS	遺文	-	-	2.5YR5/4	2.5YR5/4	良好	同ナゲ	瓶土 陶, 灰1mm/少
	52	151	SAS	遺文	-	-	2.5YR5/4	2.5YR5/4	良好	同ナゲ	瓶土 陶, 灰1mm/少
	53	145	SAS	遺文	-	-	2.5YR5/4	2.5YR5/4	良好	同ナゲ	瓶土 陶, 灰1mm/少
	54	150	SAS	遺文	-	-	2.5YR5/4	2.5YR5/4	良好	同ナゲ	瓶土 陶, 灰1mm/少
	55	147	SAS	遺文	-	-	2.5YR5/4	2.5YR5/4	良好	同ナゲ	瓶土 陶, 灰1mm/少
	56	153	SAS	遺文	-	-	2.5YR5/4	2.5YR5/4	良好	同ナゲ	瓶土 陶, 灰1mm/少
	57	154	SAS	遺文	-	-	2.5YR5/4	2.5YR5/4	良好	同ナゲ	瓶土 陶, 灰1mm/少
	58	152	SAS	遺文	-	-	2.5YR5/4	2.5YR5/4	良好	同ナゲ	瓶土 陶, 灰1mm/少
	59	149	SAS	遺文	-	-	2.5YR5/4	2.5YR5/4	良好	同ナゲ	瓶土 陶, 灰1mm/少
	60	155	SAS	遺文	-	-	2.5YR5/4	2.5YR5/4	良好	同ナゲ	瓶土 陶, 灰1mm/少
61	156	SAS	遺文	-	-	2.5YR5/4	2.5YR5/4	良好	同ナゲ	瓶土 陶, 灰1mm/少	

第3表 出土土器観察表

地域(調査地)	年号	発掘番号	種別	器種	口径	高さ	口径/高さ	色		地味	調査		測定(単位:mm)					備考			
								外	内		外	内	A	B	C	D	E				
B.26 新2430	118	188	S84	P6	土器器	—	—	—	—	—	良好	回転ナデ	回転ナデ	底面 回転ナデの切り手 跡 土 層、厚1mm/少	2	—	—	—	—	—	
	119	617	S84	P8	土器器	—	—	—	—	—	やや不良	イガキ ナデ	イガキ	底面 土 層、厚1mm/少	—	—	—	—	—	—	
	120	197	S84	P6	土器器	—	85.50	—	—	—	良好	ハタ目 ナデ ヘラケズリ	不定方向のナデ	底面 不定方向のナデ 跡 土 層、厚1mm/多	2	—	—	—	—	—	
	121	190	S84	P12	土器器	(13.7)	96.70	3.4	12.5/100	12.5/100	良好	回転ナデ	回転ナデ	底面 回転ナデの切り手 跡 土 層、厚1mm/少	—	—	—	—	—	—	
	122	189	S84	P12	土器器	(12.1)	15.20	4.5	12.5/100	12.5/100	良好	ヘラケズリ	回転ナデ	底面 回転ナデの切り手 跡 土 層、厚1mm/少	1	—	—	—	—	—	
	123	191	S84	P15	土器器	—	80.50	—	—	—	良好	回転ナデ	回転ナデ	底面 回転ナデの切り手 跡 土 層、厚1mm/少	1	—	—	—	—	—	
	124	192	S84	P19	土器器	—	66.00	—	—	—	良好	回転ナデ	回転ナデ	底面 回転ナデの切り手 跡 土 層、厚1mm/多	—	—	—	—	—	—	
	125	193	S85	P1	土器器	—	—	—	—	—	良好	コソナデ	コソナデ	底面 土 層、厚1mm/多	—	—	—	—	—	—	
	126	194	S85	P3	土器器	(7.8)	66.00	1.25	12.5/100	12.5/100	良好	回転ナデ	回転ナデ	底面 回転ナデの切り手 跡 土 層、厚1mm/少	—	—	—	—	—	—	
	127	195	S85	P6	土器器	(7.1)	53.10	1.25	12.5/100	12.5/100	良好	回転ナデ	回転ナデ	底面 回転ナデの切り手 跡 土 層、厚1mm/少	—	—	—	—	—	—	
	128	196	S85	P7	土器器	(11.4)	66.20	3.8	12.5/100	12.5/100	良好	回転ナデ	回転ナデ	底面 回転ナデの切り手 跡 土 層、厚1mm/多	—	—	—	—	—	—	
	129	265	SH201	土器器	—	(12.9)	7.0	4.5	12.5/100	12.5/100	良好	回転ナデ	回転ナデ	底面 回転ナデの切り手 跡 土 層、厚1mm/少	—	—	—	—	—	—	
	130	286	SH208	土器器	—	—	13.2	7.2	4.3	12.5/100	12.5/100	良好	回転ナデ	回転ナデ	底面 回転ナデの切り手 跡 土 層、厚1mm/多	—	—	—	—	—	—
	131	284	SH963	土器器	—	—	66.00	—	—	—	良好	回転ナデ	回転ナデ	底面 回転ナデの切り手 跡 土 層、厚1mm/少	—	—	—	—	—	—	
	132	609	SH175	土器器	—	(14.2)	98.20	4.35	12.5/100	12.5/100	良好	ヘラケズリの後土 ガキ	イガキ	底面 回転ナデの切り手 跡 土 層、厚1mm/少	—	—	—	—	—	—	
	133	607	SH862	土器器	—	(14.0)	80.00	4.0	12.5/100	12.5/100	—	やや不良	イガキ	イガキ	底面 ナデ 跡 土 層、厚1mm/少	—	—	—	—	—	—
	134	287	SH188	土器器	—	—	12.8	6.9	3.65	12.5/100	12.5/100	良好	コソナデ	コソナデ	底面 回転ナデの切り手 跡 土 層、厚1mm/少	—	—	—	—	—	—
	135	288	SH283	土器器	—	—	53.00	—	—	—	良好	コソナデ	コソナデ	底面 回転ナデの切り手 跡 土 層、厚1mm/少	—	—	—	—	—	—	
	136	289	SH283	土器器	—	—	53.00	—	—	—	良好	回転ナデ	回転ナデ	底面 回転ナデの切り手 跡 土 層、厚1mm/少	—	—	—	—	—	—	
	137	227	9C2	土器器	—	—	6.65	—	—	—	良好	回転ナデ	回転ナデ	底面 回転ナデの切り手 跡 土 層、厚1mm/少	—	—	—	—	—	—	
138	290	SH135	土器器	—	(14.2)	—	—	—	—	—	ナデ	布瓶	底面 土 層、厚1mm/多	—	—	—	—	—	—		
140	203	SH171	土器器	—	2.2	1.2	1.2	12.5/100	12.5/100	—	良好	ナデ	—	底面 土 層、厚1mm/少	—	—	—	—	—	—	
141	202	SH481	土器器	—	2.5	1.15	1.3	12.5/100	12.5/100	—	良好	ナデ	—	底面 土 層、厚1mm/少	—	—	—	—	—	—	
142	294	SH171	土器器	—	3.2	1.3	1.15	12.5/100	12.5/100	—	—	ナデ	—	底面 土 層、厚1mm/多	—	—	—	—	—	—	
145	234	SC10	土器器	—	(14.6)	6.7	5.4	12.5/100	12.5/100	良好	回転ナデ	回転ナデ	底面 回転ナデの切り手 跡 土 層、厚1mm/少	—	—	—	—	—	—	—	
146	235	SC10	土器器	—	(15.1)	8.75	6.25	12.5/100	12.5/100	良好	回転ナデ	回転ナデ	底面 回転ナデの切り手 跡 土 層、厚1mm/少	—	—	—	—	—	—	—	
147	230	SC10	土器器	—	(27)	—	—	—	—	良好	コソナデ	コソナデ	底面 回転ナデの切り手 跡 土 層、厚1mm/少	—	—	—	—	—	—	—	
148	308	陥没器	土器器	—	(13.0)	6.6	6.65	12.5/100	12.5/100	良好	コソナデ	コソナデ	底面 回転ナデの切り手 跡 土 層、厚1mm/少	—	—	—	—	—	—	—	
149	309	陥没器	土器器	—	12.9	7.4	4.5	12.5/100	12.5/100	良好	回転ナデ	回転ナデ	底面 回転ナデの切り手 跡 土 層、厚1mm/少	—	—	—	—	—	—	—	
150	358	陥没器	土器器	—	(12.9)	6.80	3.98	12.5/100	12.5/100	良好	回転ナデ	回転ナデ	底面 回転ナデの切り手 跡 土 層、厚1mm/少	—	—	—	—	—	—	—	
151	365	陥没器	土器器	—	—	8.2	—	—	—	良好	回転ナデ	回転ナデ	底面 回転ナデの切り手 跡 土 層、厚1mm/少	—	—	—	—	—	—	—	
152	360	陥没器	土器器	—	—	8.60	—	—	—	良好	回転ナデ	回転ナデ	底面 回転ナデの切り手 跡 土 層、厚1mm/少	—	—	—	—	—	—	—	
153	355	陥没器	土器器	—	(12.6)	6.2	4.2	12.5/100	12.5/100	良好	回転ナデ	回転ナデ	底面 回転ナデの切り手 跡 土 層、厚1mm/少	—	—	—	—	—	—	—	
154	381	陥没器	土器器	—	—	6.5	—	—	—	良好	回転ナデ	回転ナデ	底面 回転ナデの切り手 跡 土 層、厚1mm/少	—	—	—	—	—	—	—	
155	357	陥没器	土器器	—	(13.7)	7.87	3.4	12.5/100	12.5/100	良好	回転ナデ	回転ナデ	底面 回転ナデの切り手 跡 土 層、厚1mm/少	—	—	—	—	—	—	—	
156	363	陥没器	土器器	—	—	5.15	—	—	—	良好	回転ナデ	回転ナデ	底面 回転ナデの切り手 跡 土 層、厚1mm/少	—	—	—	—	—	—	—	
157	303	陥没器	土器器	—	(12.8)	9.80	4.0	12.5/100	12.5/100	良好	回転ナデ	回転ナデ	底面 回転ナデの切り手 跡 土 層、厚1mm/少	—	—	—	—	—	—	—	
158	350	陥没器	土器器	—	(12.0)	—	—	—	—	良好	回転ナデ	回転ナデ	底面 回転ナデの切り手 跡 土 層、厚1mm/少	—	—	—	—	—	—	—	
159	361	陥没器	土器器	—	(12.7)	6.00	3.34	12.5/100	12.5/100	良好	回転ナデ	回転ナデ	底面 回転ナデの切り手 跡 土 層、厚1mm/少	—	—	—	—	—	—	—	
160	364	陥没器	土器器	—	(14.0)	7.80	2.4	12.5/100	12.5/100	良好	回転ナデ	回転ナデ	底面 回転ナデの切り手 跡 土 層、厚1mm/少	—	—	—	—	—	—	—	
161	307	陥没器	土器器	—	—	14.35	3.95	8.0	12.5/100	12.5/100	良好	回転ナデ	回転ナデ	底面 回転ナデの切り手 跡 土 層、厚1mm/少	—	—	—	—	—	—	
162	606	陥没器	土器器	—	(7.0)	—	—	—	—	—	やや不良	ナデの後 土ガキ	イガキ	底面 ナデ 跡 土 層、厚1mm/少	—	—	—	—	—	—	
163	304	陥没器	土器器	—	—	7.3	—	—	—	良好	回転ナデ	回転ナデ	底面 回転ナデの切り手 跡 土 層、厚1mm/少	—	—	—	—	—	—	—	
164	319	陥没器	土器器	—	(12.8)	7.4	4.4	12.5/100	12.5/100	良好	回転ナデ	回転ナデ	底面 回転ナデの切り手 跡 土 層、厚1mm/少	—	—	—	—	—	—	—	
165	362	陥没器	土器器	—	—	7.15	—	—	—	良好	回転ナデ	回転ナデ	底面 回転ナデの切り手 跡 土 層、厚1mm/少	—	—	—	—	—	—	—	
166	305	陥没器	土器器	—	—	—	—	—	—	良好	イガキ	イガキ	底面 土 層、厚1mm/少	—	—	—	—	—	—	—	
167	365	陥没器	土器器	—	(13.0)	—	—	—	—	良好	ナデ	布瓶	底面 ナデ 跡 土 層、厚1mm/少	—	—	—	—	—	—	—	
168	313	陥没器	土器器	—	(13.2)	—	—	—	—	良好	ナデ	布瓶	底面 ナデ 跡 土 層、厚1mm/少	—	—	—	—	—	—	—	
169	386	陥没器	土器器	—	(15.0)	—	—	—	—	良好	ナデ	ナデ	底面 ナデ 跡 土 層、厚1mm/少	—	—	—	—	—	—	—	
170	387	陥没器	土器器	—	(11.2)	—	—	—	—	良好	ナデ	ナデ	底面 ナデ 跡 土 層、厚1mm/少	—	—	—	—	—	—	—	

第4表 出土土器観察表

調査年度	年号	発掘区分	遺構名	種類	形状	口径	高さ	土質	色		構成	観察					備考		
									外面	内面		外面	内面	A	B	C		D	E
E. 29 第296号	171	312	陥没	土器	杯	14.0	—	—	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	—	外面 灰褐色の付着物 胎土 焼 4色 / 多
	172	384	陥没	土器	杯	13.9	—	—	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	外面 白色の付着物 胎土 焼 4色 / 多	
	173	382	陥没	土器	杯	23.4	—	—	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多	
	174	383	陥没	土器	杯	—	—	—	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多	
	175	380	陥没	土器	杯	7.0	—	—	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多	
	176	1	陥没	土器	杯	—	—	—	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多	
	177	306	陥没	土器	杯	15.0	8.55	3.6	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多	
	179	311	陥没	土器	杯	—	—	—	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多	
	180	598	陥没	土器	杯	4.4	—	—	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多	
	181	388	陥没	土器	杯	3.2	2.4	2.3	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多	
182	389	陥没	土器	杯	2.1	2.1	2.1	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多		
183	390	陥没	土器	杯	2.9	1.3	1.4	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多		
E. 30 第297号	184	338	埋没	土器	杯	16.3	6.7	4.3	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多	
	185	57	埋没	土器	杯	15.0	7.30	4.3	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多	
	186	379	埋没	土器	杯	12.5	5.6	4.75	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多	
	188	373	埋没	土器	杯	12.3	5.4	4.0	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多	
	189	374	埋没	土器	杯	13.0	5.7	4.5	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多	
	190	333	埋没	土器	杯	11.5	5.0	4.0	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多	
	191	381	埋没	土器	杯	11.7	4.1	5.45	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多	
	192	375	埋没	土器	杯	12.5	5.9	4.1	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多	
	193	376	埋没	土器	杯	12.3	5.7	4.3	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多	
	194	302	埋没	土器	杯	5.4	—	—	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多	
E. 31 第300号	195	339	埋没	土器	杯	12.9	6.9	3.6	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多	
	196	394	埋没	土器	杯	6.5	—	—	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多	
	197	393	埋没	土器	杯	5.9	—	—	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多	
	198	399	埋没	土器	杯	15.65	—	—	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多	
	199	398	埋没	土器	杯	17.6	—	—	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多	
	200	400	埋没	土器	杯	4.25	—	—	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多	
	201	331	埋没	土器	杯	12.0	5.0	3.8	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多	
	202	336	埋没	土器	杯	13.1	7.2	3.9	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多	
	203	13	埋没	土器	杯	6.4	—	—	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多	
	204	316	埋没	土器	杯	12.45	7.8	4.2	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多	
E. 32 第310号	205	401	埋没	土器	杯	6.2	—	—	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多	
	206	323	埋没	土器	杯	6.0	—	—	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多	
	207	408	埋没	土器	杯	5.8	—	—	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多	
	208	407	埋没	土器	杯	6.9	—	—	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多	
	209	321	埋没	土器	杯	5.5	—	—	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多	
	210	322	埋没	土器	杯	4.8	—	—	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多	
	211	320	埋没	土器	杯	4.5	—	—	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多	
	212	410	埋没	土器	杯	5.1	—	—	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多	
	213	334	埋没	土器	杯	15.0	—	—	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多	
	214	404	埋没	土器	杯	5.9	—	—	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多	
215	412	埋没	土器	杯	5.5	—	—	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多		
216	406	埋没	土器	杯	3.6	—	—	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多		
217	402	埋没	土器	杯	7.1	—	—	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多		
218	324	埋没	土器	杯	15.0	—	—	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多		
219	335	埋没	土器	杯	5.4	—	—	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多		
220	403	埋没	土器	杯	5.0	—	—	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多		
221	396	埋没	土器	杯	17.0	—	—	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	ナゲ	外面	和風	—	—	—	胎土 焼 4色 / 多		

第7表 出土土器観察表

調査年度	発掘位置	年号	出土層	品名	種別	口径	高さ	底径	重量	形状		底面	断面					備考	
										外	内		A	B	C	D	E		
E. 30 第336層	330	218	SC10	土器片 小皿	片	7.7	5.4	1.35		12.5±黄褐色 10YR7/3	12.5±黄褐色 10YR6/3	良好	回転ナズ	回転ナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 附土 層, 厚1mm/少
	331	200	SC10	土器片 小皿	片	7.0	5.6	1.5		12.5±黄褐色 10YR7/3	12.5±黄褐色 7.5YR7/4	良好	回転ナズ	回転ナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り
	332	198	SC10	土器片 小皿	片	7.35	6.4	1.3		12.5±黄褐色 10YR7/3	12.5±黄褐色 7.5YR7/4	良好	回転ナズ	回転ナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 附土 層, 厚2mm/少
	333	204	SC10	土器片 小皿	片	8.0	6.6	1.2		12.5±黄褐色 7.5YR6/4	7.5YR6/6	良好	回転ナズ	回転ナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 附土 層, 厚2mm/少
	334	230	SC11	土器片 高杯	片	9.25	-	-		12.5±黄褐色 7.5YR6/3	灰褐色 7.5YR6/2	良好	回転ナズ	回転ナズの後 不定方向のナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 附土 層, 厚2mm/僅
	335	228	SC11	土器片 高杯	片	13.1	-	-		12.5±黄褐色 7.5YR6/3	7.5YR6/4	良好	回転ナズ	回転ナズ	1	1	1	1	附土 層, 厚1mm/少
	336	232	SC11	土器片 高杯	片	10.3	-	-		12.5±黄褐色 7.5YR6/3	7.5YR6/4	良好	回転ナズの後 ヨコナズ	回転ナズの後不定 方向のナズ	1	1	1	1	附土 層, 厚2mm/多
	337	229	SC11	土器片 高杯	片	12.5	-	-		12.5±黄褐色 7.5YR6/4	7.5YR6/4	良好	回転ナズ	回転ナズの後 不定 方向のナズ	1	1	1	1	附土 層, 厚2mm/僅
	338	233	SC11	土器片 高杯	片	17.1	-	-		12.5±黄褐色 7.5YR6/4	7.5YR6/4	良好	回転ナズ	回転ナズ回転ナズの 後不定方向のナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 附土 層, 厚2mm/僅
	339	231	SC11	土器片 片	片	6.1	-	-		12.5±黄褐色 7.5YR6/4	7.5YR6/4	良好	回転ナズ	回転ナズの後 ミナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 附土 層, 厚2mm/多
E. 30 第400層	342	255	SG1	土器片 片	片	11.45	6.8	3.8		12.5±黄褐色 7.5YR6/4	12.5±黄褐色 7.5YR6/4	良好	回転ナズ	回転ナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 附土 層, 厚1mm/多
	343	257	SG1	土器片 片	片	12.2	7.4	4.0		12.5±黄褐色 7.5YR6/4	12.5±黄褐色 7.5YR6/4	良好	回転ナズ	回転ナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 附土 層, 厚1mm/多
	344	258	SG1	土器片 片	片	12.3	7.5	4.7		12.5±黄褐色 7.5YR6/4	12.5±黄褐色 10YR7/4	良好	回転ナズ	回転ナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 附土 層, 厚1mm/僅
	345	259	SG1	土器片 片	片	(11.8)	(6.7)	4.15		灰黄褐色 10YR5/2	灰黄褐色 10YR5/2	良	回転ナズ	回転ナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 附土 層, 厚1mm/少
	346	260	SG1	土器片 片	片	(12.6)	7.25	4.3		12.5±赤褐色 5YR5/4	12.5±黄褐色 7.5YR5/3	良好	回転ナズ	回転ナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 外底面 木目 状圧痕 附土 層, 厚2mm/少
	347	261	SG1	土器片 片	片	11.7	6.7	4.2		12.5±赤褐色 5YR5/4	12.5±赤褐色 5YR5/4	良好	回転ナズ	回転ナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 附土 層, 厚1mm/多
	348	262	SG1	土器片 片	片	11.2	7.3	3.9		12.5±黄褐色 10YR7/4	7.5YR6/4	良好	回転ナズ	回転ナズ回転ナズの 後不定方向のナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 附土 層, 厚1mm/多
	349	263	SG1	土器片 片	片	11.7	6.4	4.1		12.5±黄褐色 10YR6/4	12.5±黄褐色 7.5YR6/4	良好	回転ナズ	回転ナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 附土 層, 厚1mm/多
	350	264	SG1	土器片 片	片	(12.1)	(6.0)	3.8		12.5±黄褐色 7.5YR6/4	7.5YR6/4	良好	回転ナズ	回転ナズ回転ナズの 後不定方向のナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 附土 層, 厚1mm/多
	351	265	SG1	土器片 片	片	11.8	6.9	4.3		12.5±黄褐色 7.5YR7/4	12.5±黄褐色 7.5YR7/4	良好	回転ナズ	回転ナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 附土 層, 厚1mm/多
E. 31 第410層	352	266	SG1	土器片 片	片	12.1	7.0	4.5		褐色 7.5YR6/3	7.5YR6/3	良	回転ナズ	口唇部削 削ナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 附土 層, 厚1mm/多
	353	267	SG1	土器片 片	片	(11.9)	7.1	4.1		12.5±黄褐色 10YR7/4	12.5±黄褐色 10YR6/4	良好	回転ナズ	回転ナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 附土 層, 厚1mm/僅
	354	268	SG1	土器片 片	片	12.0	7.3	4.6		12.5±黄褐色 7.5YR6/4	12.5±黄褐色 7.5YR6/4	良好	回転ナズ	回転ナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 附土 層, 厚1mm/多
	355	269	SG1	土器片 片	片	6.2	-	-		12.5±黄褐色 7.5YR6/4	7.5YR6/5	良好	回転ナズ	回転ナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 附土 層, 厚2mm/多
	356	270	SG1	土器片 片	片	12.3	7.7	4.4		12.5±黄褐色 7.5YR6/4	12.5±黄褐色 7.5YR6/4	良好	回転ナズ	回転ナズ回転ナズの 後不定方向のナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 附土 層, 厚1mm/少
	357	271	SG1	土器片 片	片	11.7	7.8	4.1		12.5±黄褐色 5YR6/6	7.5YR6/4	良好	回転ナズ	回転ナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 附土 層, 厚5mm/少
	358	272	SG1	土器片 片	片	12.2	7.2	4.1		12.5±黄褐色 7.5YR7/4	7.5YR7/4	良好	回転ナズ	回転ナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 附土 層, 厚1mm/多
	359	273	SG1	土器片 片	片	(12.4)	(8.0)	4.4		12.5±黄褐色 5YR6/4	7.5YR6/4	良好	回転ナズ	回転ナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 附土 層, 厚1mm/多
	360	274	SG1	土器片 片	片	11.45	6.35	4.1		12.5±黄褐色 10YR6/4	7.5YR6/4	良好	回転ナズ	回転ナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 附土 層, 厚1mm/多
	361	276	SG1	土器片 片	片	(13.2)	(8.05)	3.5		12.5±黄褐色 7.5YR6/4	7.5YR6/4	良好	回転ナズ	回転ナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 附土 層, 厚1mm/僅
E. 31 第411層	362	240	SG1	土器片 小皿	片	8.1	6.1	1.8		12.5±黄褐色 7.5YR6/4	12.5±黄褐色 10YR5/3	良好	回転ナズ	回転ナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 附土 層, 厚2mm/多
	363	241	SG1	土器片 小皿	片	7.30	5.9	0.8		12.5±黄褐色 10YR6/4	7.5YR6/4	良好	回転ナズ	回転ナズ回転ナズの 後不定方向のナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 附土 層, 厚1mm/少
	364	242	SG1	土器片 小皿	片	(7.6)	(5.8)	1.6		12.5±黄褐色 5YR6/4	12.5±赤褐色 5YR5/4	やや良好	回転ナズ	回転ナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 附土 層, 厚1mm/少
	365	243	SG1	土器片 小皿	片	8.25	6.7	1.45		12.5±黄褐色 7.5YR6/4	12.5±黄褐色 7.5YR6/4	良好	回転ナズ	回転ナズ回転ナズの 後不定方向のナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 附土 層, 厚1mm/多
	366	245	SG1	土器片 小皿	片	(7.6)	(5.2)	1.45		12.5±黄褐色 7.5YR5/3	12.5±黄褐色 7.5YR6/4	良好	回転ナズ	回転ナズ回転ナズの 後不定方向のナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 附土 層, 厚1mm/多
	367	246	SG1	土器片 小皿	片	(8.6)	(6.2)	1.2		12.5±黄褐色 7.5YR6/4	12.5±黄褐色 7.5YR6/4	良好	回転ナズ	回転ナズ回転ナズの 後不定方向のナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 附土 層, 厚1mm/僅
	368	248	SG1	土器片 小皿	片	(7.9)	6.0	1.35		12.5±黄褐色 7.5YR6/4	7.5YR6/4	良好	回転ナズ	回転ナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 附土 層, 厚1mm/多
	369	249	SG1	土器片 小皿	片	7.8	5.9	1.7		褐色 5YR6/6	5YR6/6	良好	回転ナズ	回転ナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 附土 層, 厚1mm/僅
	370	250	SG1	土器片 小皿	片	7.6	5.5	1.7		12.5±黄褐色 5YR6/6	7.5YR6/4	良好	回転ナズ	回転ナズ回転ナズの 後不定方向のナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 附土 層, 厚2mm/少
	371	251	SG1	土器片 小皿	片	7.85	6.25	1.5		褐色 5YR6/6	5YR6/6	良好	回転ナズ	回転ナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 附土 層, 厚1mm/多
E. 31 第412層	372	252	SG1	土器片 小皿	片	8.00	5.05	1.5		12.5±黄褐色 7.5YR6/4	7.5YR6/4	良好	回転ナズ	回転ナズ回転ナズの 後不定方向のナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 附土 層, 厚1mm/多
	373	254	SG1	土器片 片	片	8.0	5.0	1.5		12.5±黄褐色 7.5YR6/4	12.5±黄褐色 7.5YR6/4	良好	回転ナズ	回転ナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 附土 層, 厚2mm/少
	374	279	SG1	土器片 片	片	5.4	-	-		12.5±黄褐色 10YR7/3	褐色 5YR4/3	良好	回転ナズ	回転ナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 内面に墨打 痕 附土 層, 厚1mm/少
	375	244	SG1	土器片 小皿	片	(7.4)	(5.9)	1.6		12.5±黄褐色 7.5YR6/4	12.5±赤褐色 5YR5/4	良好	回転ナズ	回転ナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 附土 層, 厚1mm/多
	376	247	SG1	土器片 小皿	片	(7.4)	(5.6)	1.85		12.5±黄褐色 7.5YR7/4	12.5±黄褐色 7.5YR6/4	良好	回転ナズ	回転ナズの後不定 方向のナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 後不定方向の ナズ 附土 層, 厚1mm/多
	377	275	SG1	土器片 片	片	(11.2)	7.8	3.6		12.5±黄褐色 7.5YR7/4	7.5YR6/4	良好	回転ナズ	回転ナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 内面に墨打 痕 附土 層, 厚1mm/多
	378	277	SG1	土器片 片	片	6.60	-	-		12.5±黄褐色 7.5YR6/4	12.5±黄褐色 7.5YR6/4	良好	回転ナズ	回転ナズの後不定 方向のナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 附土 層, 厚1mm/少
	380	253	SG1	土器片 片	片	(7.7)	-	-		12.5±黄褐色 7.5YR7/4	7.5YR7/4	良好	回転ナズ	回転ナズ回転ナズの 後不定方向のナズ	1	1	1	1	底面 回転糸切り 後不定方向 のナズ 附土 層, 厚3mm/僅
	381	280	SG1	土製品 土埴 最大径長軸	丸	3.2	1.45	1.4		12.5±黄褐色 7.5YR6/4	-	一	ナズ	-	-	-	-	-	底面 回転糸切り 附土 層, 厚1mm/少
	382	282	SG1	土製品 土埴 最大径長軸	丸	3.2	1.45	1.3		12.5±黄褐色 7.5YR7/3	-	一	ナズ	-	-	-	-	-	底面 回転糸切り 附土 層, 厚1mm/少

第8表 出土土器観察表

調査年度	発掘区画	年号	出土層	遺物番号	種別	形状	寸法	土質	色	面	地蔵	用途		測定					備考																						
												用途	用途	A	B	C	D	E		F																					
第145回	E-41	281	5G1	281	土器	片断	4.1	1.95	1.95	黄褐色	西	-	ナブ	-	-	-	-	-	-	-	-	粘土、灰1mm/多																			
																							282	5G1	282	土器	片断	8.0	-	にぶい黄褐色	黄	西	良好	回転ナブ	ニガキ	多数	底面回転ナブの残存部分あり	粘土、灰1mm/多	表面自然釉		
																							283	5G1	283	土器	片断	-	-	黄褐色	灰	西	良好	回転ナブ	ナブ、ハケ目 指押	ナブ	多数	底面回転ナブの残存部分あり	粘土、灰1mm/多	表面自然釉	
																							289	21	5G1	289	土器	片断	0.80	-	黄褐色	灰	西	良好	回転ナブ	ナブ	1少	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/少	表面自然釉	
																							292	315	地埴り部	292	土器	片断	12.65	8.2	3.9	にぶい黄褐色	黄	西	良好	回転ナブ	回転ナブ	1多	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/多	表面自然釉
																							293	372	地埴り部	293	土器	片断	11.6	6.9	4.4	黄褐色	灰	西	良好	回転ナブ	回転ナブ	1多	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/多	表面自然釉
																							294	314	地埴り部	294	土器	片断	12.1	7.6	4.15	にぶい黄褐色	黄	西	良好	回転ナブ	回転ナブ	1多	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/多	表面自然釉
																							295	418	地埴り部	295	土器	片断	11.7	7.45	3.4	にぶい黄褐色	黄	西	良好	回転ナブ	回転ナブ	1多	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/多	表面自然釉
																							296	350	地埴り部	296	土器	片断	11.29	6.2	3.55	にぶい黄褐色	黄	西	良好	回転ナブ	回転ナブ	1多	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/多	表面自然釉
																							297	421	地埴り部	297	土器	片断	-	7.5	-	にぶい黄褐色	黄	西	良好	回転ナブ	回転ナブの後一方のナブ	1少	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/少	表面自然釉
第146回	E-42	318	地埴り部	土器	片断	-	6.5	-	-	にぶい黄褐色	黄	良好	回転ナブ	回転ナブの後不定方向のナブ	1多	1値	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/多	表面自然釉	-																					
																					320	地埴り部	土器	片断	-	7.1	-	にぶい黄褐色	黄	西	良好	回転ナブ	回転ナブ	1多	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/多	表面自然釉				
																					400	422	地埴り部	土器	片断	-	7.5	-	黄褐色	灰	西	良好	回転ナブ	回転ナブ	1多	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/多	表面自然釉			
																					401	340	地埴り部	土器	片断	11.7	7.4	3.8	にぶい黄褐色	黄	西	良好	回転ナブ	回転ナブ	1多	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/多	表面自然釉			
																					402	416	地埴り部	土器	片断	6.80	5.60	1.2	にぶい黄褐色	黄	西	良好	回転ナブ	回転ナブ	1多	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/多	表面自然釉			
																					403	349	地埴り部	土器	片断	7.55	5.6	1.95	黄褐色	灰	西	良好	回転ナブ	回転ナブ	1多	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/多	表面自然釉			
																					404	319	地埴り部	土器	片断	7.15	5.0	1.65	にぶい黄褐色	黄	西	良好	回転ナブ	回転ナブの後不定方向のナブ	2少	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/多	表面自然釉			
																					405	328	地埴り部	土器	片断	7.1	5.8	1.25	にぶい黄褐色	黄	西	良好	回転ナブ	回転ナブの後不定方向のナブ	1少	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/少	表面自然釉			
																					406	15	地埴り部	土器	片断	12.8	-	-	黄褐色	灰	西	良好	回転ナブ	ナブ 指押さ	1少	1値	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/少	表面自然釉		
																					407	16	地埴り部	土器	片断	-	-	-	黄褐色	灰	西	良好	回転ナブ	指押さ	1少	1値	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/少	表面自然釉		
第149回	E-43	408	3	地埴り部	土器	片断	-	-	-	黄褐色	灰	良好	回転ナブ	回転ナブ	1多	1値	底面回転ナブ	粘土、灰2mm/少	表面自然釉	-																					
																					409	2	地埴り部	土器	片断	-	-	-	黄褐色	灰	西	良好	回転ナブ	回転ナブ	2多	底面回転ナブ	粘土、灰2mm/多	表面自然釉			
																					414	4	地埴り部	土器	片断	-	-	-	黄褐色	灰	西	良好	回転ナブ	回転ナブの後ナブ	1多	1値	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/多	表面自然釉		
																					415	6	地埴り部	土器	片断	-	-	-	黄褐色	灰	西	良好	回転ナブ	回転ナブの後ナブ	1多	1値	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/多	表面自然釉		
																					420	63	SH68	土器	片断	-	-	-	黄褐色	灰	西	良好	回転ナブ	回転ナブ	1多	1値	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/多	表面自然釉		
																					423	283	SH62	土器	片断	6.6	5.3	1.55	にぶい黄褐色	黄	西	良好	回転ナブ	回転ナブ	1多	1値	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/多	表面自然釉		
																					432	32	表土中	土器	片断	-	6.3	-	黄褐色	灰	西	良好	回転ナブ	回転ナブの後不定方向のナブ	1少	1値	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/少	表面自然釉		
																					435	37	表土中	土器	片断	-	-	-	黄褐色	灰	西	良好	回転ナブ	回転ナブ	1少	1値	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/少	表面自然釉		
																					436	35	表土中	土器	片断	-	-	-	黄褐色	灰	西	良好	回転ナブ	回転ナブの後ナブ	1多	1値	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/多	表面自然釉		
																					437	36	表土中	土器	片断	-	6.0	-	黄褐色	灰	西	良好	回転ナブ	回転ナブの後不定方向のナブ	1多	1値	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/多	表面自然釉		
第148回	E-44	438	2	表土中	土器	片断	11.10	5.60	4.1	にぶい黄褐色	黄	良好	回転ナブ	回転ナブの後不定方向のナブ	1少	1値	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/少	表面自然釉	-																					
																					439	26	表土中	土器	片断	-	6.0	-	黄褐色	灰	西	良	回転ナブ	回転ナブの後不定方向のナブ	1多	1値	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/多	表面自然釉		
																					441	38	表土中	土器	片断	-	-	-	黄褐色	灰	西	良好	回転ナブ	回転ナブ	1多	1値	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/多	表面自然釉		
																					442	25	表土中	土器	片断	-	7.2	-	黄褐色	灰	西	良	回転ナブ	回転ナブ	1多	1値	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/多	表面自然釉		
																					443	23	表土中	土器	片断	-	-	-	黄褐色	灰	西	良好	回転ナブ	回転ナブ	1多	1値	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/多	表面自然釉		
																					445	31	表土中	土器	片断	-	-	-	黄褐色	灰	西	良好	回転ナブ	回転ナブ	1多	1値	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/多	表面自然釉		
																					447	30	表土中	土器	片断	-	-	-	黄褐色	灰	西	良好	回転ナブ	回転ナブ	1多	1値	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/多	表面自然釉		
																					448	24	表土中	土器	片断	-	7.90	-	黄褐色	灰	西	良好	回転ナブ	回転ナブ	1多	1値	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/多	表面自然釉		
																					449	84	表土中	土器	片断	-	-	-	黄褐色	灰	西	良好	回転ナブ	回転ナブ	1多	1値	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/多	表面自然釉		
																					450	83	表土中	土器	片断	-	-	-	黄褐色	灰	西	良好	回転ナブ	回転ナブ	1多	1値	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/多	表面自然釉		
第149回	E-45	451	481	表土中	土器	片断	8.6	8.75	1.7	にぶい黄褐色	黄	良好	回転ナブ	回転ナブ	1多	1値	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/多	表面自然釉	-																					
																					452	604	表土中	土器	片断	-	10.20	-	にぶい黄褐色	黄	西	良好	回転ナブ	回転ナブ	1多	1値	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/多	表面自然釉		
																					453	608	表土中	土器	片断	-	6.4	-	黄褐色	灰	西	やや不良	回転ナブ	回転ナブ	1多	1値	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/多	表面自然釉		
																					454	486	表土中	土器	片断	7.15	11.2	1.1	にぶい黄褐色	黄	西	良好	回転ナブ	回転ナブの後方向のナブ	1多	1値	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/多	表面自然釉		
																					456	28	表土中	土器	片断	-	-	-	黄褐色	灰	西	良好	回転ナブ	回転ナブ	1多	1値	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/多	表面自然釉		
																					457	29	表土中	土器	片断	-	-	-	黄褐色	灰	西	良好	回転ナブ	回転ナブ	1多	1値	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/多	表面自然釉		
																					458	27	表土中	土器	片断	-	-	-	黄褐色	灰	西	良好	回転ナブ	回転ナブ	1多	1値	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/多	表面自然釉		
																					460	70	表土中	土器	片断	120.4	-	-	にぶい黄褐色	黄	西	良好	回転ナブ	回転ナブ	1少	1値	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/少	表面自然釉		
																					461	74	表土中	土器	片断	-	-	-	黄褐色	灰	西	良好	回転ナブ	回転ナブ	1少	1値	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/少	表面自然釉		
																					462	75	表土中	土器	片断	-	-	-	黄褐色	灰	西	良好	回転ナブ	ナブ	1多	1値	底面回転ナブ	粘土、灰1mm/多	表面自然釉		

第10表 出土石器観察表

掲載頁 図番号	掲載番号	実測 番号	遺構等	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備 考
p. 11 第10図	1	500	石鍾集中	石鍾	砂岩	7.40	6.45	2.60	184.80	
	2	501	石鍾集中	石鍾	砂岩	8.05	7.60	2.15	177.10	
	3	502	石鍾集中	石鍾	砂岩	10.45	6.15	2.20	197.10	
	4	503	石鍾集中	石鍾	砂岩	8.35	5.70	2.00	140.80	
	5	504	石鍾集中	石鍾	砂岩	9.35	6.90	2.40	183.60	
	6	505	石鍾集中	石鍾	砂岩	8.15	6.45	2.55	174.80	
p. 12 第11図	25	499	SH769	石鏃	珪化木	2.38	1.68	0.30	1.00	
	26	489	B鑿	石鏃	安山岩	2.85	1.80	0.25	1.60	
	27	172	SA3	石鏃	黒曜石	—	1.40	0.25	(0.1以下)	総高産 先端部欠損
p. 15 第14図	36	497	地滑り部	碧玉	碧玉	2.20	1.10	1.10	5.00	古墳時代 出雲系
	49	106	SA1	石製品	頁岩	14.80	2.50	1.85	7.22	先端部に使用痕
p. 21 第18図	104	181	SA3	磨鏡	石英	2.40	1.55	1.15	5.10	
	105	175	SA3	藏石	砂岩	(4.80)	(3.85)	(2.35)	(58.00)	上部欠損
	106	180	SA3	紡錘車?	頁岩	(3.15)	(2.05)	0.25	(2.10)	
	107	491	SA3-4	軽石製品	軽石	10.70	10.70	5.10	111.90	
p. 34 第33図	303	495	地滑り部	平石	頁岩?	2.00	1.80	0.60	3.20	
	304	300	地滑り部	平石	頁岩?	1.30	1.10	0.60	1.30	
	305	496	地滑り部	平石	頁岩?	1.82	1.95	1.10	5.80	白
	306	301	地滑り部	平石	砂岩?	1.40	1.30	0.55	1.50	
p. 41 第41図	390	628	SG1	石鏃	滑石	—	—	—	—	工具痕
	391	631	SG1	石鏃	滑石	—	—	—	—	工具痕
p. 42 第42図	410	629	地滑り部	石鏃	滑石	(23.00)	—	—	—	工具痕
	411	626	地滑り部	石鏃	滑石	—	—	—	—	工具痕
	412	630	地滑り部	石鏃	滑石	—	—	—	—	工具痕
	413	627	地滑り部	石鏃	滑石	—	—	—	—	工具痕
	416	640	地滑り部	袖釘具	滑石	2.90	1.40	—	15.20	
p. 46 第46図	433	498	SH649	平石	2.15	1.60	0.60	3.10	墓石?	
p. 48 第48図	455	632	表土中	石鏃	滑石	—	—	—	—	工具痕
	474	509	表土中	砥石	砂岩	(6.40)	5.55	2.25	(92.10)	上部欠損
p. 49 第49図	475	508	表土中	砥石	紅廉片岩	6.60	(2.45)	1.35	(23.10)	両端欠損
	476	302	表土中	墓石?	頁岩?	1.75	1.50	0.75	2.70	研磨
	477	488	表土中	墓石	頁岩	2.70	2.50	0.75	8.00	研磨
	478	641	表土中	羽口	扇状岩	(20.00)	8.90	7.20	920.40	
p. 52 第52図	528	639	SH337	貝形装飾品	チャート	2.70	3.60	1.30	13.00	
	537	634	経石	経石	砂岩	3.10	2.30	1.30	13.80	
	538	633	経石	経石	砂岩	6.00	4.10	1.55	58.70	
	539	638	経石	経石	砂岩	(4.80)	(3.60)	1.15	(31.10)	下部欠損
	540	635	経石	経石	砂岩	3.30	2.10	1.35	13.40	
	541	636	経石	経石	砂岩	4.30	3.30	1.50	31.40	
p. 53 第53図	560	637	表土中	経石	砂岩	3.20	2.00	0.80	8.40	
p. 57 第57図	622	510	表土中	藏石	砂岩	(16.05)	(9.00)	5.30	(1400.00)	下部欠損
	623	492	SO6	藏石	砂岩	13.35	6.65	3.50	566.90	

第11表 出土鉄製品観察表

掲載頁 図番号	掲載番号	実測 番号	遺構等	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備 考
p. 21 第18図	108	642	SA3床面	鈎帯小?	2.5	2	0.3		
	109	643	SA3小穴内	刀子	8.4	1.2	0.5		木質と鐵雜? 残存
p. 27 第25図	143	647	SH820	方頭洋鍔鉄鏃小	4.5	2.2	0.7		
	144	646	SH470	刀子	5.3	1.3	0.7		
p. 34 第33図	299	650	地滑り部	刀子	13.3	1.2	0.7		
	300	648	地滑り部	釘	19.4	1	0.7		
	301	651	地滑り部	釘]	1.2	0.7		
	302	649	地滑り部	不明品	10	1.2	0.5		
p. 38 第38図	340	645	SC12	鉄鏃(方頭式)	14.6	1	1		
	341	644	SC12	刀子	13	2.1	0.7		木質残存

第12表 出土陶磁器観察表

掲載頁 因番号	番号	実測 番号	遺構等	種別	器種	法量 cm () : 復元			産地	時期	備考
						口径	底径	器高			
p. 21 第18図	101	170	SA3	陶器	小型壺	(8, 8)	—	—			
	p. 27 第25図	139	236	視丘	緑釉陶器	皿	—	(6, 4)	—	京都 洛西型	ミガキ 緑釉 蛇目高台
		p. 30 第29図	178	42	沈降谷	白磁	碗	—	—	—	
p. 41 第41図	379	60	SG1	白磁	皿	—	—	—	福建 広東		
	384	61	SG1	青磁	碗	—	(5, 4)	—	中国龍泉窯系	中世	蓮弁文
	386	564	SG1	陶器	甕	(20, 1)	—	—	常滑		口縁部から外面に自然釉 S字状突帯
	387	62	SG1	陶器	甕	—	—	—	備前	中世	工具痕
	417	86	SB6 P11	陶器	碗	—	—	—			内外面 貫入
	418	85	SB6 P2	陶器	碗	—	—	—			内外面 貫入
	419	90	SB260	磁器	染付碗	—	4.2	—	肥前系		底面 裏銘「うず福」
p. 46 第46図	421	65	SB502	白磁	皿	(8, 8)	—	—	福建 広東		
	422	87	SB820	磁器	瓶	—	—	—	肥前		ラッキョウ形 染付
	423	88	SF1	磁器	染付碗	—	—	—	肥前		
	424	91	SB262	白磁	碗	—	4.5	—		17C前	内外面 貫入 砂目付着
	425	89	SF1	青磁	碗	—	(4, 0)	—			内外面 貫入
	426	94	SB606	青磁	磁器碗	—	(4, 0)	—	肥前	18C中～後半	五年花 コシニヤク印 二重圓縁 砂目付着
	427	92	SB47	磁器	染付碗	(11, 5)	(4, 5)	6.8	肥前	古代	砂目付着
	428	95	SB858	陶器	碗	11.8	4.7	6.4	肥前?	近世	
	429	96	SB42	陶器	碗	(11, 6)	—	—			
	430	93	SB430	陶器	鉢	(21, 8)	—	—			内外面 貫入
	431	97	SB57	磁器	染付碗	(10, 4)	4.1	4.9		17C中～後半	砂目付着 見込 蛇ノ目輪割ぎ
	p. 48 第48図	440	82	表土中	灰釉陶器	碗	—	—	—		
444		81	表土中	白磁	碗	—	2.9	—	福建 広東		
446		66	II層	青磁	碗	—	—	—	越前		内外面貫入
459		73	表土中	陶器	鉢	—	—	—			薩摩?
464		64	表土中	陶器	碗	(10, 2)	(4, 0)	2.5			
p. 49 第49図	465	590	表土中	磁器	染付壺	—	—	—			青花
	466	76	表土中	陶器	甕	—	—	—			地軸陶器部
	467	79	表土中	陶器	土瓶	—	(5, 0)	—	薩摩		外底面 スス付着
	468	80	表土中	陶器	甕	—	—	—			
	469	72	表土中	陶器	捕鉢	—	—	—			口縁部自然釉 貼付突帯
	470	71	表土中	陶器	捕鉢	—	—	—			
	471	78	表土中	陶器	捕鉢	—	(9, 7)	—	堺 明石系		
	472	77	表土中	陶器	甕	—	—	—	常滑?		
p. 50 第50図	481	487	除染谷	陶器	把手	—	—	—			破片
	482	541	除染谷	磁器	染付碗	—	(5, 8)	—	青花		見込 粘土目
	483	543	除染谷	磁器	染付碗	—	(5, 6)	—			底面 裏胎 回転ヘラ切り
	484	517	地滑り部	灰釉陶器	皿	—	(8, 05)	—			見込 蛇ノ目輪割ぎ 底面 裏胎
	486	577	地滑り部	白磁	碗	—	—	—			外面 摺擦文
	487	526	地滑り部	緑釉陶器	坏	—	(4, 2)	—			底面 裏胎 回転糸切り
	488	563	地滑り部	緑釉陶器	坏	—	—	—			底面 回転糸切り
	489	524	地滑り部	青磁	坏	(10, 5)	—	—			底面 裏胎 見込 輪だまり 粘土目
	490	580	地滑り部	白磁	皿	—	—	—			口唇端部 口巻
	491	579	地滑り部	白磁	碗	—	—	—			
	492	520	地滑り部	陶器	甕	—	(8, 6)	—	讃州 2類		見込 粘土目
	493	67	II	白磁	碗	—	—	—			
	494	45	地滑り部	白磁	碗	—	—	—	古代		縁割あり
	495	48	地滑り部	青磁	碗	—	—	—			
	496	50	地滑り部	白磁	碗	—	(5, 2)	—			
	497	533	地滑り部	白磁	小皿	(9, 1)	(4, 3)	1.7			見込 蛇ノ目輪割ぎ 粘土目 底面 裏胎
	498	555	地滑り部	白磁	坏	(15, 2)	—	—			
	499	581	地滑り部	白磁	碗	—	—	—			
	500	585	地滑り部	青磁	碗	—	—	—			外面 書文
501	575	地滑り部	青磁	坏	—	—	—	同安窯系		内面 ヘラ擦文	
502	582	地滑り部	白磁	碗	—	—	—				
503	584	地滑り部	白磁	碗	—	—	—			口縁 玉縁	
504	54	地滑り部	白磁	碗	—	—	—				
505	49	地滑り部	緑釉陶器	不明	—	—	—				
506	548	地滑り部	青磁	碗	(15, 6)	—	—			外面 蓮弁文	
507	578	地滑り部	青磁	碗	—	—	—	同安窯系		内面 ヘラ擦文	
508	47	地滑り部	青磁	碗	—	—	—	肥前			
509	46	地滑り部	白磁	碗	—	—	—				
510	44	地滑り部	磁器	合子蓋	—	—	—	青白磁合子		蓮弁文	
513	51	地滑り部	白磁	碗	—	—	—			内外面貫入	

第13表 出土土器観察表

掲載頁 図番号	実測 番号	遺構等	種別	器種	法量 cm (): 度数			産地	時期	備考	
					口径	底径	器高				
p. 50 第50図	513	51	地滑り部	白磁	碗	—	—			内外面貫入	
	514	529	地滑り部	青磁	坏	(4.0)	—			底面 露胎 回転ヘラ切り	
	515	527	地滑り部	青磁	坏	(5.6)	—			底面 露胎	
	520	518	地滑り部	灰軸陶器	皿	(7.8)	—			底面 回転ヘラ切り	
	521	525	地滑り部	緑軸陶器	皿	(8.0)	—			ケズリ出し高台	
p. 51 第51図	522	523	地滑り部	緑軸陶器	坏	(6.4)	—			底面 露胎	
	523	532	地滑り部	緑軸陶器	坏	(6.8)	—			底面 露胎	
	524	52	地滑り部	磁器	碗	(2.8)	—			内面貫入	
	525	593	地滑り部	陶器	壺	—	—	常滑			
	526	576	地滑り部	緑軸陶器	器種不明	—	—				
p. 52 第52図	527	552	SM7	青磁	坏皿融着	—	—			2個体融着	
	529	595	SH588	磁器	碗	—	—				
	530	594	SH58	灰軸陶器	高台付坏	—	—			底面 回転ナデ	
	531	41	胎没谷	陶器	天目茶碗	—	—	瀬戸美濃			
	532	550	SE1	陶器	急須	—	—				
	533	596	SE1	陶器	挿鉢	—	—				
	534	554	SE1	磁器	染付広東碗	(9.8)	(5.4)	5.4	広東	見込 文様 墨付 アルミナ	
	535	535	SE1	青磁	坏	(6.35)	—			底面 回転ナデ	
	536	559	SE1	青磁	坏	(11.5)	—	中国龍泉窯系		外面 蓮弁文	
	542	591	SE1	陶器	輪花皿	—	—				
	543	574	4Tr	青磁	碗	—	—	同安窯系I類		外面 ヘラ描文 内外面 柳目文	
	544	549	5Tr	磁器	染付碗	(6.0)	—				
	545	522	10Tr	白磁	坏	(4.6)	—				
	546	565	11Tr	陶器	天目茶碗	(11.8)	(4.2)	6.25	瀬戸美濃?		
	p. 53 第53図	547	551	表土中	磁器	染付碗	(4.5)	—	中国隆州窯系		底面 露胎 回転糸切り
548		534	表土中	青磁	碗	(6.0)	—			底面 露胎 回転ヘラ切り	
549		553	表土中	陶器	碗	4.4	—		近世	底面 露胎 見込 目跡	
550		547	表土中	陶器	壺	(9.6)	—			見込 スタンプ文	
551		561	表土中	陶器	壺	(10.2)	—			見込 胎土目 内面 刷毛文 底面 露胎	
552		544	表土中	青磁	碗	(5.4)	—			底面 露胎 回転ヘラ切り 見込 スタンプ文	
553		540	表土中	陶器	碗	(3.8)	—			三日月高台 見込 胎土目	
554		560	表土中	陶器	碗	(13.2)	—				
555		546	表土中	陶器	急須	(7.2)	—			外面 スス付着	
556		539	地滑り部	陶器	碗	(3.6)	—			底面 ケズリ出し高台 回転ヘラケズリ 見込 目跡1カ所	
557		563	表土中	陶器	挿鉢	(29.0)	—		近世		
558		542	表土中	磁器	碗	(4.4)	—			見込 胎土目	
559		562	表土中	陶器	壺	—	—		近世	胎付突帯	
561		557	表土中	白磁	坏	(15.0)	—				
562		558	表土中	白磁	坏	(16.0)	—			口唇部 ロハギ	
p. 54 第54図	563	528	表土中	白磁	坏	(16.85)	—				
	564	567	表土中	白磁	碗	—	—	大宰府編年白磁碗IV類		口縁 玉縁	
	565	587	表土中	青磁	碗	—	—			内面 ヘラ描文 柳目文	
	566	573	表土中	青磁	坏	—	—			外面 蓮弁文	
	567	589	表土中	青白磁	舎子身	—	—				
	568	571	表土中	白磁	坏	—	—				
	569	572	表土中	緑軸陶器	坏	—	—				
	570	569	表土中	白磁	坏	—	—			口縁 玉縁	
	571	568	表土中	白磁	碗	—	—			口縁 玉縁	
	572	521	表土中	青磁	坏	(6.0)	—			ケズリ出し高台	
	573	570	表土中	青磁	碗	—	—	越州窯系			
	574	531	表土中	白磁	碗	(8.1)	—			底面 露胎	
	575	538	表土中	青磁	坏?	(4.0)	—			底面 露胎	
	576	588	表土中	青磁	碗	—	—	中国龍泉窯系		外面 露胎蓮弁文	
	577	536	表土中	青磁	坏	(5.1)	—				
578	530	表土中	白磁	壺	—	—			基部径5.2cm		
579	519	表土中	緑軸陶器	坏	(4.8)	—	越州I類		目跡2カ所		
580	586	表土中	青磁	碗	—	—					
581	566	表土中	陶器	挿鉢	—	—		近世I期			
582	545	表土中	陶器	鉢	(16.8)	(9.2)	6.0		底面 回転糸切り		
583	537	表土中	青磁	碗	(4.7)	—			底面 露胎 回転ナデ		
584	592	表土中	陶器	壺	—	—					
585	556	表土中	磁器	染付皿	(13.6)	(5.2)	3.6		外面 圓縁 内面 圓縁 花茎文 墨付アルミナ		
p. 55 第55図	591	49	確認 4T	青磁	碗	(5.0)	—		古代		
	609	452	確認 9T	陶器	坏	4.45	—			底面 回転糸切り ナデによる胎付	

第3章 自然化学分析

株式会社 古環境研究センター

第1節 はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素(^{14}C)の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土器附着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である(中村, 2003)。

第2節 試料と方法

試料は、堅穴建物や土坑などから採取された計5点である。表1(左側)に、試料の詳細と前処理・調整法(AAA処理:酸-アルカリ-酸処理)および測定法を示す。

第3節 測定結果

加速器質量分析法(AMS: Accelerator Mass Spectrometry)によって得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素(^{14}C)年代および暦年代(較正年代)を算出した。表1(右側)にこれらの結果を示し、図1に各試料の暦年較正結果(較正曲線)、図2に暦年較正年代マルチプロット図を示す。

第1項 $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25 (‰)に標準化することで同位体分別効果を補正している。

第2項 放射性炭素(^{14}C)年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、現在(AD 1950年基点)から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5568年を用いている。統計誤差(±)は $1\sigma^{68.2\%}$ (68.2%確率)である。 ^{14}C 年代値は下1桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下1桁を丸めない暦年較正年代値も併記した。

第3項 暦年代(Calendar Years)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを較正することで、放射性炭素(^{14}C)年代をより実際の年代値に近づけることができる。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な ^{14}C 測定値およびサンゴのU/Th(ウラン/トリウム)年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータはIntCal 13、較正プログラムはOxCal 4.3である。

暦年代(較正年代)は、 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCalの確率法により $1\sigma^{68.2\%}$ (68.2%確率)と 2σ (95.4%確率)で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の $1\sigma \cdot 2\sigma$ 値が表記される場合もある。()内の%表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布、二重曲線は暦年較

正曲線を示す。

第 14 表 町ノ前遺跡の放射性炭素年代測定結果

遺構名	$\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$	14C年代 暦年校正 用年代	暦年校正年代	
			1 σ (68.2%確率)	2 σ (95.4%確率)
① SC11	-27.49 \pm 0.43	740 \pm 20 741 \pm 22	cal AD 1264-1280 (68.2%)	cal AD 1246-1289 (95.4%)
② 焼土遺構	-28.04 \pm 0.41	1330 \pm 20 1326 \pm 24	cal AD 657-690 (63.0%) cal AD 753-759 (5.2%)	cal AD 652-715 (80.4%) cal AD 744-765 (15.0%)
③ SA3 カマド	-29.06 \pm 0.37	1120 \pm 20 1117 \pm 22	cal AD 895-928 (35.7%) cal AD 941-969 (32.5%)	cal AD 887-984 (95.4%)
④ SA1 カマド	-27.54 \pm 0.45	1100 \pm 20 1104 \pm 24	cal AD 898-925 (30.2%) cal AD 945-979 (38.0%)	cal AD 890-990 (95.4%)
⑤ SH64 炭化材	-28.76 \pm 0.39	1120 \pm 20 1222 \pm 22	cal AD 726-738 (9.5%) cal AD 768-779 (9.6%) cal AD 790-830 (28.2%) cal AD 837-866 (20.8%)	cal AD 695-700 (0.8%) cal AD 710-745 (17.5%) cal AD 764-884 (77.1%)

第 4 節 所見

加速器質量分析法 (AMS) による放射性炭素年代測定の結果、① (SC9) では 740 \pm 20 年 BP (2 σ の暦年代で AD 1246 ~ 1289 年)、② (焼土遺構) では 1330 \pm 20 年 BP (AD 652 ~ 715, 744 ~ 765 年)、③ (SA3 カマド焚口) では 1120 \pm 20 年 BP (AD 887 ~ 984 年)、④ (SA1 カマド内) では 1100 \pm 20 年 BP (AD 890 ~ 990 年)、⑤ (SH64 炭化材) では 1220 \pm 20 年 BP (AD 695 ~ 700, 710 ~ 745, 764 ~ 884 年) の年代値が得られた。このうち、③と④は年代値が近く、暦年代が AD 890 ~ 980 年の範囲で重複している (図 2)。

なお、樹木 (炭化材) による年代測定結果は、樹木の伐採年もしくはそれより以前の年代を示しており、樹木の心材に近い部分や転用材が利用されていた場合は、遺構の年代よりも古い年代値となることがある。

文献

- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の 14C 年代編集委員会編「日本先史時代の 14C 年代」。日本第四紀学会, p. 3-20.
- 中村俊夫 (2003) 放射性炭素年代測定法と暦年代校正。環境考古学マニュアル。同成社, p. 301-322.
- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- Paula J Reimer et al., (2013) IntCal 13 and Marine 13 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55, p.1869-1887.

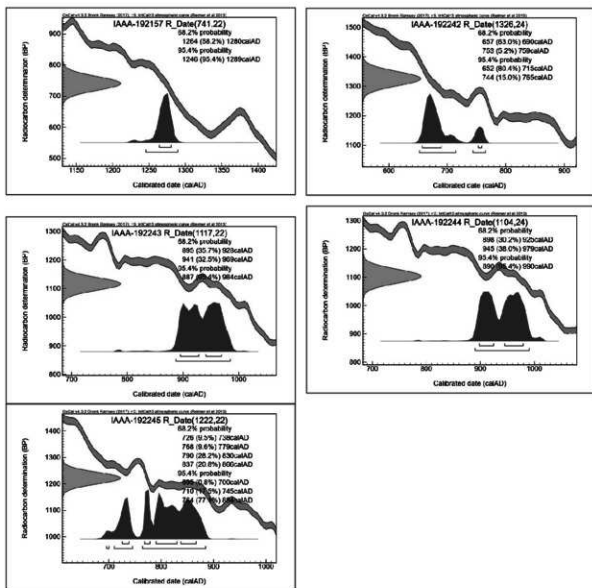


図 1 暦年較正結果

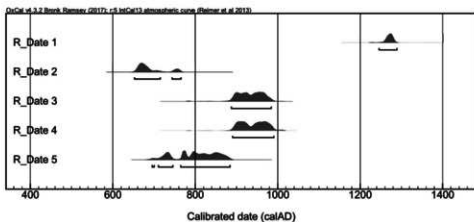


表 町ノ前遺跡の暦年較正年代マルチプロット図

第4章 総括

縄文時代

縄文時代は、アカホヤを挟んで早期と後期の遺構・遺物が確認された。

縄文時代早期の遺構は陥し穴状遺構が8基検出された。幅が狭く二か所の逆茂木痕を伴うものが主体である。ただSC8は幅広で多くの逆茂木痕を伴っており、時期差が考えられる。包含層からの遺物がごく少量に留まるのは、陥没谷や地滑りもある複雑な地形を呈していたためであろう。当時調査地の大半は罌場もしくは狩場だったと推測される。

縄文時代後期は石鍾が集中して出土したが、それ以外の遺物が少ないので様相が定かでない。この時期曾井遺跡では縄文時代後期の遺物が造成層から多量に確認され台地上に集落が存在したと推測される。調査地はその生活圏の一部と推測される。

弥生時代・古墳時代

弥生時代の遺構は確認されていないが、遺物は陥没谷と地滑り部分の底面から出土しており、造成と共に混入したと考えられる。出土土器は中期にあたる。周辺では家次遺跡や福神屋敷遺跡において弥生時代の遺物が多く確認されており、調査地にも小規模ながら集落が存在したことを窺わせる。

古墳時代も遺構は確認されておらず、遺物は地滑り部分からの出土である。提瓶は把手の形状から6世紀前葉～中葉と考えられる。管玉の出土も併せて古墳の存在が窺えるが、模倣坏は集落から出土することが多く、現時点では推論に過ぎない。

古代

SB4は9間×2間であり、そのような配置は所謂「長舎」に類似する(長2014)。この遺構は、周辺では西都市松本原遺跡や古城第2遺跡で確認例がある(今塩屋 毅行・日高広人・高村哲2020、宮崎市教育委員会2015)。

SA3について、9m×8.6mという規模は県内の堅穴建物でも突出している。建物内の柱穴は不規則かつ小規模であり明確ではなかったが、遺構の小穴は堅穴建物に関連する可能性が高い。なお、このような小穴の類例として下耳切第3遺跡のSA18が考えられる(宮崎県埋蔵文化財センター2006)。煙道は長く、カマド体部と共に白色の粘土を用いている。宮崎平野には長い煙道を伴う堅穴建物は下田畑遺跡(宮崎県教育委員会1985)や京園遺跡(宮崎市教育委員会1998)で類例があるが、本例はより大規模である。

出土遺物に目を転じると、SA3や一括廃棄から出土した「手持ちヘラケズリ」による丸底坏は、これまで市内でも陣ノ内遺跡等で確認例があったが、今回の調査でまとまって出土した。このほか黒色土器は、坏以外に皿形や鉢形など多くの器種が確認され、本遺跡独自の特徴といえる。布痕土器の多さも特徴に挙げられる。市内の遺跡でも卓越した量であり、遺跡の「公」的な性格を強く浮き立たせている。更に白磁、灰釉陶器、越州窯青磁などの輸入陶磁器や緑釉陶器など国産華奢品は、宮崎平野では最多クラスである。また平石等中央政権との文化的つながりを

示す遺物も出土している。

調査区内の変遷について考察すると、

- ・SB1 と SB2、SB3 と SB4 の方位はほぼ同一であることから同時性が想定できる。
- ・年代測定結果、焼土遺構と SH64、SA1 と SA3 の時期が接近する。
- ・SA1 の土層堆積から SB4 → SA1 → SB2 と変遷する。

これらの材料から他の遺構も併せると、①期：焼土遺構・SH64 →②期：SB3、4 →③期：SA1、3 →④期：SB1、2 となる。

出土遺物を加えると、①期は出土遺物がないため検証不能だが、②期にあたる SB5 と③期の SA1・SA3 は堀田編年（堀田 2012）における第Ⅰ期～第Ⅱ期（8世紀末～9世紀中頃）にあたる。なお SA4 土坑から出土した甕は「金救型甕（今塩屋 2011）」にあたり、8世紀後葉～9世紀前葉に比定される事から SA1・SA3 と時期的接近が想定される。これに対し④期にあたる SB1、2 出土遺物は少量ながら堀田編年の第Ⅲ期（9世紀末～10世紀前葉）にあたることから、遺物のうえでも一応は前後関係を首肯しうる。SB4 における“仕切り”の存在も 8世紀以降とされており矛盾しない。なお「長倉」は 7世紀においては 7世紀代は屯倉とされているが、8世紀半ば以降その性格が弱まるとの指摘もある。SB4 はそれより更に後出であることから、建物の役割についてはここでは言及を避けたい。

沈降谷や地滑り部分の出土遺物は堀田編年第Ⅰ期が地滑り部で少量出土する程度であり、主体は第Ⅱ期・第Ⅲ期である。つまり調査区は、③の時期までに弥生時代の遺物包含層や古墳時代の遺構を伴う丘陵の一部を削平して地滑り部の谷を埋めた後、④の時期に沈降谷に拡大して一括廃棄を行い、平坦地となったと考えられる。

本遺跡は公的な性格を帯びる一方で独自性の強さも窺える。本遺跡について柴田博子教授（宮崎産業経営大学）からは「俘囚」に関連する可能性をご教示いただいた。俘囚に関しては近年宮崎平野の古代において、遺構・遺物の検討から存在が指摘されており（柴田 2023）、本遺跡の特徴はそれを示唆する可能性がある。今後研究が進展することを待ちたい。

中世

祭祀遺構と考えられる SC11 は炭化物から年代測定を行い、鎌倉時代後期～南北朝期と判明した。墓塚（SC12）は多くの出土遺物が確認された。長胴の土師器は予め欠損して副葬されたと考えられるが時期が判別しがたく、今後の検討が必要である。道路状遺構は地滑り跡の脇を通り丘陵上で終わっている。末端部は柱穴等の遺構がないため詳細は不明だが、板状を呈する大ぶりの円礫が複数存在することから「石場建て」による建物が存在した可能性も考えられる。出土した土師器等は祭祀遺構とは形態が異なっており、より後出と考えられる。南側にある掘立柱建物の周辺は近世の造成を免れて半島状の突出部が残されている。これは道路状遺構末端部と共に社寺等が建てられた結果ではないだろうか。

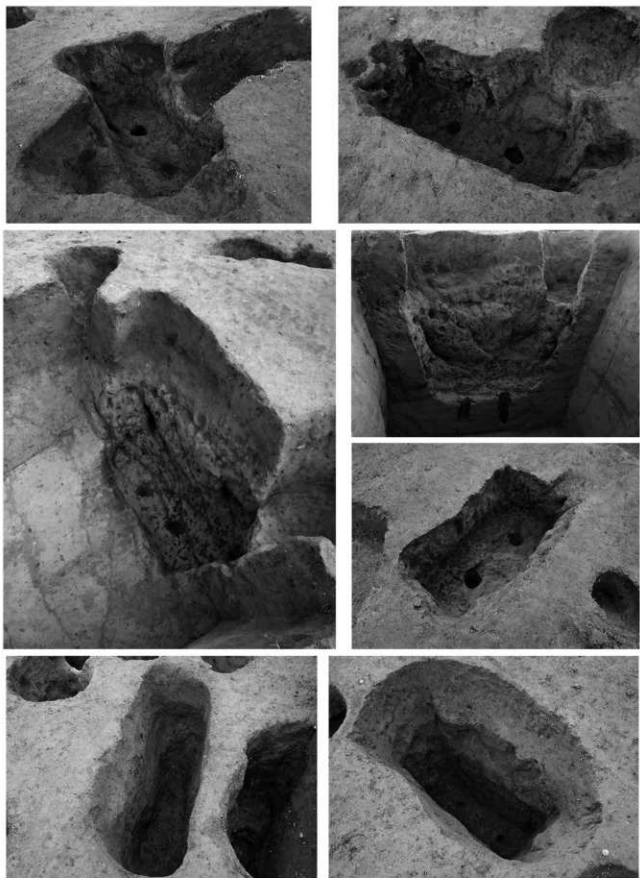
中世は祭祀性の強い土地利用が窺える。付近には在地権力者の屋敷であるぎによもん屋敷遺跡があり、町ノ前遺跡はその祭祀空間であった可能性が考えられる。

近世

調査区の東側に深さ 1m に及ぶ大規模な造成が行われ、一段低い段が設けられた。造成は複数回にわたったと考えられ、中央がより古く、その後に南と北に拡張したと考えられる。造成の中央では SB7 を検出した。この造成が中世の SB5 や近世の経石に隣接することや、SB7 の位置が造成の中央部にあたることから、SB5 より後出の社寺等と推測される。造成は上段にも及んでおり、その平坦面には SB6 やピット群が分布する。つまり中世以来の祭祀空間が近世に拡大した可能性が推測される。調査地の小字名は町ノ前であるが、近世は丘陵下に町が営まれ、調査地は祭礼の場であったと推測される。

(参考文献)

- 今塩屋 毅行 2011 「日向国における古代前期の土師器甕とその様相—時間軸の設定を目指して—」
『古文化談叢』第 65 集 (3)
- 今塩屋 毅行・日高広人・高村哲 2020 「宮崎県西都市松本原遺跡の「長舎」について」
『宮崎県埋蔵文化財センター研究紀要』第 5 集
- 近沢 恒典 2020 「都城盆地における古代土器編年について」
『大正大学考古学論集』大正大学考古学論集刊行会
- 堀田 孝博 2012 「宮崎平野部における平安時代の土器について—土師器供納具を中心に」『宮崎考古』第 23 号
- 堀田 孝博 2019 「陶磁器から見た南九州の海路」西都原考古博物館国際交流展開連講座資料
- 長 直信 2014 「九州における長舎の出現と展開—7 世紀代を中心に—」
『第 17 回 古代官衙・集落研究会報告書 長舎と官衙の建物配置 報告編』奈良文化財研究所
- 柴畑 光博 2022 「都城盆地における 8 世紀後半から 10 世紀の集落動態とその背景
—横市川流域の遺跡群を中心として—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 232 集
- 柴田 博子 2023 「令制「日向国」の誕生」西都原考古博物館企画展開連講座資料
- 宮崎県教育委員会 1986 『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第 3 集
- 宮崎市教育委員会 1998 『京園遺跡』宮崎市文化財調査報告書 第 34 集
- 都城市教育委員会 2014 『真米田遺跡』都城市文化財調査報告書 第 111 集 土師器・黒色土器編年
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2006 『下耳切第 3 遺跡 [第二分冊 古墳時代以降編]』
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 125 集
- 西都市教育委員会編 2006 『西都原遺跡』西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第 45 集
- 大分市教育委員会 2010 8 『下都遺跡群Ⅳ』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第 100 集



町ノ前遺跡陥し穴状遺構写真(上段左:SC1 上段右:SC2 2段目左、右:SC3 3段目右:SC4 下段目左:SC5、下段目右:SC6)



陥し穴状遺構写真
(上段左:SC7、上段右:SC8、2段目右:SC9)

2段目左:石錘集中遺構写真

下段目左:SA1検出状況

下段目右:SA1土層断面





SA2検出状況



SA2 完掘状況



SA3床面検出状況



SA3完掘状況



SA4検出状況



SA3カマド煙道完掘状況



SB1 完掘状況



SB2完掘状況



SB3 完掘状況



SB5 完掘状況



SG1検出状況



SC12 遺物出土状況



SG1遺物出土状況



SC11遺物出土状況



中世ビット群完掘状況



SB6完掘状況



SE1完掘状況



経石 検出状況



地滑り部 完掘状況



出土石鏃



出土石錘



縄文土器・弥生土器・古墳時代土器



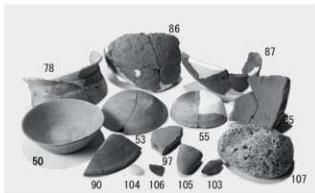
坏(古墳時代)



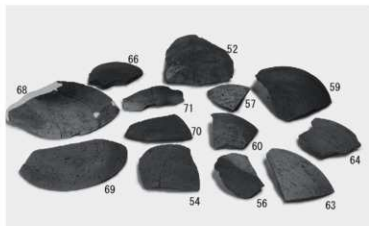
提瓶(古墳時代)



SA1出土遺物



SA3出土遺物



SA3出土遺物



SA3出土遺物



SA4出土土器



SC10出土土器



沈降谷出土土師器(古代)



沈降谷出土遺物(古代)



地滑り部出土土師器(古代・1)



地滑り部出土土師器(古代・2)



地滑り部出土土師器(古代・3)



地滑り部出土土師器(古代・4)



出土土錘



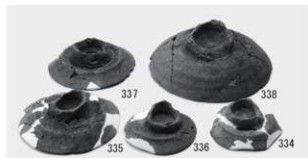
出土石製品・陶器



SC11出土土師器(中世)



SG1出土土師器(中世)



SC12出土土師器(中世)



地滑り部出土遺物(中世)



軽石



確認調査出土土師器

報告書抄録

ふりがな	まちのまえいせき		シリーズ番号	第144集		
書名	町ノ前遺跡		編集者名	金丸武司		
副書名	宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査		発行機関	宮崎市教育委員会		
巻次			所在地	〒889-1603 宮崎市清武町西新町1番地1		
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書		発行年月日	令和6年3月		
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査原因
まちのまえいせき 町ノ前遺跡	みやざきけんみやざきしきよたけちよ 宮崎県宮崎市清武町 かのうあざまちのまえかつ ほん ほか 加納字町ノ前乙382番1外	45210	36-012	31°52'42" 付近	131°24'16" 付近	宅地造成
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			
散布地	縄文時代	陥し穴状遺構、石鍾集積	土器、石器			
集落跡	弥生時代		土器			
調査期間	古墳時代		須恵器、管玉			
R元.6.10～ R2.3.25	古代	掘立柱建物、竪穴建物	土師器、黒色土器、須恵器、黒色土器、墨書土器 緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、平石			
調査面積 2,569㎡	中世	掘立柱建物、道路状遺構 工抗	土師器、陶器、滑石製石鍋、鉄器			
	近世	掘立柱建物、経石、井戸	磁器、陶器、経石			

宮崎市文化財調査報告書 第144集

町ノ前遺跡

令和6年3月

宮崎市教育委員会